

平城京左京八条一坊三・六坪
発掘調査報告書



県教育委員会

1985.3



土器埋納遺構 S X 3388



井戸 S E 3260と底の網代

序

この度、奈良市の南方、杏町に工場が建設されることになりましたが、この地は奈良の都、平城京の左京八条一坊三坪と六坪、朱雀大路に東接する重要な地にあたるため、その事前調査を実施することになりました。

発掘調査は、奈良国立文化財研究所に依頼いたしました。その結果、重要な遺構・遺物が発掘され、所期の成果を得ることができ、ここに報告書を上梓するはこびとなりました。本書を、今後の文化財保護、調査研究に活用していただければ幸甚です。

おわりに、本調査に御協力を賜わりました株式会社スギノテクノ、奈良国立文化財研究所、奈良市教育委員会の関係各位に感謝申しあげます。

昭和60年3月

奈良県教育委員会教育長

大島 寛

例　　言

- 1 本書は奈良市杏町197-1番地他における株式会社スキノテクノの工場建設に伴う発掘調査報告である。
- 2 調査は、奈良県教育委員会の委託を受けて、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が昭和59年8月から同年10月にかけて第160次調査として実施した。
- 3 調査には、森郁夫、高瀬要一、毛利光俊彦、松本修自、橋本義則、花谷浩が参加し、服部久士、河北秀実（三重県教育委員会）の補助を得た。
- 4 本書の作成は、当調査部々長岡田英男の指導のもとに調査員全員があたり、全体の討議を経て以下のように分担して執筆した。

I-1・2：森郁夫 I-3・II-1：毛利光俊彦 II-2-A：高瀬要一 II-2-B：松本修自・森・高瀬 II-2-C：花谷浩 II-3：橋本義則 II-4 花谷 III-1-A：毛利光 III-1-B：山崎信二 III-1-C・D：橋本 III-1-E：花谷 III-2：橋本・花谷 III-3-A：山崎 III-3-B：花谷 IV-1：高瀬 IV-2：松本 IV-3：森 IV-4：橋本 IV-5：毛利光
なお、種子の鑑定には大阪府立大学教授粉川昭平氏を患わせた。樹種の鑑定は当研究所埋蔵文化財センター光谷拓実、動物遺存体の鑑定は同・松井章が行った。
- 5 遺構・遺物の写真は、当調査部畠幹雄が担当し、図版の作成には八幡扶桑、杉本和樹、中島和彦の協力を得た。航空写真的撮影及び図化はアジア航測株式会社が行った。
- 6 本書の作成にあたり、奈良国立博物館から法隆寺献納御物（東京国立博物館保管）の写真（fig.43）、奈良市教育委員会から調査地周辺の航空写真（PL.3）の提供を受けた。
- 7 本書の編集は毛利光俊彦が担当した。原稿の浄書及び図面の整理にあたっては植野沢美の協力を得た。

目 次

I 序 章	1
1 調査に至る経過	1
2 周辺の地形と過去の調査成果	1
3 調査の概要	2
II 遺 跡	4
1 遺跡の概観	4
2 奈良時代の遺構	5
A 条坊遺構	5
B 三坪の遺構	6
C 六坪の遺構	11
3 中世の遺構	16
4 古墳時代の遺構	18
III 遺 物	26
1 奈良時代の遺物	26
A 瓦陶類	26
B 土器・特殊土製品	30
C 墨書き土器	46
D 漆紙文書	48
E 木製品・金属製品・石製品	52
2 中世の遺物	54

3 古墳時代の遺物	56
A 土器	56
B 木製器・石製品	60
IV まとめ	61
1 条坊復原	61
2 三・六坪の建物配置と時期区分	64
3 平城京の土器埋納遺構	69
4 中世における佐保川の変遷	71
5 結語	73

図 版

卷首 土器埋納遺構 S X 3388 (カラー)	PL.16 池状遺構
井戸 S E3260と底の網代	PL.17 井戸・土壤
PL.1 調査地航空写真	PL.18 土器埋納遺構
PL.2 調査地周辺航空写真 I	PL.19 中世河川
PL.3 調査地周辺航空写真 II	PL.20 古墳時代の建物
PL.4 中央調査区西半(三坪)航空写真	PL.21 穫穴住居跡
PL.5 中央調査区東半(六坪)航空写真	PL.22 古墳時代河川・溝
PL.6 北京・北西調査区航空写真	PL.23 瓦
PL.7 中央調査区西半(三坪)遺構全景	PL.24 奈良時代の土器 I
PL.8 三坪の建物 I	PL.25 奈良時代の土器 II
PL.9 三坪の建物 II	PL.26 奈良時代の土器 III
PL.10 北西調査区遺構全景	PL.27 墨書き器
PL.11 中央調査区東半(六坪)遺構全景	PL.28 漆紙文書
PL.12 六坪の建物 I	PL.29 漆紙文書(細部)
PL.13 六坪の建物 II	PL.30 奈良時代の木製品・金属製品・石製品
PL.14 六坪の建物 III	PL.31 古墳時代の土器
PL.15 条坊遺構	PL.32 古墳時代と中世の木製品・石製品

插 図

fig. 1 調査位置図		fig. 31 遺貝瓦・平瓦	28
fig. 2 平城京南辺部の調査位置図	1	fig. 32 半城京出土軒瓦	29
fig. 3 古墳時代河川の発掘状況	2	fig. 33 S K3300出土土師器	32
fig. 4 建物（六坪）の検出状況	2	fig. 34 S K3300出土須恵器	33
fig. 5 左京八条一坊（6 A H L）地区割図	3	fig. 35 S G3500中層出土土師器	34
fig. 6 空中写真測量標定点配置図	3	fig. 36 S G3500中層出土須恵器	35
fig. 7 中央調査区地図	4	fig. 37 S G3500中層等出土漆付着土師器	36
fig. 8 八条々間路土塁図	5	fig. 38 S G3800上層出土土師器	36
fig. 9 三坪造構模式図	6	fig. 39 S G3500上層出土須恵器	37
fig. 10 北西調査区造構図	8	fig. 40 S G3500下層出土土器	43
fig. 11 S G3500土層図	9	fig. 41 埋納土器・墨書き器・硯・土馬	45
fig. 12 土器埋納造構図	10	fig. 42 S G3500出土墨書き土器	47
fig. 13 S X3466杯内底鉢付着状況	10	fig. 43 御物四十八体仏光背	47
fig. 14 六坪造構模式図	11	fig. 44 曲物出土状況	52
fig. 15 北東調査区造構図	14	fig. 45 木製品・金属製品・石製品	53
fig. 16 S E3260平面・断面図	15	fig. 46 S D3340出土木製卒塔婆	55
fig. 17 S E3260井戸枠細部	15	fig. 47 S K3201出土木製品	55
fig. 18 織代美測図	15	fig. 48 S D3222・3311等出土土器	57
fig. 19 S D3340七層図	16	fig. 49 S D3400出土土器	58
fig. 20 S E3345	17	fig. 50 S K3177出土土器	59
fig. 21 S E3229	17	fig. 51 木製品・石製品	60
fig. 22 S X3453	17	fig. 52 条坊造構発掘調査位置図	61
fig. 23 古墳時代造構概略図	18	fig. 53 条坊復原概念図	62
fig. 24 古墳時代造構図（中央調査区西半）	19	fig. 54 三坪造構変遷図	64
fig. 25 S B3490平面・断面図	20	fig. 55 六坪造構変遷図 I	66
fig. 26 S D3400土層図	21	fig. 56 六坪造構変遷図 II	67
fig. 27 古墳時代清土塁図	22	fig. 57 三・六坪造構配置図（B期）	68
fig. 28 S K3177	22	fig. 58 左京八条四坊三坪土器埋納造構	69
fig. 29 古墳時代造構変遷図	25	fig. 59 土器埋納位置図（左京八条一坊二坪）	70
fig. 30 軒瓦	27	fig. 60 遺存地割・地名による旧河道復原図	72
		卷末折込 平城京左京八条一坊三・六坪造構図	

表

tab. 1 標定点座標値一覧表	3	tab. 7 墨書き土器一覧表	47
tab. 2 古墳時代掘立柱建物・樹一覧表	20	tab. 8 平城京出土漆紙文書一覧表	48
tab. 3 軒瓦一覧表	28	tab. 9 漆紙文書出土遺跡一覧表	52
tab. 4 土師器・皿法量表	30	tab. 10 復原条坊座標値一覧表	62
tab. 5 須恵器杯A法量表	39	tab. 11 条坊座標値一覧表	63
tab. 6 須恵器杯B法量表	40		

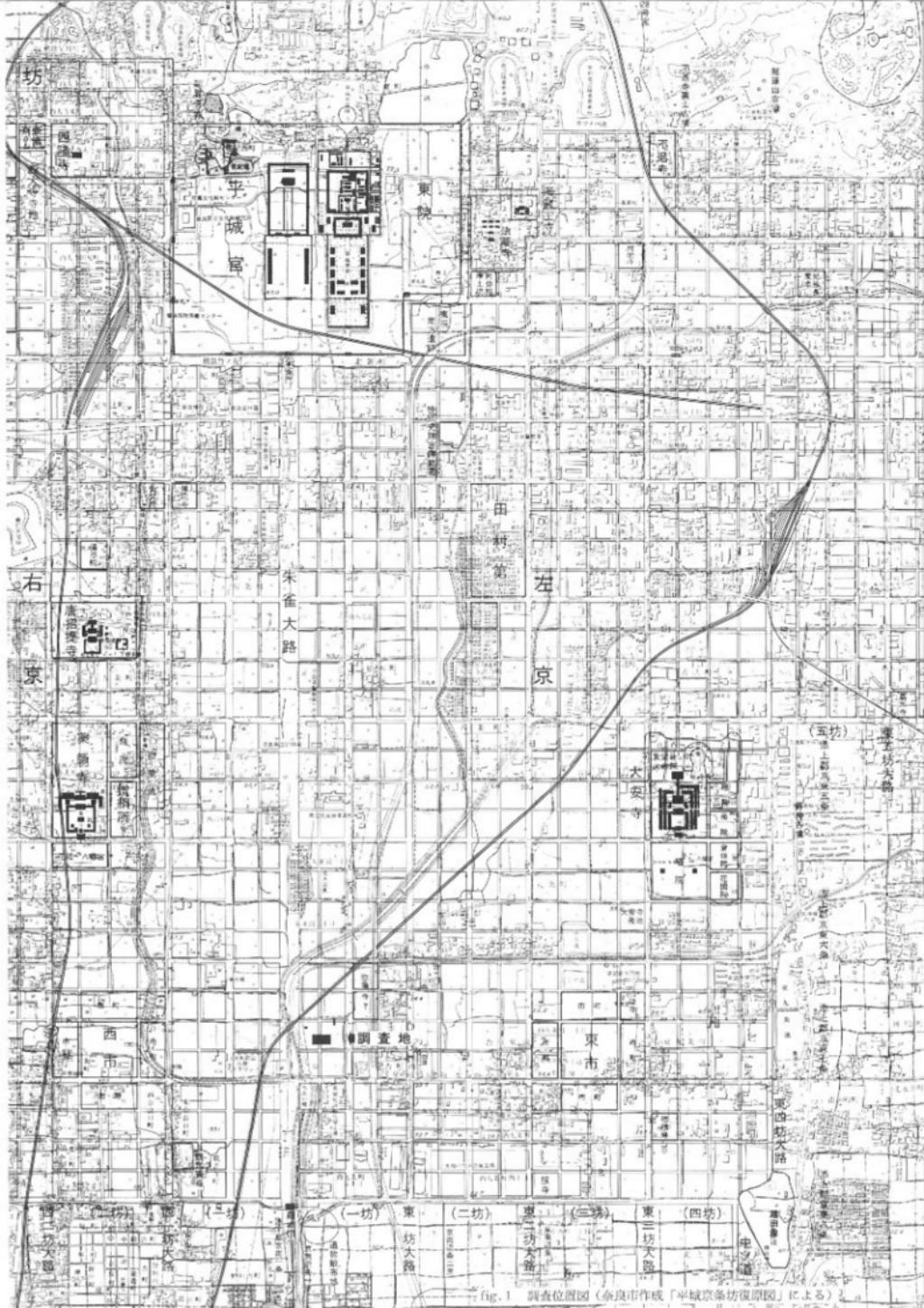


fig.1 調査位置図(奈良市作成「平城京条坊復原図」による)。

I 序 章

1 調査に至る経過

この報告は、奈良市杏町197-1他7筆の地における開発行為の事前発掘調査にかかるものである。開発当事者である株式会社スギノテクノからの発掘届出にもとづき、奈良県教育委員会を中心として各方面と協議を行った。開発予定地は面積が17,590m²と広大であり、平城京左京八条一坊三坪と六坪にわたること、さらに朱雀大路に接する地であることから、重要な遺構の存在が予想され、発掘調査を必要とするとの結論に達した。奈良県教育委員会から株式会社スギノテクノへその旨を申し入れた結果、その協力を得、建物の建設予定地約3,000m²を主な対象地として調査を行うことになった。調査は、奈良県教育委員会の依頼を受け、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が実施した。

2 周辺の地形と過去の調査成果 (fig. 1・2・PL. 2・3)

調査地の周辺は、工場や住宅の建設が著しく進行しているが、以前は水田が広がっていた。付近の水田面は標高53.2m前後で、南と西に漸次低くなる。調査地の北方約300mでは、岩井川が平城京の七条大路上を西流し、佐保川に合流する。佐保川は岩井川との合流点で南西から南に方向をかえ、調査地のすぐ西側、平城京の朱雀大路上を流れる。調査地周辺では東西、あるいは南北に連なる水田から条坊復原が行われている。調査地内の三・六坪間の小路は水路にその痕跡をとどめている程度であるが、六坪にあたる地域の字名は「六ノ坪」である。また、調査地の西・北・南はそれぞれ朱雀大路、五・六坪々境小路に接している。

過去、平城京と南辺における発掘調査 (fig. 2) は羅城門地域 (1)、九条大路沿い (2・3)、左京八条一坊 (4)、同八条三坊 (5・6)、同九条三坊 (7)、右京八条一坊 (8) 等で実施され、大きな成果をあげられている。すなわち、大路や小路の検出によって平城京の条坊復原が次第に精緻になるとともに、京南辺においても1坪分の宅地班給 (左京九条三坊三坪) や官の漆器工房 (右京八条一坊十一坪) が存在した可能性が示された。また、左京八・九条三坊と、右京八条一坊においては、それぞれ幅約10mの堀河が検出され、京内における物資運搬の解明に恰好の資料が得られた。さらに、これらの堀河や九条人路側溝では人形などの呪術に関する遺物の出土が顕著であり、平城京内における祭祀研究の一助となっている。

註1 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972

註2 奈良国立文化財研究所『平城京九条大路』

1981 奈良市教育委員会『巾道九条線関係遺跡発掘調査概報』I・II 1983・1984

註3 1972年奈良国立文化財研究所発掘 (1坪)

註4 奈良県『平城京左京八条一坊発掘調査概報』1976、奈良國立文化財研究所『平城京東堀河』1983

註5 奈良國立文化財研究所『昭和57年度平城宮跡発掘調査概報』1983

註6 奈良國立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984



fig. 2 平城京南辺の調査位置図

3 調査の概要

発掘調査は平城京左京八条一坊三坪と六坪にまたがる東西約80m、南北約39mの中央調査区と、朱雀大路近くに設定した東西約12m、南北約4mの北西調査区、八条々間路上に設定した南北約25m、東西約3mの北東調査区とで行った。奈良国立文化財研究所が設定している平城京の地区割では、中央調査区が6 AHL-Q区、北西調査区が6 AHL-R区、北東調査区が6 AHL-R・S区になる（fig. 5）。

調査は、昭和59年8月7日から厚さ約1mの盛土を重機によって排土することから始めた。8月17日には排土がほぼ完了し、中央調査区から本格的な発掘調査に入った。遺構の検出が完了したのは10月4日で、空中写真測量のち補足調査を行ない、10月26日に調査を終了した。調査面積は約3,300m²で、開発総面積17,590m²の約2割にあたる。

調査の結果、古墳時代、奈良時代及び中世の遺構を検出し、多量の遺物を発掘した。

まず、奈良時代では八条々間路と八条一坊三・六坪の坪境小路の存在を確認するとともに、各坪内の利用状況の一部を明らかにすことができた。特筆すべき成果としては、三・六坪とも建物は奈良時代を通じてはば4時期の変遷が認められること、三坪では坪の中央やや東寄りに池状の遺構があり、1坪もしくはそれ以上の占地が考えられること、六坪では西辺の中央部に広場があり、井戸を伴うことなどを指摘できる。なお、井戸は底に網代を敷いたもので稀有の発見となった。

次に、中世の遺構としては、三・六坪の坪境小路上を正南流する幅約22m、深さ約2.8mの河川を検出し、この河川が人為的なものであること、また調査地の西方約80mの地点を流れる佐保川がかつてはこの位置にあったことをはば確認できた。

古墳時代では中央調査区の西半部を中心に5・6世紀の多数の掘立柱建物と若干の堅穴住居跡、さらには堰を伴う河川及び数条の溝を検出した。建物は大きく4時期の変遷があり、調査例の少ない古墳時代集落の研究に恰好の資料を得ることができた。

奈良時代の遺物は主に土器で、三坪の池状遺構と六坪の土壠からまとまって出土した。他に100点をこえる墨書き土器や若干の硯・土馬もある。また、住穴からは漆紙文書の残る曲物容器が出土した。瓦は比較的少量であった。中世の遺物としては河川から出土した木製板卒塔婆が1点ある程度だが、古墳時代の遺物が多い。主に土器で、河川からまとめて出土した。

註1 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』1975



fig.3 古墳時代河川の発掘状況



fig.4 建物（六坪）の検出状況



fig. 5 左京八条一坊 (6 AHL) 地図割 1 : 6000

番号	X	Y	Z	番号	X	Y	Z
1	-149,000,400	-18,469,255	54,354	45	-149,041,563	-18,469,692	52,266
3	"	-18,441,234	54,303	46	-149,051,571	-18,469,255	54,213
5	"	-18,413,555	54,326	50	"	-18,451,156	54,387
8	-149,014,562	-18,458,990	52,190	52	"	-18,453,268	54,388
12	"	-18,424,376	52,576	54	"	-18,415,141	54,376
16	"	-18,393,101	54,203	56	"	-18,507,089	54,138
25	-149,023,581	-18,404,925	52,609	57	-148,978,327	-18,512,953	54,008
28	-149,032,655	-18,478,400	54,206	59	"	-18,501,802	52,361
32	"	-18,441,809	52,191	62	-148,966,297	-18,380,555	54,104
39	-149,041,563	-18,460,245	52,378	65	-148,950,418	"	53,774
43	"	-18,424,658	52,486	67	-148,936,670	"	54,385



tab. 1 標定点座標値一覧表

撮影仕様

撮影日時 1984. 10. 5
飛行機 川崎ペルKH4
カメラ ファイスクRMK-A
レンズ 焦点距離150mm
フィルム コダックTRI-X
撮影縮尺 1/250, 1/550, 1/850
撮影高度 37.5m, 82.5m,
127.5m
縮 尺 1/500
枚 数 8
度合標正機 ファイスクEG-V
プリンター 電子プリンター
マークII
撮像機 パーソマット11C型

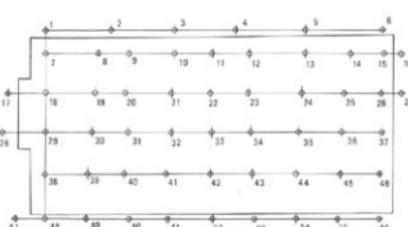


fig. 6 空中写真測量標定点配置図

II 遺 跡

1 遺跡の概要

土層 調査地は資材置場として利用されていたために厚い盛土が施されているが、以前は水田であった。水田耕土・床土下には、地山までの間に灰白色ないし灰褐色砂礫、青灰色砂質土、黄灰褐色砂質土、暗灰褐色粘質土及び暗茶褐色粘質土の大路5層の堆積がある。

最上層の砂礫は厚さ10~40cmで、調査区全体に認められた。近世における佐保川の氾濫に伴うものと考えられる。青灰色砂質土は厚さ10~20cmで、中央調査区の西半部と北西調査区に認められた近世の堆積である。黄灰褐色砂質土は厚さ20~40cmで、調査区全体に認められた。瓦器片を含み、鎌倉時代頃の堆積と考えられる。暗灰褐色粘質土は厚さ10~20cmで、中央調査区の西半部に比較的厚く、他では部分的に認められた。奈良時代の遺物包含層である。暗茶褐色粘質土は中央調査区の南西部に部分的に認められた。古墳時代の遺物包含層である。

地山 (fig. 7) 調査地の地山は大部分が黄褐色粘質土であるが、中央調査区の東辺部ではこの上にやや軟質な暗黄褐色粘質土が堆積する。黄褐色粘質土は東南部で厚さ約30cmであるが、西と北では薄く下の淡褐色粗砂が帶状にあらわれる。黄褐色粘質土は厚さ60~90cmで、厚さ約40~80cmの青灰色シルト層をへて、木葉や樹木を多量に含む黒褐色粘質土と灰色細砂の互層に至る。木葉や樹木を多量に含む層は、上面の標高が約50.7mで、奈良盆地形成以前の最終氷河期の湖沼堆積（ミツガシワ層）^{註1}と推定される。黄褐色粘質土上面の標高は、中央調査区の北東部と北東調査区とが最も高く約52.5m、中央調査区の南西部が最も低く約52.2mである。

造構 検出した主な造構は奈良時代と古墳時代に属し、他に中世の造構が若干ある。奈良時代と、大部分の古墳時代の造構は地山面で検出し、中世の造構は黄灰褐色砂質土面で検出した。

奈良時代の造構には掘立柱建物47棟、掘立柱塀8条、溝7条、道路2条、池状造構1、井戸1基、土器埋納造構3基のほかいくつかの土壙がある。これらは平城京左京八条一坊三・六坪の坪境小路、八条々間路および三・六坪々内の造構であり、大きく4時期に区分できる。

中世の造構には三・六坪の坪境を南北流する幅約22mの河川1条がある。他に中世末ないし近世に属する井戸、土壙及び溝があるが、まとまりに欠ける。

古墳時代の造構には掘立柱建物35棟以上、窓穴住居跡3棟、掘立柱塀6条、河川1条、溝10条のほかいくつかの土壙がある。5世紀末から6世紀前半を中心として形成された集落で、ほぼ4時期に区分できる。

なお、各造構には奈良国立文化財研究所が実施している平城京左京の調査基準に従って一連

の番号と、造構の種類を標示する記号、例えば建物—S B、築地・塀—S A、溝—S D、園池—S G、道路—S F、広場—S H、井戸—S E、土壙—S Kの記号を付した。

註1 この層は西方約450mの地点でも検出している。奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十坪』1984



fig. 7 中央調査区地山

2 奈良時代の遺構

A 条坊遺構 (PL.15、巻末折込)

今回の調査では平城京の条坊に関連する遺構として、八条々間路1条、八条々間路に平行する堀1条、三・六坪の坪境小路の東側溝1条、坪境小路に面する門1棟を検出した。以下、それぞれの遺構の概要を述べる。

SD772・773、SF796 八条々間路を確認すべく設けた北東調査区で検出した2条の平行する東西溝と、その間に位置する道路の路面である(fig. 8)。SD773は南溝で、幅が1.5m、深さが約0.3mである。溝の堆積土は一様に暗灰褐色粘質土で、ここから奈良時代後半の土器が出土した。一方、SD772は北溝で、幅が2.7m、深さが0.6mである。溝の底には灰色粘質土が約10cmの厚さで堆積し、その上を黄灰色及び茶褐色砂質土が覆う。土器片を包含するものの、いずれも小片であり、胎内から奈良時代の土器であることが知られるにとどまる。両溝の間に位置する遺構は、両溝が心心距離で約9.7m隔たっており、条間路の幅員として適切であること、両溝間に遺構がないこと、条間路想定位置であることなどから、八条々間路の路面とその両側溝と考えることができる。

SA3535 八条々間路南側溝SD773の南に、東西に並ぶ2個所の柱穴である。掘形は大きさが一辺0.6m程度で、深さ約0.2mとかなり削平されている。柱間寸法は約1.8mで、SD773の南肩から柱筋の心までは1.3mである。発掘範囲が狭く、断定はできないが、六坪の北を画す板塀であるか、あるいは築地に開く掘立柱の門であろう。

SD3333 中央調査区のほぼ中央部に位置する南北溝で、延長37mにわたって確認された。溝の西肩はほとんど残っていないが、比較的破壊の及んでいない調査区北端で復原すると、幅約1.8mとなる。深さは約0.4mである。溝の埋土は、上から黄茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、暗灰色粘質土の3層で、溝が順次埋没していく様相を呈する。奈良時代中頃の軒瓦を包含することや、その位置・規模などから三坪と六坪の境をなす小路の東側溝と推定できる。

SB3320 三・六坪の坪境小路SD3333の東に沿って2個所の柱穴が南北に並ぶ。掘形はともに一辺30~40cm、深さ約0.4mと小さいが、北の柱穴には径約15cmの柱根が残る。柱根は検出時、北西方向に傾いていた。柱間寸法は約2.2m(7.5尺)であり、SD3333の東肩から柱筋までは約0.7mと接続する。六坪を南北にほぼ三分する位置にあり、小路に開く門である可能性が高い。これを門とすると小路に沿う築地もしくは塀が必要となる。門の延長上には柱穴が残存しないので掘立柱を伴う板塀等は想定しにくい。築地の積土等は残存しないが、小規模な築地がこの門に取り付いていたのであろう。

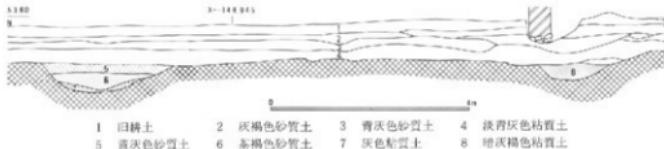


fig. 8 八条々間路土層図 1 : 100

B 三坪の遺構 (fig.10、PL. 4・7・10、巻末折込)

主な遺構には掘立柱建物19棟、掘立柱塀2条、池状遺構1、土器埋納遺構3基がある。

建物・塀・溝 (fig. 9) 中央調査区の西半部、後述する池状遺構 S G 3500の東岸で建物14棟、北西調査区で建物5棟、塀2条、溝2条を検出。三坪の東辺には中世河川 S D 3340があり、北西調査区も面積が狭いため、部分的な検出に終ったものもある。建物規模は概して小さい。

S B 3350 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東片廻付南北棟。柱間寸法は桁行2間分3.8m・1.9m等間。身舎梁間3.4m、扉の出2.4m。方位は国土方眼方位 (以下「方眼」と略記) ほぼ一致。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈するが、西側柱筋の北から3番目 (「北3」と略記、以下同様) の柱穴は検出されなかった。東側柱北1・3、東側柱筋北1・2・3、西側柱筋北1の掘形に、径約20cmの柱痕跡を留める。東入側柱筋がS B 3410の東側柱筋と一致し、東側柱筋がS B 3445の東側柱筋とはば彌う。

S B 3360 中央調査区の南西部で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟。寸法は桁行1間が2.0m、梁間4.8mである。方位はほぼ方眼。柱掘形は径約0.5mの不整円形を呈する。

S B 3401 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。寸法は桁行総長5.9m、柱間1.96m等間、梁間3.5m、方位はほぼ方眼にあう。柱掘形は一辺約0.5mの隅丸方形、ないしは長円形を呈し、北妻柱および西側柱北1・2・4の掘形に径約20cmの柱痕跡を留める。S B 3415の柱掘形と重複しており、それより新しいことを知る。

S B 3405 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は北でやや東に振る。寸法は桁行総長5.7m、柱間1.9m等間、梁間3.5m。西側柱筋北2と南妻柱の柱穴は検出されなかった。掘形の大きさは径0.4m前後の不整形で一定せず、東側柱筋北2・3の掘形には径約15cmの柱痕跡を留める。西側柱筋北3の柱穴から8世紀後半頃の須恵器杯蓋が出土した。

S B 3410 (PL. 9) 中央調査区の南西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。寸法は桁行総長5.6m、柱間は中央間2.0m、両脇間1.8mと、中央間がやや広い。梁間3.6m。柱掘形は一辺0.4~0.7mの隅丸方形で、西側柱全部と東側柱北1・2・4及び北妻柱の掘形に径約20cmの柱痕跡を留める。方位はほぼ方眼。

S B 3415 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行2間分3.8m、柱間1.9m等間、梁間3.4m。柱掘形は一辺0.5~0.9mの隅丸方形で、西南隅の掘形に柱痕跡を留める。S B 3401より古く、東半は S D 3340によって失われている。

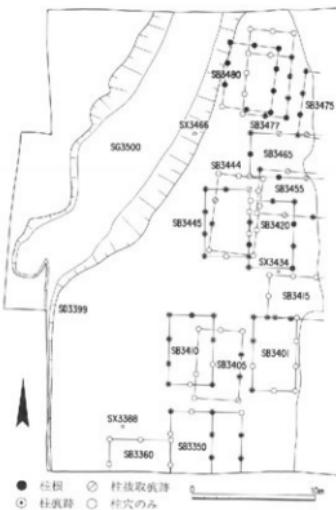


fig. 9 三坪遺構模式図 1 : 400

SB3420 (PL. 9) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間3.6mで、すべての柱間を6尺で計画したと考えられる。柱掘形は一辺約0.5mの略方形を呈し、西北隅をのぞいたすべての掘形には径約20cmの柱痕跡が、東側柱筋北2・4と、西側柱筋北3の掘形には柱根が残る。柱根の残存径は10~15cmである。S B3444・3445・3455の3棟の建物と重複しており、柱掘形の重複からS B3445より古いことを知る。西側柱筋はS B3350の東側柱筋及びS B3465の西妻柱筋と一致する。東南隅の柱掘形から8世紀後半の須恵器杯蓋が出土した。

SB3444 (PL. 9) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は北で東に振っており、S B3455よりやや振れが強い。寸法は桁行総長6.3m、柱間2.1m等間で各7尺と推定される。梁間は3.6mであるが、南妻の柱穴は検出されなかった。東側柱筋から1.3mをおいて、各柱にほぼ対応する位置に径30cmほどの小さな柱掘形が4つあり、北1に径約10cmの柱根を留める。簡単な廟ないしは軒支柱が付されていたと考えられる。柱掘形は、東側柱筋が不整形で径0.7m前後、西側柱筋はやや小さめの略方形である。S B3420・3445・3465と重複しており、掘形の重複からS B3445・3455より新しいことを知る。

SB3445 (PL. 9) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間3.6mで、すべての柱間を6尺で計画したと考えられる。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を呈するものが多いが、北妻は特に小さい。西側柱筋すべてと、北妻と東南隅の掘形に径20~30cmの柱痕跡を留め、東側柱筋北3には径約15cmの柱根が残る。S B3420・3444と重複しており、S B3420より新しいことを知る。

SB3455 (PL. 8) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東西棟。方位は東でやや南に振れ、S B3477とほぼ等しい。寸法は桁行2間分4.6m、梁間3.6mで、柱間は桁行を長く取る。柱掘形は一辺約0.6mの隅丸方形を基本とする。S B3420・3444・3465と重複するが、柱掘形はS B3444とのみ重複し、それより古いことを知る。

SB3465 (PL. 8) 中央調査区の西辺中央部で検出した桁行3間以上、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼に一致する。寸法は桁行2間分4.6m、梁間3.6mである。柱掘形は西妻柱筋と北側柱筋2が一辺約0.6mの略方形で一致するが、南側柱筋の掘形は特に小さい。西妻柱には、径約20cmの柱痕跡があり、径約12cmの柱根が遺存する。S B3444・3455・3475と重複するが、柱掘形の重複は見られない。東半はS D3340により失われている。

SB3475 中央調査区の北西部で検出した桁行3間の南北棟。東半はS D3340によって失なわれ、梁間の規模は不明。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、6尺で計画されたと考えられる。方位は北で東へ振れ、振れはS B3477よりやや強く、S B3480と一致する。柱掘形は一辺約0.4mの隅丸方形で、南と北の隅をのぞいた西側柱筋の掘形に径約15cmの柱痕跡を留める。

SB3477 (PL. 8) 中央調査区の北西部で検出した桁行3間、梁間2間の北片廂付南北棟。方位は北でやや東に振れ、S B3455と一致する。寸法は身舎桁行総長5.1m、柱間3間等間、廂1.9m、梁間3.5mである。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、東南隅の柱掘形には径約25cmの柱痕跡があり、径10cmほどの柱根が遺存する。その他の東側柱筋と南妻柱の掘形には、径約20cmの柱痕跡を留める。S B3480と重複しそれより古い。

SB3480 (PL. 8) 中央調査区の北西部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は

北で東に振れ、S B3444・3475と一致する。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間3.9m。南妻柱と西側柱筋北4をのぞく8つの柱掘形に柱根が遺存する。最大残存径約20cm。S B3477と重複し、それより新しい。側柱の掘形から奈良時代中頃～後半の須恵器杯蓋が出土した。

S B3501 北西調査区で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟総柱建物。寸法は桁行1間1.6m、梁間3.0m。柱掘形は径約0.4mの不整円形で、西側柱筋北1・2、棟通り北2の柱掘形に径約15cmの柱痕跡を留める。S B3505・3511と重複し、S B3511より新しい。

S B3505 北西調査区で検出した桁行3間、梁間2間以上の東西棟。寸法は桁行総長6.2m、柱間は2.1m前後で出入りがある。梁間1間分1.5m。西1間分を仕切っている。柱掘形は長径が0.3m前後の不整梢円形で、北側柱筋西1・2・4の間仕切の掘形に径約10cmの柱痕跡を留める。S B3501・3506・3511等と重複するが、柱掘形の重複はない。

S B3506 北西調査区で検出。ほぼ方眼方位に東西に並ぶ2つの柱掘形で、南北棟の一部と推定した。柱間（梁間）は3.6mで、12尺で計画された可能性がある。柱掘形は長辺約0.5mの長方形を呈し、東の掘形には径約10cmの柱痕跡を留める。

S A3508 北西調査区で検出。ほぼ方眼方位に南北に並ぶ2つの柱掘形で、柱間寸法2.4m、8尺で計画した據の一部と推定した。柱掘形は一辺約0.7mの隅丸方形で、径約30cmの柱痕跡を留める。掘形の形状から察して、大規模な建物の一部となる可能性もあり得る。

S A3510 北西調査区で3間分を検出した東西解。柱間寸法はほぼ1.9m等間である。柱掘形は一辺約0.5mの長方形を呈する。この南に平行する溝S D3520が、L字形に北へ折れる所で終わり、以東へは伸びないので、S D3520と関連するものと考えられる。東端を妻とする東西棟の南側柱筋となる可能性もあり得よう。

S B3511 北西調査区で検出。調査区のほぼ中央に3つの柱掘形があり、南北棟の南の妻柱筋と推定した。柱間寸法はほぼ2.4m等間である。方位は東でやや北に振れる。S B3501と柱掘形が重複しており、それより古いことを知る。

S B3515 北西調査区で検出。南北棟の南妻柱筋の一部と推定した。柱間寸法は2.1m、柱掘形は径約0.3mで、西の掘形には径約15cmの柱痕跡を留める。方位は北で西に振れる。

S D3520 北西調査区で検出したL字形の溝。幅約0.3m、深さ約0.2m。埋土から8世紀前半～中頃の土器が出土した。S D3523より新しく、またS A3510と関連すると考えられる。

S D3523 北西調査区で検出した南北溝。幅約0.9m、深さ約0.3m。埋土から上飾器と瓦の小片が出土した。S B3506、S A3508、S D3520のいずれよりも古い。

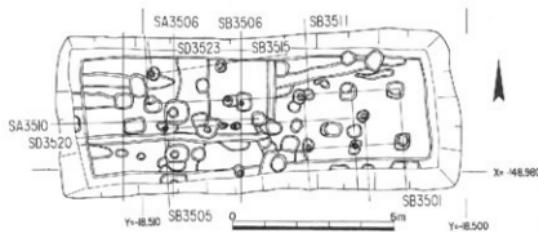


fig.10 北西調査区遺構図 1 : 150

池状遺構（PL.16）中央調査区の北西部で池状の遺構 S G3500（以下「池」と呼ぶ）と、その南端部に取り付く南北溝 S D3399を検出した。

S G3500 下層に古墳時代の河川があり、この流路がかなり埋った段階で平城京の宅地内部にとり込まれたものである。その幅や形態も旧河川を継承していることから一定せず、上幅は5～9m、池底の幅も4～6mと場所によって異なる。池底は南へ行くに従って浅くなり、発掘区西辺で立ち上がる。深さは調査区北辺で約1.7m、南辺で0.5～0.6m。

池の堆積は3層に大別できる（fig.11）。下層は黒褐色粘質土で、北辺部で厚さが約1.0mある。遺物は奈良時代前半の土器と瓦が少量出土した。また、ここからはウシ・ウマの骨が数点出土した。この時期にはすでに池は半ばまで埋り、東側がやや深い状態になる。この堆積上の上面、ほぼ池の中央部には細い杭 X S3481が南北に立ち並ぶ。西岸の土留め杭であろう。中層は暗灰色及び暗褐色粘質土で炭を比較的多く含む。東岸で厚く約0.5mある。中層の主として東岸からは奈良時代中頃から後半の土器と瓦が多量に出土した。この時期には池はほとんど埋没し、中央部が浅く陥んだ状態となる。上層は暗褐色粘質土で、中央部で厚さ約0.5mである。遺物はそれほど多くないが奈良時代後半の土器と瓦を含み、奈良時代末頃には池が完全に埋没したことが推測される。なお、中・上層からはモモの種が7点出土した。

S D3399 約16mまで確認した。西肩が発掘区外に及んでおり、池との取り付き部のみ発掘した。取り付き部での幅は約1.0m、深さ約0.4m、南へ直線的に流下しており、池のオーバーフローの処理、あるいはここから更に別の池等に水を導くための溝と考える。なお、取り付き部の溝底近くで柱穴1個と、根を張ったままの「ムクロジ」一本を検出した（PL.16）。

京内の坪内部にあるこのような池の性格はいかなるものであろうか。ある時期に護岸の杭が打ち込まれていたり、また池周に人为的な溝が取り付くなど、池水が管理されていたことは明らかであり、京造宮以前の小河川がただ単に坪内部に残存していたとは考え難い。一つの想定としては S G3500が宅地内の庭園を構成する池そのものと考えられなくもないが、護岸施設である州浜石敷や景石が全く見られないことや、旧河川そのままの平面形であるなどの問題が残る。池そのものではなく、池への導水路、あるいはその末端部の溜水池と考えるのが妥当であろう。S G3500が三坪の中央部や東寄りに位置することから、S D3399の南方、もしくはS G3500の西方に本来の庭園を想定することができよう。

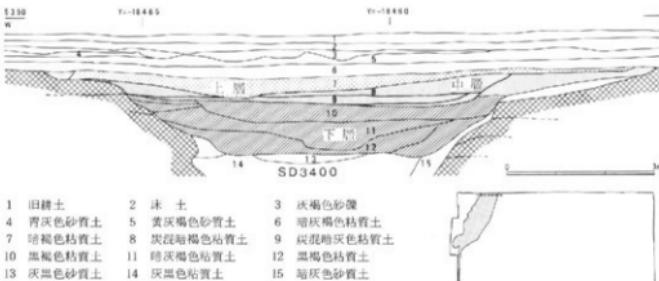


fig.11 S G3500土層図 1 : 100

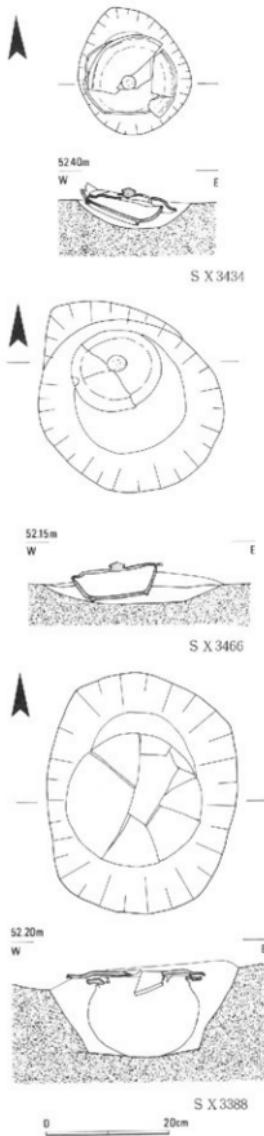


fig.12 土器埋納遺構図 1 : 8

土器埋納遺構 (巻首図版、fig.12・13、PL.18) 三坪地内において、土器の埋納遺構を3個所検出した。以下にその概要を記すが、遺構面を幾分削り込んで検出したので、各遺構の上縁の規模と深さの数値は若干大きくなる。土器の年代はいずれも奈良時代後半に比定できる。

S X3388 中央調査区南西部で検出。地山面に楕円形（東西約30cm、南北約40cm、深さ約15cm）の穴を掘り、蓋をした壺を穴底に据えている。穴底は平坦で楕円形（東西18cm、南北25cm）である。埋土中からの出土遺物は他にない。壺は土師器壺A、蓋は須恵器皿A蓋。蓋は破損しており、壺内には土が充満していた。この土の分析を試みたが、内容物は検出されなかった。

S X3434 S X3388の北東約18mで検出。地山面に不整円形（直径約20cm、深さ約5cm）の穴を掘り、蓋をした杯を納めている。穴底が舟底形のためか、土器は若干傾斜している。杯・蓋は須恵器杯Fの身と蓋である。杯に充満した土から内容物は検出されなかった。

S X3466 S G3500の東岸斜面、炭混り暗褐色粘質土上面に円形（直径約30cm、深さ約55cm）の穴を掘り、蓋をした杯を納めている。穴の底は円形（直径約18cm）ではなく平坦であるが、土器は傾斜している。杯・蓋はS X3434と同じ須恵器杯Fの身と蓋である。杯の底部には「神功開寶」銘が1枚納められていた。

これらの遺構のうちS X3388・3434は掘立柱建物群内で検出され、その埋納行為が掘立柱建物との関連で理解されるべきものと思われる。S X3466はS G3500の東岸斜面で検出したものであり、建物群よりもむしろ水に関連する埋納行為と考えるのが適当であろう。

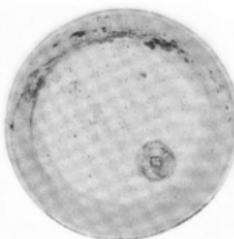


fig.13 S X3466杯内底面付着状況

C 六坪の遺構 (fig.15・60、PL. 5・6・11)

主な遺構は掘立柱建物28棟、掘立柱塀6条、井戸1基で、他にいくつかの土塙と溝がある。
建物・塀・溝 (fig.14) 主要なものは中央調査区の東半部で検出した。北東調査区でも若干の建物を検出したが、発掘面積が狭く、規模などは明らかにできなかった。

SB3170 中央調査区の東南隅で検出した東西に並ぶ3つの柱掘形で、南北棟の北妻と推定した。柱間は約2.1m、柱掘形は一辺0.5m。SB3180の柱掘形と重複し、それより新しい。

SB3175 中央調査区の東南部で検出した桁行5間以上、梁間2間の南北棟。方位は北で方眼よりやや東に振る。寸法は桁行4間分7.7m、柱間は北から3間目が2.1m、他は1.8~1.9m。梁間は北妻柱筋で3.4mあるが、南でややせまい。柱掘形は一辺約0.5mの略方形を基本とするが、北妻柱は小さく、北4もきわめて浅い。SB3180・3190・3200と重複する。

SB3180 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行6間、梁間2間以上の東西棟。方位は東でわずかに南に振る。寸法は桁行長10.6m、柱間1.8m等間、梁間1間分1.8mであり、6尺等間の計画と考えられる。柱掘形は一辺約0.5mの円形を基本とし、側柱筋束1・4・5及び東妻柱の各掘形には抜取穴がある。SB3170・3190と重複し、SB3190より古い。北側柱筋西3の柱穴から8世紀中頃の上器が出土した。

SB3185 中央調査区の東南部で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟。寸法は桁行1間分1.7m、梁間3.4mで、柱間は等間。方位はほぼ方眼。柱掘形は径約0.3mの不整円形。

SB3190 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行6間以上、梁間2間の南片幅附東西棟。寸法は桁行5間分11.8m、柱間約2.4m、梁間4.8m、廻2.7m。身舎は8尺等間、廻の



fig.14 六坪遺構模式図 1 : 400

出は9尺の計画と考えられる。方位は東で方眼より南に振る。柱掘形は一辺約0.6mの略方形で、北側柱西3・4・6・、南入側柱西3、南側柱西6に径約20cmの柱根が遺存。S B3180・3200・3203と重複し、S B3203より古く、S B3180・3200より新しいことを知る。身舎南側柱の掘形から8世紀後半の土器と軒瓦平5681E、身舎南西隅の柱抜取穴から曲物の漆容器が出上。

S B3195 中央調査区の東南部で検出した桁行2間以上、梁間2間の東西棟。寸法は桁行1間分1.8m、梁間3.6m。柱掘形は径約0.2mの略円形で、方位は西で方眼より北に振る。

S B3200 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行4間、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行総長10.4m、柱間は東2間が約2.4m、西2間が約2.8m。梁間3.8m。桁行4間と偶数間になること、S B3190がこれの建て替えと見られ、かつ桁行5間以上となることを考え合わせると、東妻柱が間仕切で、建物が東へ延びる可能性もある。柱掘形は一辺0.7m前後の略方形を基本とする。S B3175・3190・3195と重複し、S B3190より古い。

S B3202 (PL.12) 中央調査区の東南部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は北で方眼よりやや東に振る。寸法は桁行総長4.3m、梁間3.0m。S B3190・3200より新しい。

S A3204 S A3203の西約5mで検出した南北2間の廊。柱間寸法はほぼ1.6m等間。方位は北でやや東に振る。S B3203と同方に振れることから、それに伴うものと考えられる。

S X3205 中央調査区の中央南辺で検出した矩形に結ばれる6個の柱掘形。規模は南北を長辺として北側4.3m、南側4.8m、短辺は3.0mである。西側中央の柱掘形には径約20cmの柱痕跡を留め、径約10cmの柱根が遺存している。通常の建物の遺構とは考え難く、隅などの要所に深い掘立柱を用いた柵状の施設と推定される。北半4つの柱掘形は各2個の重複があり、また南へ伸びる可能性もある。南西の柱掘形はS B3210と重複しており、それより古いことを知る。

S B3210 中央調査区の中央南辺で検出した桁行3間、梁間2間以上の東西棟柱建物。寸法は桁行総長5.1m、柱間1.7m等間。梁間1間分も1.7mである。方位はほぼ方眼にあう。

S A3211 S B3210の北側柱筋の掘形と重複し、それより新しい東西二間の廊。掘形は不整形で、西1・2には抜取穴を、また西3には径約20cmの柱痕跡を留める。方位はほぼ方眼。

S B3212 中央調査区の中央南辺で検出した桁行2間、梁間2間の東西棟。寸法は桁行の西が広く1.7m、東は1.4m。梁間2.8m。方位は東で方眼よりやや南に振る。柱掘形は、径約0.2mの略円形。S B3210・3214と重複するが、柱掘形の重複はない。

S B3214 中央調査区の中央南辺で検出した桁行2間、梁間1間の南北棟。桁行総長2.8m、梁間1.9m。方位は方眼よりやや東に振る。

S D3215 S B3214の東側柱筋と重複し、それより新しいL字形の溝。S B3214のやや北で西に折れて約1.5m続く。幅は約0.3mあり、埋土から8世紀の土器小片が出土した。

S B3220A・B 中央調査区の東辺で検出した同位置にほぼ同規模で建てかえた建物。Aは桁行・梁間共に1間、Bはそれを各2間に改める。寸法はAの桁行が2.5m、Bはそれをやや狭め、梁間はAが1.6m、Bは2.1mに広げる。柱掘形はいずれも径0.4m前後の不整形で、Bの西北4個の掘形には径15~20cmの柱痕跡を留める。方位はAがほぼ方眼、Bは東でやや南に振る。方位や配置から、AはS B3200の、BはS B3190の付翼屋に比定されよう。

S B3225 S B3220の西2.7mで検出した桁行1間、梁間1間の東西棟。寸法は桁行・梁間共に約2.0m。S B3220と東西に並び、ほぼ同規模であるので、対になる建物と考えられる。

S A3228 中央調査区の東辺で検出した東西2間の塙。柱間寸法は2.7m前後、柱掘形の大きさは一定せず、すべてに抜取穴がある。北方 S A3240と同方位で、その南を画す塙と考えられる。したがって S B3240と同様、さらに東へ伸びる可能性が大きい。

S B3230 中央調査区の東辺で検出した桁行2間以上、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行1間分約1.9m、梁間は3.6mであり、柱間6尺等間の可能性がある。西南隅柱と西妻柱の掘形は一辺約0.5mの方形で、径約20cmの柱痕跡を留める。S B3240より古い。

S B3232 中央調査区の東辺で検出した桁行2間、梁間2間の東西棟。方位はほぼ方眼。寸法は桁行3.4m、1.7m等間、梁間2.5m。東北隅及び東妻の柱掘形は検出されなかった。西南隅の柱掘形には径約10cmの柱痕跡を留める。S B3230より新しく、S B3240より古い。

S B3240 (PL.12) 中央調査区の東辺で検出した桁行3間以上、梁間2間の南北2面廻付東西棟。寸法は桁行2間分3.6m、身舎梁間3.6m、北廻2.4m、南廻2.7m。北入側柱西1・2、南入側柱西1・3の掘形には、最大径約20cmの柱根が残存しており、特に身舎北西・南西両隅の掘形は長方形で、0.5×0.9mと大きく、身舎の他の掘形もこれに準ずる。妻柱及び廻の掘形はかなり小さい。身舎と廻の柱位置はよく揃うが、残存する柱根から柱筋を結ぶと身舎はゆがんだ平面となり、高い精度で計画されたものとは言い難い。S B3230・3245と重複しており、S B3230よりは新しい。桁行の柱筋を建物の方位とすると、東で方眼より南に振れる。

S B3245 (PL.12) 中央調査区の北東部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は方眼より北で東にやや振る。寸法は桁行総長6.9m、柱間2.3m等間、梁間4.2m。柱掘形は一辺約0.6mの方形を基本とするが、東側柱中央間の掘形は南北に長く約1.4m。南東隅と南西隅の柱掘形には径約20cmの柱痕跡を留め、西側柱北1・2・3の柱掘形には抜取穴がある。

S B3250 (PL.13) 中央調査区の北東部で検出した桁行3間、梁間2間以上の南北棟。寸法は桁行総長5.4m、柱間1.8m等間、梁間も1間分で約1.9mであり、柱間は6尺等間の可能性がある。方位は方眼より北で東にやや振る。

S B3270 (PL.13) 中央調査区の北東部で検出した桁行5間、梁間2間の南北棟。北2間分を仕切っている。方位は方眼方位。寸法は桁行総長10.5m、柱間2.1m等間、梁間3.9mで、柱間は桁行7尺、梁間0.5尺で計画されたと考えられる。東側柱筋の掘形は径約0.4m前後で、南端をのぞいた5つの掘形に径約15cmの柱痕跡を留める。西側柱筋北3の柱穴から奈良時代後半～末頃の土器が出土した。

S X3272 S B3270の内部の4つの柱掘形で、柱筋に沿って、東西1間、南北2間のL字形に並び、S B3270の内側に幅約90cmの区画をつくる。建物内部の棚状の施設と推定される。

S B3280 (PL.14) 中央調査区の中央北辺で検出した桁行5間、梁間2間の東西棟。寸法は桁行総長13.5m、柱間2.7m等間。梁間は3.6m前後だが、東が広い。柱掘形は一辺約0.8mの隅丸方形で、東南隅の掘形には径約10cmの柱根が遺存する。大土壠 S K3300より新しい。

S B3290 (PL.14) S B3280の南で検出した桁行2間、梁間2間の東西棟。寸法は桁行総長5.4m、柱間2.7m等間、梁間2.9m。方位は東で北にやや振る。柱掘形は一定せず、両妻柱と南側柱筋東2の掘形に径約20cmの柱痕跡を留める。S B3280より新しい。

S A3295 (PL.14) 中央調査区の中央北辺で検出した南北3間、南端から東に折れて1間の塙。南北部分の総長は6.0m、東西部分は2.4mである。方位は南北部分が北で西に振れる。

S B3290に伴うものと考えられる。

S D3310A・B S B3280の北で検出した東西溝。S D3310Aは、東はS K3275付近まで検出され、西はS D3310Bに改修される。幅約1.0m、深さ約0.2m。S D3310BはS K3275の西約7mの地点から検出され、坪塙小路側溝S D3333に流れ込む。幅約0.8m、深さ約0.2m。S D3310Aは重複する造構S B3270・3280、S K3275のいずれよりも古く、S K3300より新しい。S D3310Aの埋土から奈良時代中頃の土器が、またS D3310Bの埋土からは8世紀末頃の土器がそれぞれ出土した。坪の想定南北2等分線から南約3mの距離にあり、坪内小路の南側溝となる可能性を持つ。

S B3325 (PL.14) 中央調査区の中央北辺部で検出した桁行3間、梁間2間の南北棟。方位は方眼より北でわずかに西に振る。寸法は桁行総長5.1m、柱間1.7m等間。梁間は約3.6mであるが、北が広い。柱掘形は一辺約0.4mの略方形を基本とし、南妻柱をのぞいたすべての掘形に径15~20cmの柱痕跡を留める。S B3330と重複し、掘形の重複からそれより新しいことを知る。東南隅の柱穴から8世紀後半の土器が出土した。

S B3330 (PL.14) 中央調査区の中央北辺部で検出した桁行5間、梁間2間の南片扇付南北棟。北2間分を仕切り、扇は妻柱に対応する位置に柱掘形なく、2間分を持ち放している。寸法は身舎桁行総長9.0m、柱間1.8m等間、梁間3.6m、扇の出1.8m。柱間は6尺等間。方位はほぼ方眼。柱掘形は一辺約0.6mの鶴丸方形で、東西両側柱筋のすべての柱掘形に、径20~25cmの柱痕跡ないしは抜取穴を伴う。なかに柱根の残欠とみられるものを含む。北側柱筋東3の柱穴から奈良時代中頃から後半の須恵器杯蓋が出土した。

S D3172・3226・3235・3257・3265・3286 中央調査区の東辺部で検出。東はS B3190の西4の扇柱筋の位置から、西はS B3290の東妻の位置にまでわたって、ほぼ等間隔で検出された6条の南北溝。三坪の発掘区西端でも、これに類する可能性のある溝が見られるので、付近一帯に広く分布していると考えられる。幅約0.2m前後、深さ約0.1m。心々距離は3.4~3.5mとほぼ一定で、方向は北で方眼より東に振れる。重複する奈良時代の造構より見て古く、古墳時代の溝S D3222よりは新しいので、7世紀から条坊施行直前までに位置付けられるが、その性格は明らかでない。

S B3525 北東調査区で検出。L字形に並ぶ3つの柱掘形を、建物の東北隅部分と推定した。方位はほぼ方眼に描き、柱間寸法は東西が約1.8m、南北が約2.1mである。

S B3528 北東調査区で検出。発掘区内の2つ及び東壁の一つの計3つの柱掘形をとり、建物の西北隅部分と推定した。方位は北で西に大きく振る。柱間寸法は南北が約2.7m、東西が約2.2m。

なお、北東調査区の東西両壁沿いに各々等間隔で並ぶ3つの柱掘形がある。それぞれ東西棟の妻部分となる可能性がある。

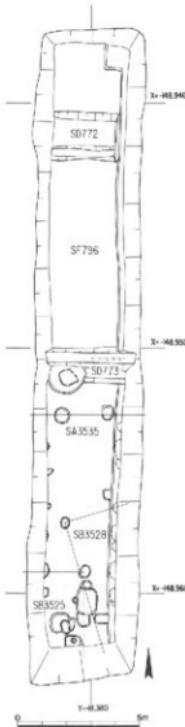


fig.15 北東調査区造構図
1 : 200

井戸・土壤 中央調査区の東半部、六坪内で井戸 1 基と、若干の土壤を検出した。

S E 3260 (巻首図版、fig.16~18、Pl.17) 中央調査区の東辺中央で検出した奈良時代の井戸。

掘形は平面形が一辺約2.2mの不整形を呈し、深さ2.2mで湧水層の暗灰色砂層に達する。

井戸枠は、相接する二面に溝を掘った支柱を四隅に立て、両端を削って薄くした枠板を落とし込んで組み上げる。一辺0.9mの正方形で、枠板は7段目まで遺存していたが、本来は更に3段以上あったと推測される。隅柱の溝は底面から10cmの高さで止め、他方、最下段の枠板の下辺両端にはそれに対応する切り欠きを施して、枠板の脱落を防ぐとともに枠の下に間隙ができるのを防いでいる。隅柱は12~15cm角の心去り材で、高さ1.8~1.9m残る。隅柱側面下端と底面には枠板を落とし込む溝の幅と下端の高さを墨書きした墨線が残っていた。枠板は板目材と枠目材が相半ばし、平均で $83 \times 25 \times 5$ cmをはかる。隅柱・枠板ともヒノキ材。

井戸内の施設として、井戸底から約25cmの高さに敷かれた網代を検出した。幅3cm前後のヒノキの薄板を「三本超え三本潜り一本送り」に編んだものであり、井戸枠の大きさに折り畳んで置き、周囲に石を置いて浮遊を防いでいる。底の妙が舞いあがるのを防ぐ施設であろう。

井戸埋土から瓦・土器・斎事・櫛・桃核等が出土した。土器は網代の下層から平城宮IIの土器・須恵器、上層から奈良時代末頃の上師器・須恵器が出土した。各々1点の墨書き土器を含

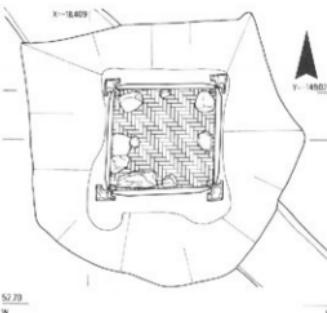


fig.16 S E 3260平面・断面図 1 : 40

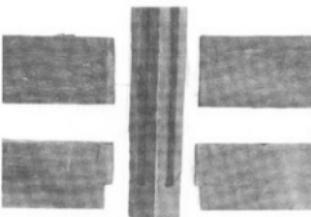


fig.17 S E 3260井戸枠細部



fig.18 網代実測図

む。井戸掘形内からは、北辺を除く三辺の最下段枠板外側でヒノキの細棒が1点ずつ、計3点出土した。このうち、東辺の細棒は横になった状態で枠板に密着して、また西辺の細棒は下端を枠板の下に挟み、立った状態で出土した。井戸掘形内からの細棒の出土は、平城京左京四条二坊一坪 S E2600に類例があり、井戸開鑿時の祭祀に関連するものと考えられる。

SK3255 井戸 S E3260の南で検出した不整形の土壌。東西2.6m、南北1.8mをはかる。炭を多く含む暗褐色粘質土の埋土より奈良時代前半から中頃の土器が出土した。

SK3275 (PL.17) 中央調査区の北東部で検出した円形の土壌。東西3.0m、南北3.1m、深さ1.6m。偏斗状で中央が一段深くなる。埋土から奈良時代の土器小片が出土した。

SK3300 (PL.17) 中央調査区の北辺中央で検出した東西に長い土壌。東西約16m、南北約4m、深さ0.2~0.3mをはかる。六坪の遺構のなかでは最も古い段階に属し、掘立柱建物 S B3270・3280、溝 S D3310、土壌 S K3275はいずれも S K3300の埋土を切っている。出土遺物には、瓦・土器・漆器・砥石がある、なかでも多量に出土した土器は、鳥形硯や計5点の墨書き土器を含み、奈良時代前半から中頃（平城宮Ⅱ～Ⅲ）に比定できる。

SX3178 中央調査区の東半部南北、掘立柱建物 S B3185の北東約1.8mの位置で検出したほぼ円形の土壌。底部を打ち欠いた須恵器甕を埋め込む。土壌の径約0.5m、深さ約0.2m。

註1 奈良国立文化財研究所『平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告』1984

3 中世の遺構

中世の遺構には河川1条がある。他に中世末から近世の井戸・土壌・墓がいくつかある。

SD3340 (PL.19) 中央調査区のやや西寄り、ほぼ三坪と六坪との坪境小路上を北から南に流れる河川。完掘したのは南端部で、今回検出した部分の約4分の1の面積にあたる。最大幅約22m、深さ約2.8m。堆積土は3層に大別できる（fig.19）。最下層は褐色砂礫層で、中世の羽釜・陶器の破片を出土。西岸の川底では当初の護岸施設と思われる長さ約5.6m、直径約35cmの丸太材を検出した。第2層は灰褐色砂層を主とした互層で、その最上層の暗青灰色シルト層から室町時代とみられる木製板卒塔婆1点が出土。第3層は褐色砂層と暗灰色粘質土層の互層で、遺物はなかった。第1・2層はともに砂礫層で、出土した羽釜・陶器の破片も厳密な時代判定が困難なほどに磨滅しており、流れの相当速い川であったことを示す。第3層の時期には深さも浅く幅も狭くなり、西北から東南へやや斜めに流れている。

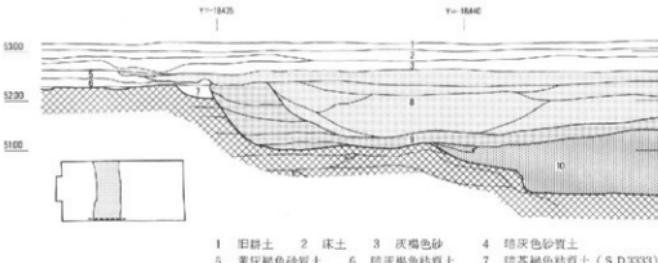


fig.19 SD3340土層図 1:100

なお、当研究所では第156—2次調査で、今回の調査区より南方の左京九条一坊三・六坪を発掘調査したが、S D3340の下流に相当すると思われる流路等を検出していない。

S E3451 中央調査区西辺の池状遺構 S G3500上で検出した井戸。掘形は東西約2.5m、南北約2.9mの不整円形で、井戸枠はなく素掘りである。埋土からは桶1点、近世の陶器片が数点出土した。

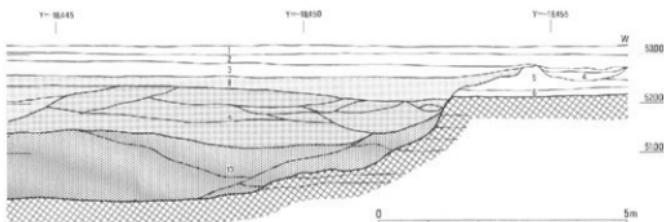
S E3345 (fig.20) S D3340上で検出した井戸。掘形は一辺約2.4mの隅丸方形で、深さ1mまで確認。井戸枠は一辺約1.2mの正方形で、縦板を内側から横棟によって支え、横棟は相欠きの枘で組む。

S E3202 中央調査区東南部で検出した素掘りの井戸。掘形は東西約2.0m、南北約1.7mの隅丸方形で、S K3208の掘形を切っている。

S E3229 (fig.21) 中央調査区の東辺で検出した井戸。掘形は直徑約1.1mの円形で、深さは1mまで確認した。井戸枠は直徑約70cmの円形で、縦板組みである。埋土からは近世の陶器片が出土した。

S K3201 中央調査区東南部で検出した隅丸方形の上塙。掘形西辺はS E3202の掘形によって切られている。現状では東西約1.5m、南北約1.2m、深さ約20cmである。埋土からは下駄の齒1点、木柵の頭部1点、杉の薄板1点が出土した。

S X3453 (fig.22) 中央調査区のS D3340堆積上上で検出した木棺墓。掘形は東西約0.7m、南北約1.2mの隅丸長方形。木棺は組み合わせ式箱形木棺で、長さ75cm、幅50cm。材はヒノキ。



8 棕色砂と暗灰色粘質土の互層 9 灰褐色砂と灰白色砂礫の互層 10 棕色砂礫



fig.20 S E3345 西から

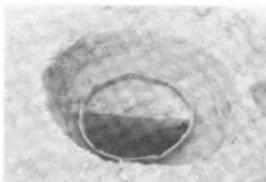


fig.21 S E3229 南から



fig.22 S X3453 東から

4 古墳時代の遺構 (fig.24、PL. 4・5、巻末折込)

概観 (fig.23) 中央調査区のほぼ全域にわたって、奈良時代の遺構と同一の地山面で古墳時代の遺構を検出した。ただし、中央調査区の南西部では、古墳時代の遺構は奈良時代の遺構面である暗茶褐色粘質土層の下から検出した。検出した主な遺構には、堅穴住居跡3棟、掘立柱建物35棟以上、塀6条、溝10条、土塁8基、河川1条および堰1基がある。これらの遺構は占墳時代中期から後期にかけての集落の一部を構成する。遺構の全般的な分布は、建物が河川S D3400の両岸に密集し、それから東へ密度が稀薄になる。溝S D3222以東には遺構が検出されなかったので、この溝は集落の東北を限る施設であった可能性がある。また、集落の北、南および西の眼界は調査区の制約があって明らかにできなかった。

建物・塀 (fig.24、tab. 2) 堅穴住居、掘立柱建物および塀については概要を表 (tab. 2) にまとめたので、個別遺構の記述は省略する。以下では、まず建物に関する概要を述べ、次に主要な建物に限って解説を行う。

掘立柱建物の構造については、桁行と梁間が1間×1間、2間×1間、2間×2間、3間×2間の4種類が確認できた。各々の棟数は1間×1間から順に、6棟、3棟、3棟、3棟を数える。一見、1間×1間の小規模な建物が多くみえるが、調査区外へ延びるために構造を確認できない建物が20棟と多く、しかもそのほとんどは梁間2間の構造と推定される。したがって、実際には梁間2間で桁行が2間ないし3間の建物がこの集落の主体を占めていたのであろう。また、床東をもつ掘立柱建物は2棟を検出した。

次に、主要な建物・塀について解説する。

S B3440 (PL.20) 河川S D3400東岸で検出した桁行2間、梁間2間の床東をもつ掘立柱建物。柱間は桁行・梁間とも1.7m等間である。柱掘形は一辺0.5~0.6mの隅丸方形で、西北隅と東側柱列には径25~35cmの柱痕跡が残る。床東の掘形は辺約0.4mと小さい。堅穴住居 S B3430と重複するが切り合はない。また、北側柱列の掘形は溝S D3449を切って掘られている。

S B3450 (PL.20) S B3440の東北に1.9m隔てて並ぶ桁行2間、梁間2間の床東をもつ掘立柱建物。柱間は桁行1.8m等間、梁間1.6m等間。柱掘形は一辺0.5~0.8mの隅丸方形であり、東南隅とすべて西側柱の柱掘形に径25~30cmの柱痕跡が残る。床東の掘形は辺約0.3mと小さい。

S B3460 (PL.20) S B3450の東北に1.8mを隔てて並ぶ桁行2間、梁間2間の掘立柱建物。S B3440・3450と同じく床東をもつ建物の可能性がある。柱間は桁行が1.9m等間、梁間が1.7m等間である。柱掘形は一辺0.5~0.7mの方形ないし隅丸方形で、溝S D3433・3456を

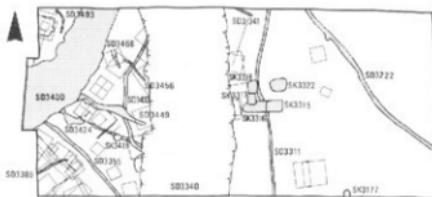


fig.23 古墳時代遺構概略図

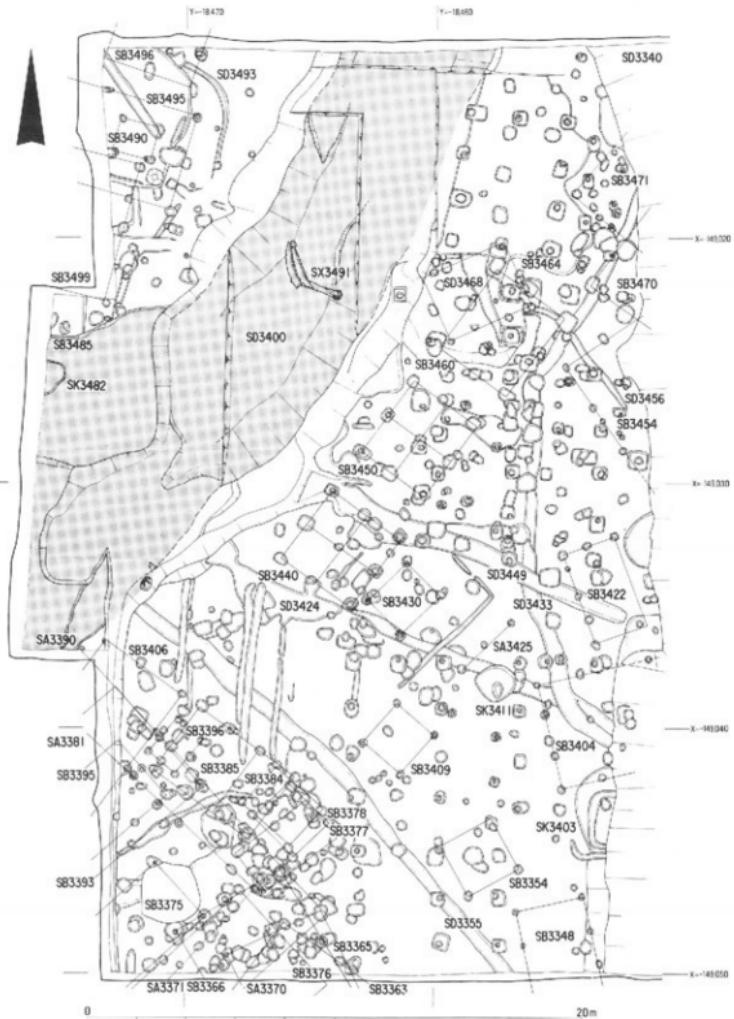


fig.24 古墳時代遺構図（中央調査区西半）1：200

切って掘られている。

以上の3棟は同一構造をもち、西側柱列を描えてほぼ等間隔に並ぶ。さらに、S B3440とS B3460とは梁間をも等しくし、東側柱列も描えており、規格性が高い。

S B3406 中央調査区の南西隅で検出した桁行2間以上、梁間2間の掘立柱建物。主軸方向をN36°Eとし、東側柱筋をS B3440・3450・3460の西側柱筋と、また北妻柱筋をS B3385の北側柱筋と描える。柱間は桁行・梁間とも1.9m等間である。

S B3385 (PL.20) S B3406の東に近接して建つ桁行3間、梁間2間の掘立柱建物。東1間に間仕柱の柱穴をもつ。北側柱筋はS B3406の北妻柱筋に描う。規模は桁行長総4.8m、梁間3.2mで、柱間は桁行・梁間ともに1.6m等間である。

S A3371・3381 中央調査区の南西隅で検出したL字形の堀。S A3381は方位がN47°Wで5間分を、これと直交するS A3371は3間分を検出した。柱間は1.0~1.6mと一定しない。

S A3370・3390 S A3371・3381の一まわり外側にあるL字形の堀。S A3390は方位がN43°Wで8間分を、S A3370は1間分を検出した。柱間は1.8m等間である。

S B3430 (PL.21) 河川S D3400東岸で検出した方形の堅穴住居。柱穴と、南辺を除く3辺の周壁溝（幅0.2m）を確認した。削平が著しく、周壁と竪は検出できなかった。規模は東西が5.1m、南北が推定5.5mであり、柱間は東西が2.2m、南北が1.9mをはかる。柱掘れは一辺0.4~0.5mの隅丸方形を呈し、東北隅を除く3個所に径20cmの柱痕跡を残す。遺物は出土していないが、切り合い関係から溝S D3424より新しいことがわかる。なお、東辺に平行する堀S A3425は、この堅穴住居に伴う可能性が高く、S A3425の東にある土壙S K3411もS B

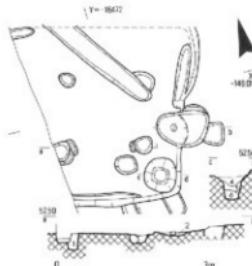


fig.25 S B3406平面・断面図
1 黄褐色粘質土 2 褐色帶茶褐色土
3 淡色粘質土 4 細褐色粘質土
5 暗褐色粘質土 6 青灰色粘質土

造構番号	規 模	構 方 向	柱 間 (m)	偏	考	造構番号	規 模	構 方 向	柱 間 (m)	偏	考
S B3206	3×2	N 8°W	1.5	2.5		S B3395	1°×1*	N 47°E	1.7	1.4	
S B3207	2×1	N 10°W	2.5	2.7		S B3398	2×1	N 39°E	0.9	1.4	
S B3266	1×1	N 21°W	1.8	1.6		S B3404	3×1*	N 15°W	1.4	1.8	S E3348と側柱筋崩れ
S B3285	1×1	N 11°W	3.0	3.0		S B3405	2°×2	N 35°E	1.9	1.9	S B3385より新
S B3313	?×2	N 12°W	?	2.0		S B3409	1×1	N 41°E	2.1	2.0	
S B3314	?×2	N 6°W	?	1.7		S B3422	2°×2	N 29°W	1.9	1.0	
S B3329	2°×1*	N 12°W	3.2	2.5		S B3440	2×2	N 30°E	1.7	1.7	梯状
S B3331	1°×2	N 12°W	1.8	1.8	S A3347より新	S B3450	2×2	N 36°E	1.8	1.6	範柱
S B3348	2°×1	N 15°W	1.4	2.8	S B3404と側柱筋崩れ	S B3454	2°×1*	N 39°W	2.1	1.9	
S B3354	1×1	N 29°W	2.4	2.4		S B3460	2×2	N 35°E	2.0	1.7	S B3440・3450と西側柱筋崩れ
S B3363	2°×1*	N 64°W	1.4	2.2		S B3464	3×2	N 66°E	1.2	1.4	
S B3356	1°×2	N 28°W	2.7	2.1	S A3390より新	S B3470	1°×1*	N 54°W	1.8	2.0	S B3460と柱筋崩れ
S B3365	2°×2	N 31°W	1.7	2.5	S B3275・S A3390より新	S B3495	1°×2	N 74°W	1.8	1.5	S B3490より古
S B3375	2°×2	N 47°E	1.5	1.5	S B3366より新	S B3496	1°×1*	N 17°E	1.8	1.4	
S B3376	2°×1*	N 45°E	2.1	2.6		S B3499	2×1*	N 14°E	2.6	1.3	S B3490より新
S B3377	2×1	N 51°E	1.8	2.0		S A3347	4°	N 8°E	1.4~2.5		S D3311とはば直交
S B3378	1×1	N 45°E	2.2	2.0		S A3370	1°	N 47°E	1.5		S A3320と直交
S B3384	1×1	N 41°E	2.8	2.0		S A3371	3°	N 43°E	1.0~1.6		S A3381と直交
S B3385	3×2	N 64°W	1.6	1.6	柱仕切あり S A3390より新	S A3381	5°	N 47°W	1.2~1.5		S A3371と直交
S B3383	2°×1*	N 45°E	2.2	2.7	S B3460より古 S A3396より新	S A3390	8	N 43°W	1.8~2.0		S A3370と直交
						S A3425	7	N 45°E	1.4		

tab.2 古墳時代掘立柱建物・塹一覧表

3430に関連するものとみられる。

S B3490 (fig.25, PL.21) 河川 S D3400西岸で検出した方形の堅穴住居。東辺に竈を、東南隅には貯蔵穴を備え、これらの周辺を除く各辺に周壁溝がめぐる。西辺は調査区外にあり、北辺は奈良時代の土壤によって削平されている。S B3490の規模は、東西3.5m以上、南北3.7m、深さ0.3mある。竈は0.9×0.7mの浅い楕円形で、東辺から0.4m張り出す。壁体は遺存しなかつたが、竈埋土から粘土塊を少量検出した。竈中央には焼けて赤変した石があり、支脚として使用したとみられる。貯蔵穴は、一辺0.7mの隅丸方形の平面形をもち、深さ0.5mある。出土遺物には、6世紀前半の土師器蓋・高杯、須恵器蓋杯がある。竈埋土と、貯蔵穴脇の床面から出土した。S B3490は掘立柱建物 S B3499・3495と重複しており、S B3495より新しく、S B3499より古いことがわかる。L字溝 S D3493は、S B3490の北辺および東辺の外側約1.5mを平行して走ることから、この堅穴住居に伴う溝であった可能性が高い。

なお、S B3430の東南で検出したS B3402は、周壁溝と思われるものが残るが、規模が南北約2.2mときわめて小さく堅穴住居か否か明らかでない。

河川 S D3400 (fig. 26, PL.22) 中央調査区の西北部で検出した古墳時代の河川。北東から西南へ流れ、調査区内で西に振る。奈良時代の池状構造 S G3500の下層にあり、中央部の約2分の1を発掘した。上面の幅7.0~10.0m、底面の幅約3.0m、深さ約2.5mをはかる。堆積層は大きく、主に黒灰色粘質土層からなる上層（厚さ約1.0m）と、灰色粗砂および暗灰色砂質土を主とする下層（厚さ約1.4m）との2層に区分できる。下層はこの河川がかなりの流量で流れていることを、上層は粘質土層からなるので、流量の減少によって形成された層であることを示す。下層に伴う構造として自然木3本を並べた壠 S X3491がある。1本を流れに直交して置き、一端は左岸に埋めこんで、他端は別の2本の木を両側に置いて固定している。なお、上・下層とも護岸の施設は認められなかった。

S D3400からは、土器・木器・石器が出土した。S X3491の最下層の灰色粗砂層は布留式期から6世紀後半の土器を出土しており、河川は古墳時代集落と共存して機能していたことがわかる。上層は6世紀代の土器の他に少量ながら7世紀末頃の土器を含み、集落の発達後徐々に河川が埋没していくことを示す。この他、種子・骨が出土している。種子は主に下層からの出土で、カヤ・ムクロジ・エゴノキ・スマモがある。骨はウマの脛骨1点である。

溝 S D3355 (fig.27) 中央調査区西南部で検出した北西から東南に走る断面V字形の素掘り溝。幅0.5~0.8m、深さ0.3m。約21mを確認し、西端はS D3400に取り付くが、東は調査区外にのびる。S B3385・3440とはば方向を描えているので、後述する古墳時代集落のII・III期において2つの建物群を区画した溝とみられる。埋土から6世紀前半の土器が出土した。

S D3424 S D3355の北にあり、西北西から東南東に走る素掘り溝。溝幅は最大1.1mあるが、

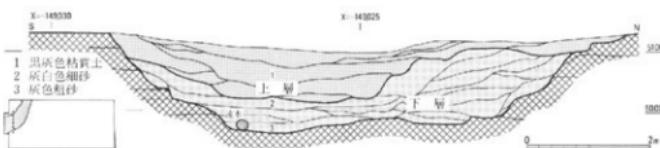


fig.26 S D3400土層図 1 : 100

浅いため一部途切れる。また、西端近くでは二叉に別れる。S B3404・3430・3440、S A3425、S D3433、S K3411に切られている。少量の土器片が出土した。

S D3449 S D3424の北約4mにあって、これとほぼ平行する素掘り溝。幅0.6~1.0m、深さ0.3m。底は平坦である。S D3433より新しくS B3440・3422より古い。土器片小片が出土。

S D3433 (fig.27) S D3400の東辺を、弧状に彎曲しながらほぼ南北に走る素掘りの溝。断面V字形で、幅0.4~0.8m、深さ0.3m。S D3424より新しく、S D3449・3456より古い。

S D3311 (PL.22) 中央調査区の東半部西よりを南北に走る断面U字形の素掘り溝。南半が西へ、北半が東へ張れる。幅0.3~0.7m、幅0.2~0.3m。検出縦延長33mをはかり、南北とも調査区外へ延びる。5世紀末頃の須恵器・土師器のはか、滑石製の防錆車が出土した。

S D3341 中央調査区の東半部西北隅で検出した素掘りの斜行溝。S A3347とはば直交する。西端をS D3333に切られている。幅約0.4m。6世紀前半の須恵器・土師器を出土した。

S D3222 (fig.27, PL.22) 中央調査区の東半部東寄りを北西から南東に走る素掘りの溝。断面V字形で、幅0.5~0.9m、深さ0.4~0.6mをはかる。総長約40mを検出したが、さらに調査区外へ延びる。6世紀前半の土師器と少量の須恵器を出土した。

土壤 S K3411 中央調査区西半部で検出した不整橢円形の土壤。溝S D3424を切って掘られている。東西1.7m、南北1m、深さ0.7mをはかる。6世紀代の須恵器・土師器が出土した。

S K3482 中央調査区西端、河川S D3400の埋土上面で検出した土壤。西半が調査区外に延びるため、東西径については不明だが、南北は1.4mある。7世紀末頃の土師器を出土した。

S K3315 中央調査区東半部の西辺中央でS D3311と重複する4基の土壤を検出した。S K3315は東端に位置する長方形の土壤。東西3.0m、南北2.1m、深さ0.2mの浅い皿状を呈する。切り合ひ関係からS D3311、S K3316より新しい。6世紀後半の須恵器・土師器を出土した。

S K3316 S K3315に西接する東西に長い長方形の土壤。東西4m以上、南北2mをはかる。切り合ひ関係からS K3315・3317より古い。6世紀代の須恵器・土師器を出土した。

S K3317 S K3316の北にある隅丸長方形の土壤。東西1.5m、南北1.8m、深さ0.3m。切り合ひ関係からS K3315より古く、S K3318より新しい。6世紀代の須恵器・土師器を出土した。

S K3318 S K3317の北に接し、これを切る長方形の土壤。東西1.8m、南北2.2m、深さ0.2mをはかる。6世紀代の須恵器・土師器が出土した。

S K3322 S K3322の東にある。東西2.9m、南北2.3mの不整な隅丸長方形の土壤。深さ0.2mで底はほぼ平坦である。5世紀末頃の土器が出土した。

S K3177 (fig.28) 中央調査区の東半部南辺で検出した、古墳時代初頭の不整円形土壤。東西1.4m、南北1.3m、深さ0.7m。埋土は4層にわかれ、第3層から完形の甕が出土した。

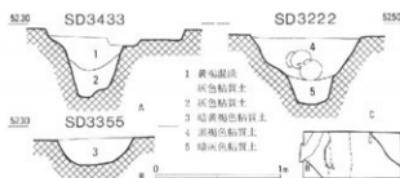


fig.27 古墳時代溝上層図

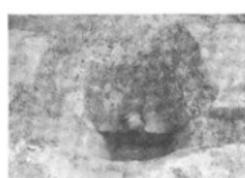


fig.28 S K3177 北から

小結 挖立柱建物の集落を分析する基礎的作業として、建物方向の同一性に基づいて同時に存在した建物群を抽出する方法が一般的である。今回検出した集落には側柱筋を揃えて建つ建物群が何組か存在し、建物方向は建物の同時性と計画性を表現するとみてよい。以下ではこの分析方法によって抽出した建物群を、建物相互の切り合い関係からⅣ期に編年する（Fig.29）。

Ⅰ期 挖立柱建物 S B3384・3396・3471・3495・3496、塙 S A3371・3381、溝 S D3311・3449・3456、土壙 S K3222がこの時期にあたる。なお、河川 S D3400はⅠ期からⅣ期まで存続し、その後7世紀末頃までの間にはほとんど埋没してしまう。N40°E前後の方向をとるⅠ期の建物・塙はS D3400の両岸に集中し、集落の東はS D3311が画していたと考えられる。

S D3400東岸には約25m幅の空閑地で隣でられた2つの建物群が認められる。中央調査区南西隅の建物群（A：群）は直角に交わる2条の塙で区画され、塙の北外側に2棟の建物を伴う。塙の内側には中心的な建物があったと考えられるが、調査区内では相当建物を確認できなかった。S D3400東岸のもう一方の建物群（B群）と、西岸の建物群（C：群）は、各々1棟ずつを検出したにとどまるので、群構成は明らかでない。C₁群のS B3495は東岸の建物とは方向を異にする。西岸の建物は続くⅡ・Ⅲ期もほぼ同一方向をとり、東岸の建物方向と揃わない。Ⅱ期 壘穴住居 S B3430・3485・3490、掘立柱建物 S B3375・3376・3378・3393・3395、塙 S A3370・3390・3425、溝 S D3222・3311・3355、土壙 S K3411がⅡ期の遺構である。

Ⅱ期の建物群はS D3400の東岸に2群（A₁群・D₁群）と右岸に1群（C₂群）ある。N45°Eの方向をとる。東岸の建物群のうち、A₁群は建物の重複から2小期に区分される。即ち、S B3375・3395、S A3370・3390からなるⅡa期と、S B3376・3378・3393、S D3355からなるⅡb期である。Ⅱa期のA₁群は、L字形の塙で区画しており、Ⅰ期のA₁群の構成を、規模を拡大して踏襲する。次のⅡb期には、塙が廃され、建物群の北を溝S D3355で区画する。建物群は東へ拡張され、Ⅱa期のS B3375・3395は各々S B3376・3393へと規模を拡大して建て替えられる。

以上、A₁群はⅡa期・Ⅱb期に区分できるが、C₂群とD₁群は建物が少なく時期細分できない。むしろ、この2群は堅穴住居で構成されることに特徴がある。C₂群の他の建物は明らかでないが、大阪府百舌鳥破南遺跡のように、堅穴住居と掘立柱建物が混在する群構成であろう。

堅穴住居1棟だけのD₁群はⅠ期の空閑地に占地し、Ⅰ期の群配置を改変する形で出現している。A群とD群の群配置が次のⅢ期へ続くこととあわせ、D₁群の時期はⅡb期と考える。Ⅰ期に集落の東を画していたS D3311に代わって、S D3222が掘られるのもⅡb期であろう。

Ⅲ期 掘立柱建物 S B3363・3385・3406・3409・3440・3450・3460・3470・3496・3499、塙 S A3347、溝 S D3341・3355がⅢ期の遺構である。建物群はS D3400東岸に、S D3355より南のA₂群と北のC₂群、S D3400西岸にC₃群の、計3群がある。これはⅡb期の集落構成と同じである。A₂群とD₂群の建物は主軸方向がほぼN36°Eである。

A₂群のコ字形にならぶ建物3棟のうち、S B3406とS B3385は北妻柱筋と北側柱筋が揃う。ただ、極めて近接して建つので、同時に存在しなかった可能性がある。A₂群の北はS D3355が画す。D₂群はこの集落で最も代表的な建物群である。S B3440・3450・3460は西側柱筋を揃えて並ぶ倉庫風建物であり、S B3460の北東にあるS B3470も、西の柱筋をS B3460の東側柱筋と揃えて建つ。從ってD₂群の4棟の建物はL字形に並び、配置・規模に高い計画性

が窺える。また、S A3347とS D3341をD₂群の北東の境界とみると、この群の占める領域は東西約25m、南北約40mあり、面積にして約1000m²の広さをもつ。兵庫県松野遺跡や大阪府大國遺跡集落Aには及ばないが、大國遺跡集落Eにはほぼ同規模の領域をもつ建物群がある。^{註3}

IV期 据立柱建物 S B3206・3207・3266・3285・3311・3313・3314・3329・3331・3348・3354・3365・3366・3377・3404・3422・3454・3464、土壙 S K3315～3318がIV期の遺構である。IV期の建物の特徴は、I～III期の建物方向とは逆に主軸が北で西に振ることである。IV期の建物を方向と位置関係から、A₁群—S B3354・3366、D₁群—S B3314・3331・3422・3454・3464、E群—その他11棟に分類する。これら3群の建物には先後関係を決定できるものがないが、A₁群とD₁群がIII期の建物配置を受け継ぐのに較べ、E群は調査区の中央に散漫な分布を示し、III期以前とは全く異なる。従って、III期との比較から、A₁群とC₃群をIVa期に、E群をIVb期に編年する。A₁群の2棟の建物は溝S D3355をはさんで群を形成するので、IIb・III期に区画施設であったこの溝は、IVa期には機能していないとみられる。他方、E群はS D3222を超えて東へはひろがらないから、S D3222は境界としてIVb期まで残る可能性がある。

以上、古墳時代の遺構をI～IV期に編年した。各建物群（A～E群）の消長をたどると、A群—I～IVa期、B群—I期、C群—I～III期、D群—IIb～IVa期、E群—IVb期となり、A・C・D群は数期にわたり同じ場所で建て替えを行っていることがわかる。次に、各期の年代を比定しておく。まず、I期のS D3311とS K3322からは5世紀末頃の土器、II期のS B3393・3490、IIb期に掘削されるS D3222・3355及びIII期のS D3341からは6世紀前半の土器、さらにIV期のS K3316からは6世紀後半の土器が出土している。従って、I期は5世紀末頃、II・III期は6世紀前半、IV期は6世紀後半に年代比定できる。S D3400や包含層から出土した遺物に7世紀のものがごく少なく、しかも末頃のものに限られるから、IV期は7世紀に下らない。

最後に、III期のD₂群について付言しておく。D₂群の倉庫風建物は、各々の面積は一般的な規模であるが、3棟が柱筋を描えて並ぶ特徴をもつ。同様の例は、藤原宮跡東方官衙下層と大國遺跡にある。前者は溝と塀で区画された中にL字形に並ぶ5棟の倉のうち4棟が柱筋を描える。後者の集落Aでは、南北に並ぶ2棟の倉と1棟の屋が東側柱筋を描え、また集落Eでも2棟の倉と1棟の屋が北東一南北方向に柱筋を描え、近接して建つ。集落Aでは3棟が大型住居の前面に直交して配置され、集落Eでは大型住居と平行して配置されている。3例とも片側の柱筋だけが描い、個々の建物の柱間には厳密な統一がない。各々の年代は藤原宮下層例が5世紀末頃、大國例の集落Aが5世紀後半、集落Eが6世紀末頃である。大國遺跡の2例は、D₂群と同軌の倉庫群が、規模や区画の存在から集落内でも有力な建物群に限って存在することを示している。D₂群についても、同様の性格を想定することは許されるであろう。

註1 小笠原好彦「畿内および周辺地域における据立柱建物集落の展開」『考古学研究』25-4 1979、月羽佑一「大國遺跡における古墳時代中期後半の建物群の構成」『奈良大学紀要』10 1981

註2 大阪府教委「百舌鳥・藤原遺跡発掘調査概要」(『大阪府文化財調査綱要 1974-13J』) 1975

註3 神戸市教委『松野遺跡発掘調査概要』1983

註4 大阪府教委「大國遺跡発掘調査概要 Ⅲ」(『大阪府文化財調査綱要 1975』) 1976、集落A・Eの呼称は次の文献による。広瀬和雄「大國遺跡における集落の展開」(大阪府教委『大國遺跡発掘調査概要・Ⅶ』府道松原・泉大津線建設に伴う調査) 1982

註5 大國遺跡調査会「大國遺跡発掘調査概要 2」1976

註6 1984年から1985年にかけて行われた藤原宮跡第44次調査。

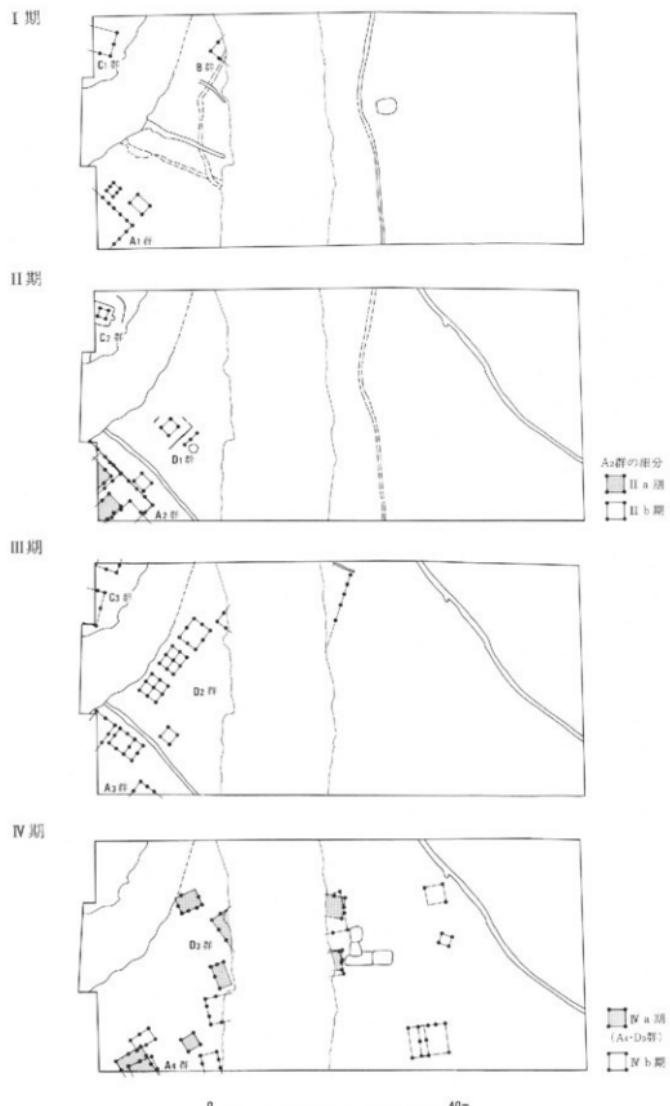


fig.29 古墳時代遺構変遷図 1 : 800

III 遺 物

1 奈良時代の遺物

今回の調査で出土した奈良時代の遺物には、瓦塊類・土器・土製品・金属製品・木製品・石製品がある。瓦は整理平箱で約85箱分、土器は約210箱分あるが、他の遺物は少ない。

A 瓦塊類

瓦塊類の総量は約85箱分で、その半数は三坪の池状造構S G3500の上・中層から、他は各調査区のほぼ全城から散発的に出土した。主なものは丸・平瓦で、軒瓦は20点ある。他に道具瓦が1点、埠の小片が4点ある。

軒瓦 (fig.30, tab. 3, PL.23) 軒瓦20点の内訳は、軒丸瓦が6型式7種9点、軒平瓦が7型式8種11点である。なお、軒瓦の記述にあたっては、奈良国立文化財研究所が設定した型式番号を使用する。

6133A b 6133は外区に珠文をめぐらせた単弁蓮華文軒丸瓦で、12種ある。このうちAは12弁で、蓮子1+5を盛るのが特徴である。A bはA aの範型を彫り直したもので子葉が細い。瓦当部の破片で、復原径は約16.5cmである。

6282D 6282は外区に珠文と線鋸齒文をめぐらせた複弁蓮華文軒丸瓦で、中心の蓮子を大粒にしているのが特徴である。9種あり、Dは瓦当径が約13.2cmと最も小さい。

6307C 6307は外区に珠文と線鋸齒文をめぐらせた複弁蓮華文軒丸瓦で、問弁のないのが特徴である。10種あり、Cは瓦当径が約12.3cmと最も小さい。

6316C・G 6316は6307に類似するが、弁の中央に子葉を分離する界線がなく、弁と弁とが接している点で区別している。11種ある。Cは蓮子1+4で、中房が小さく弁も盛り上る。瓦当部の小片で詳細不明。Gは蓮子1+7で、中房が突出する。復原径約16.0cm。接合粘土は内外とも多量で、瓦当裏面は横方向に箝削りする。丸瓦部の凸面は縦方向に箝削りし、凹面は瓦当近くを指で押えたのち縦方向にならべる。

新型式軒丸瓦 外区に小粒の珠文をめぐらせた複弁6弁蓮華文軒丸瓦で、中房は窪み蓮子1+5を配す。瓦当復原径約13.7cm。瓦当裏面は浅く窪んでいる。

6681C・E 6681は花頭形の中心飾りをもつ均整唐草文軒平瓦で、外区に圓線をめぐらせる。8種ある。Cは中心飾りが特異で、花頭端とC字形の中心葉とが連続する。曲線頭。Eはこの型式の標準例の一つである。平瓦部の凸面は横位の鶴叩き目を施したのち瓦当近くを縦方向にならべ、凹面はほぼ全体を横方向にならべる。曲線頭。復原上弦幅約26.2cm。

6702F 6702は上字形の中心飾りをもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、外区が素文である。8種あり、Fは唐草の巻きが強く最も流麗である。曲線頭。

6710C 6710は山形の中心飾りをもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文をめぐらせる。3種あり、Cは大振りで、唐草の線が太い。平瓦部の凸面は縦方向、凹面は横方向に箝削りする。直線頭。

6711A 6711はい字形の中心飾りをもつ均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文をめぐらせる。2種あり、Aはやや小振りで、唐草の線も細い。唐草は左が3回反転、右が4回反転。平瓦部の凸面は縦方向、凹面は横方向に箝削りする。直線頭。復原上弦幅約26.7cm。

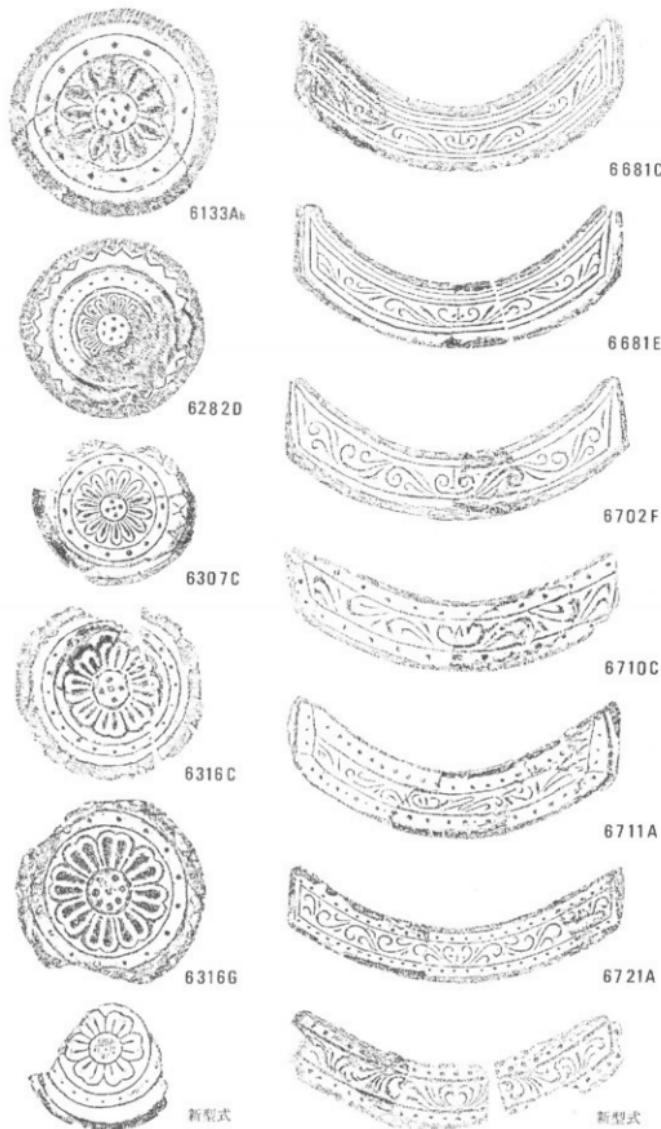


fig.30 轩瓦 1 : 4

型式番号	個体数 二坪 六坪	出土遺構	時期※	同 菩 関 係(大和)	
				二坪	六坪
6133Ab	1	SG3500中層	Ⅲ期	平城宮	
6282D	1		Ⅲ期	平城宮 法華寺 海龍王寺 左京五条二坊	
6301B	1	SG3500中層	Ⅲ期	平城宮 興福寺 法華寺 唐招提寺	
6307C	1	SG3500上層	Ⅲ期	薬師寺 唐招提寺 左京五条二坊	
6316C	1		Ⅲ期	平城宮	
6316G	1	SG3600中層	Ⅲ期	朱雀大路 左京三条二坊	
軒丸瓦新	1	SB3240柱穴			
6664新	1	SG3500中層	Ⅱ期	平城宮	
6681C	1	SG3500上層	Ⅱ～Ⅲ期	平城宮	
6681E	1	SB3190柱振形	Ⅱ～Ⅲ期	興福寺 和田庵寺 左京八条一坊(十坪)	
6702F	1		IV期		
6710C	1	SG3500中層	Ⅲ期	平城宮 羅城門 朱雀大路 西隆寺 左京三条二坊・八条三坊	
6711A	1	SG3500中層	Ⅲ期	平城宮 羅城門 左京八条三坊	
6721A	1	SD3333	Ⅲ期	平城宮 左京一条三坊・五条二坊	
軒平瓦断	1		Ⅲ期	左京八条三坊	

※ 平城宮出土軒瓦編年 第I期(和銅元年～養老5年) 第II期(養老5年～天平17年) 第III期(天平17年～天平勝宝年間) 第IV期(天平宝字年間～神護景雲年間) 第V期(宝亀年間～延暦3年)

tab. 3 軒瓦一覧表

6712A 6712は小字形の中心飾りをもつ5回反転均整唐草文軒平瓦で、外区に小粒の珠文をめぐらせる。10種ある。Aは唐草の線が細く、上外区珠文数26、下外区珠文数27。平瓦部の凸面は縦方向、凹面は横方向に削りする。曲線頭。復原上弦幅約26.0cm。

新型式軒平瓦 蔵手状の中心飾りをもつ3回反転均整唐草文軒平瓦で、外区に珠文をめぐらせる。平瓦部の凸面は縦方向に削り、凹面は未調整で荒い布目が残る。後述する左京八条一坊十坪出土の同范例は布目が側面にまで及び、一枚作りであることがわかる。直線頭。

これらに他にいわゆる興福寺式と呼ばれる複弁丸弁蓮草文軒丸瓦6301B、段頭の均整唐草文軒平瓦6664の新種と考えられるもの及び6681の小片がある。

道具瓦 (fig.31-1、PL.23) 平瓦の一端に玉縁を付したものである。類例が乏しく断定し難いが、櫛振瓦か蝶羽瓦になる可能性がある。凹面は布目のままで、玉縁部の凸面は横方向になでる。玉縁部の長さ約4.4cm、厚さ約1.5cm、復原外径約30cm。

丸・平瓦 (fig.31-2・3、PL.23) 丸瓦はいずれも玉縁が付く。凸面にカキ目のある藤原宮期の丸瓦が少數あるが、他は8世紀のもので、凸面は縦位の縫合目(縫合目)のうち横方向になで、凹面は未調整で布目が残る。完形品が3点あり、うち2点は丸瓦部凸面に幅約5mmの凹線を2条めぐらせており、全長35.2～37.3cm、径14.4～15.4cm。また、玉縁部の凸面に幅3～5mmの凸線を2条めぐらせた丸瓦が2点と、径約12.4cmのやや小形の丸瓦が少數ある。

平瓦はいずれも凸面に縫合目を施す。ほとんどが縦位で、横位は少ない。縦位の縫合目平瓦には、凹面に横骨痕、布の合わせ目痕の残る桶巻作り例と、横骨痕がなく布端が側・端

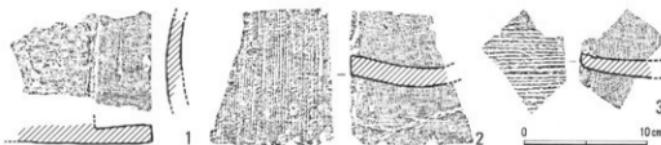


fig.31 道具瓦・平瓦 1 : 4

に残る一枚作り例（2）とがある。量的には後者が大半を占め、そのなかには凹面を丁寧にならぬものや厚さ約1.0cmの薄いものもある。横位の縫合き平瓦（3）も一枚作りであろう。

小結 近年、発掘調査の進展に伴なって平城京においては、平城宮と密接なつながりのある一部の地域をのぞいては瓦が多量に出土することは稀であること、平城宮と同様の瓦以外に京特有の瓦が使用される場合のあったことなどが明らかにされている。今回の調査で出土した瓦は三坪にやや集中するものの絶じて量が少なく、坪内における瓦の使用状況を明らかにするまでに至らなかった。ここでは瓦の年代の特色について若干触れておこう。

今回出土した軒瓦のほとんどは、平城宮出土軒瓦編年表の第Ⅲ期、すなわち奈良時代中頃以降に属する。ただ、6301Bや6664の新種と考えられるものは第Ⅱ期で、丸・平瓦にも藤原宮跡のものが認められることから、瓦の使用は奈良時代前半まで遡らせることができる。新型式の軒丸瓦は今回初出で年代の決め手に欠けるが、第Ⅲ期の6316の退化型式とみて奈良時代末頃に比定できよう。新型式の軒平瓦は中心飾りが第Ⅳ期の6768に類似するが、この系統の中心飾りは^{註4}9世紀後半における法隆寺東院や興福寺の再建時の軒平瓦にも認められる。時期は奈良時代末もししくは平安時代初になろう。

次に、今回出土した軒瓦について他の遺跡との関連を考えてみよう（tab.3）。6133A、6282D—6721A、6301B、6681C・Eは平城宮で比較的多く出土している。他方、6307C、6316G、6702Fは平城宮からは出土せず、6710C、6711Aは平城宮での出土がまれで、むしろ平城京内での出土例が増加しつつある。例えば、6316B—6711Aの組み合わせは羅城門地域、6316G—^{註5}6710Cの組み合わせは朱雀大路沿い、6134B・C・D—6702E・F・H等の組み合わせは今回^{註6}の調査地に近接する左京八条一坊十坪で顯著である（fig.32）。また、平城宮から出土していない6307C、6702Fは薬師寺、唐招提寺、興福寺から同品が出土しており、京内寺院との何らかつながりを暗示する。

平城京内への瓦の供給がどのように行われたのか、官や寺院がそれとどのように係っていたのか、今後に残された重要な課題のひとつである。

註1 奈良國立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』1978、『同（補遺篇）』1984

註2 今回GとJは同范と判明

註3 奈良國立文化財研究所『基準資料Ⅱ 瓦編2解説』1975

註4 山崎信二「大和における平安時代の瓦生産」（奈良國立文化財研究所『研究論集』VI）1980

註5 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告書』1974

註6 1972年奈良國立文化財研究所調査。6702Fは6226・6227と組み合う可能性もある。



fig.32 平城京出土軒瓦

B 土器・特殊土製品

調査区全域から多量の奈良時代の土器が出土した。出土土器の大半は S G 3500と土壙 S K 3300より出土したものである。S G 3500は古墳時代の河川 S D3400の上にある池状構造で、大別して3層に分けられる。土器の出土量が多いのは、S K 3300・S G 3500中層・S G 3500上層であり、これらの土器は、平城宮上器編年の平城宮IIの代表例 S D485より新しく、平城宮IIIの代表例 S K 820より古い様相を示している。このうち、S K 3300出土土器は新しい時期の土器を全く混入しないのに対し、S G 3500中層およびS G 3500上層出土土器は平城宮III～IVの時期の土器を若干混入しているように思われる。以上の想定が正しいかどうかは、S K 3300、S G 3500中層、S G 3500上層から出土した土器を器種別に検討することによって明らかとなろう。
S K 3300・S G 3500中層・S G 3500上層出土土器 (fig.33・35・37・38、PL.24・25)

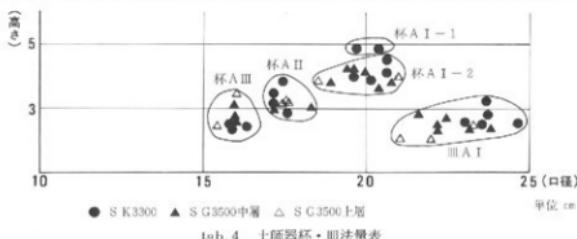
杯A 法量によって、杯A I・杯A II・杯A IIIに区分できる (tab. 4)。

杯A I (口径21.0～18.5cm、高さ3.6～5.0cm) は器高が4.8～4.9cmのもの (A I - 1) と、3.6～4.6cmのもの (A I - 2) に別れる。杯A I - 1 (1・2-S K 3300) は内面に暗文なく、外面はa₀手法。杯A I - 2には、a₀手法・a₁手法・b₀手法、b₁手法・b₂手法の5手法がある。a₀手法の土器 (120-S G 3500中層) には内面に暗文がない。a₁手法 (5-S K 3300)、b₀手法 (6-S K 3300、121-S G 3500中層、220・221-S G 3500上層)、b₂手法 (124-S G 3500中層) の土器は、いずれも内面に螺旋暗文・放射暗文を有する。b₁手法 (3・4-S K 3300、122・123・125-S G 3500中層) の土器には、螺旋暗文・放射暗文だけでなく、連弧暗文を有するもの (3・4・125) と有しないものとがある。

杯A II (口径18.3～17.1cm、高さ2.9～3.9cm) には、a₀手法 (8・10・126)・a₁手法 (127・222・223)・b₀手法 (7・9) の3手法がある。いずれも内面に螺旋暗文・放射暗文を有し、連弧暗文は有しない。

杯A III (口径16.4～15.4cm、高さ2.4～3.5cm) には、a₀手法・a₁手法・b₀手法・b₁手法の4手法がある。a₀手法 (12・129・225)、b₀手法 (11・128) の土器は螺旋暗文・放射暗文だけで、連弧暗文を有しないのに対し、a₁手法 (130-S G 3500中層)・b₁手法 (224-S G 3500上層) の土器は連弧暗文を有している。

杯A I～A IIIを通しての特徴の第1は、内面に暗文のない杯は外面調整がa₀手法であり、内面に連弧暗文を有する杯はa₁・b₁手法であること。特徴の第2は、連弧暗文を有する杯は、比率は少ないが、S K 3300・S G 3500中層・S G 3500上層の3構造から、いずれも出土していること。なお、杯A Iの5、杯A IIの125、杯A IIIの13の底部外面には、明瞭な木葉痕が認められる。



杯B・杯B蓋 杯Aの底部に高台を付したもので、杯BⅢのみ出土。S K3300出土例（14・15）は表面が剥落し、S G3500中層出土例では外面にヘラ磨きを有するもの（135）と有しないものの（134）の両者がある。134・135・226では内面に螺旋暗文・放射暗文が認められる。

杯C 口縁部端面が内傾する杯で、器高が2.7～3.6cm。口径の大きな杯Cが1点ある（227）が、大部分は口径15～17.5cmのに入る。a_o手法の杯C（131～S G 3500中層、227～S G 3500上層）と、b_o手法の杯C（16～S K 3300、132・133～S G 3500中層、228・229～S G 3500上層）とがある。大部分は内面に螺旋暗文・放射暗文を有するが、S G 3500上層出土228の杯Cは、内面に暗文を行しない。16の杯内面には漆が付着する。

杯E 杯E（17・136）は底部外面をヘラ削りした後、底部外面と口縁部外面をヘラ磨きするb_o手法。内面に暗文なく、ヨコナデで仕上げる。

椀A 椓A（230）はS G3500上層からの出土である。口縁部外面をヘラ削りした後、ヘラ磨きする。底部外面の状態は不明。口縁部内面の全体と、口縁部外面上端に漆が付着する。椀AはS K3300およびS G3500中層からは全く出土しておらず、S G3500上層からも1点の出土である。平城宮IIの代表例S D485では椀Aは存在せず、平城宮IIIの代表例S K820では16個体存在することから、椀Aの有無は平城宮IIと平城宮IIIとを区別する重要な目安となりうるのであるが、1点のみの椀Aの存在は、S G3500上層に椀Aが本来伴うものか、平城宮III～IV期の土器が混入したのか、不明であると言わざるをえない。むしろ、S K3300やS G3500中層には、椀Aは全く存在しないことが重要であろう。

椀C 椓Cには、いくつかの形態が認められる。18・19（S K 3300）および137・138（S G 3500中層）、232・233・234（S G 3500上層）は、口縁部の上半と下半の移行部分が屈曲する形態で、口縁部のヨコナデ以下には成形時の凸凹を顯著にとどめる。20・21（S K 3300）137・139・140（S G 3500中層）および231（S G 3500上層）は、口縁部から底部へかけて、なだらかなカーブを描き、ヨコナデ以下の成形時の凸凹は顯著でない。137・231では内傾する口縁部に、浅い凹線を有する。

椀X 22・23（S K 3300）と235（S G 3500上層）は平底で口縁部内側上端に凹線を有する。底部外面未調整。236（S G 3500上層）は口縁部に凹線なく、底部外面にヘラ切り痕をとどめる。

皿A I (11径25～21cm、器高2～3.3cm)には、口縁部下半が内脣し、上半がわずかに外脣する形態（A形態）と、口縁部全体がやや内脣する形態（B形態）がある。S K3300出土の皿A Iには、A形態はa_o手法（26）とb_o手法（25）とがあり、B形態はすべてa_o手法（24・27・28）である。いずれも内面に暗文を有する。S G3500中層出土の皿A Iには、A形態はb_o手法（142～146）で内面に暗文を有し、B形態はa_o手法（141）で内面に暗文がない。S G3500上層出土の皿A Iには、A形態はb_o手法（239）であり、B形態はa_o手法（237・238）で、いずれも内面に暗文を有している。以上を通して、A形態にはa_o手法（26）が存在するが、大部分はb_o手法であり、B形態はa_o手法であることが知られる。S K3300とS G3500中・上層出土の皿A Iを対比してみると、S K3300出土の皿A Iの方が器高が若干高いこと、S G3500中層出土の皿A Iに放射暗文の間隔にまばらなものがある（145・146）こと、暗文が存在しないものがある（141）ことなど、両者に若干の相違が認められよう。なお、S G3500中層出土で、暗文を有しない皿A I（141）は、平城宮III～IV期の上器の

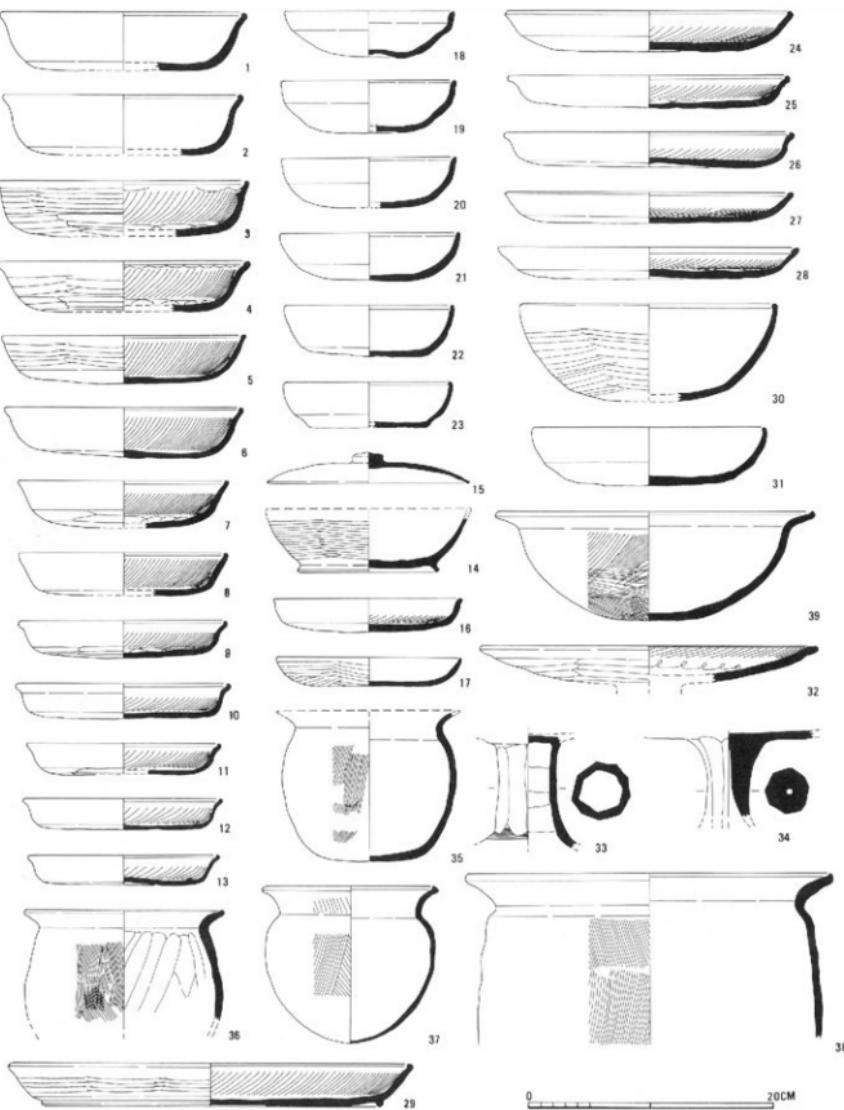


fig.33 SK 3300出土土器 1 : 4

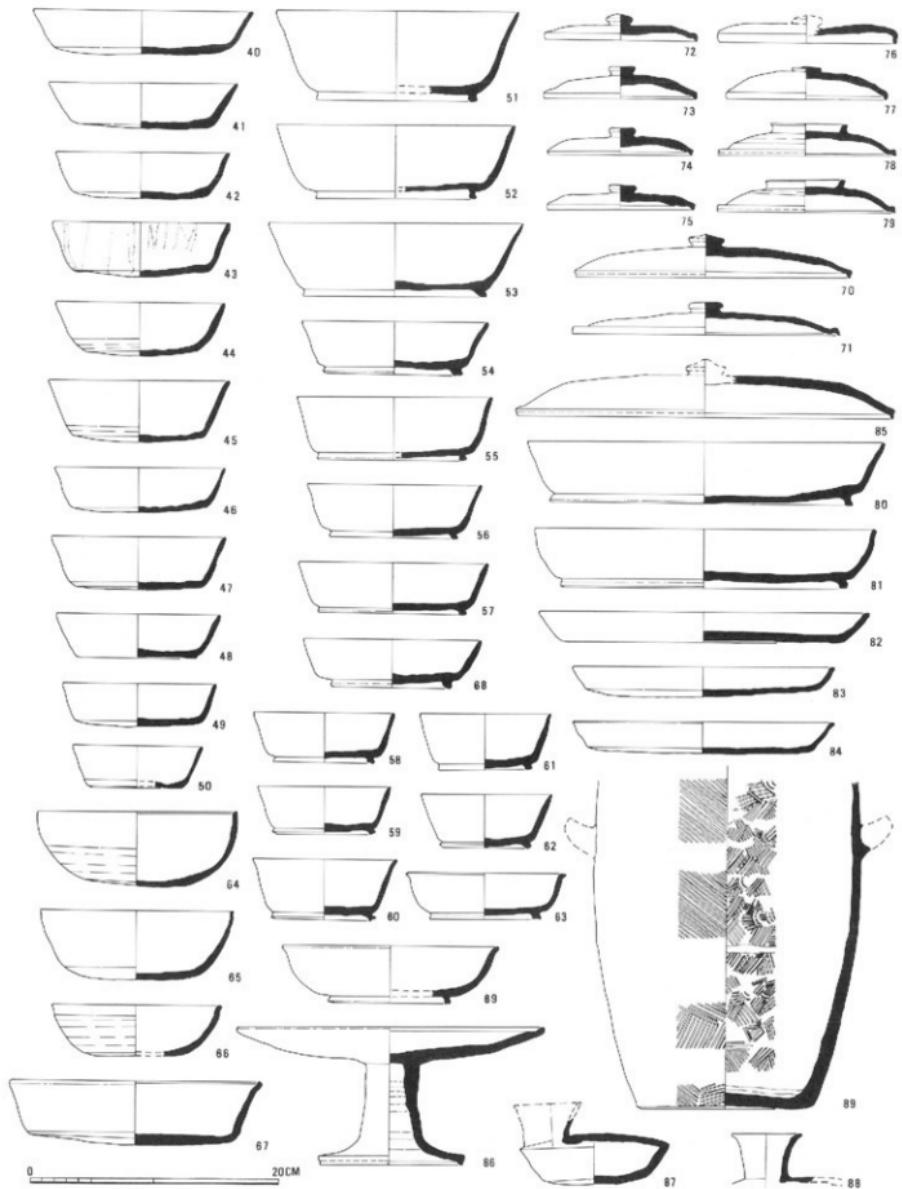


fig.34 S K3300出土須惠器 1 : 4

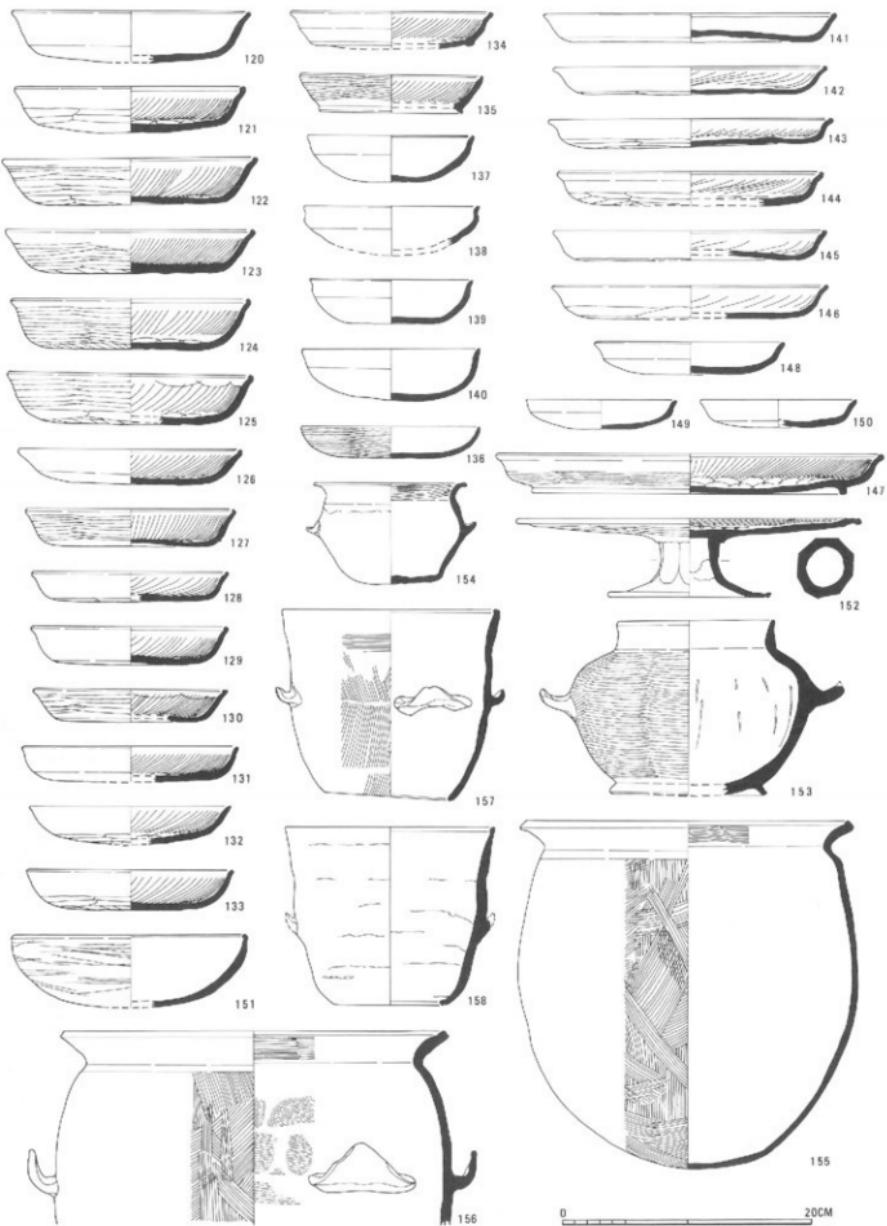


Fig 35 SG3500中层出土土器 1 : 4

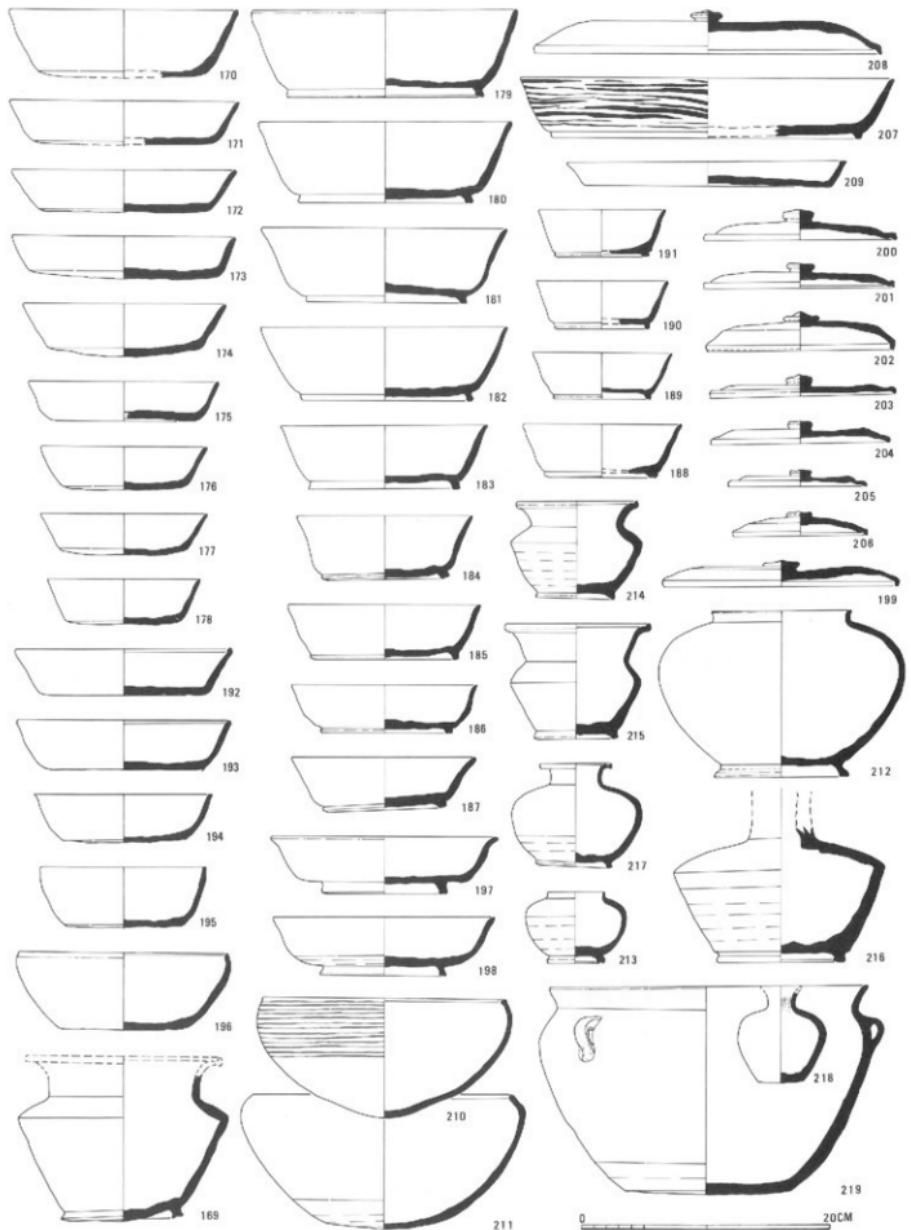


fig. 36 SG 3500中層出土須惠器 1 : 4

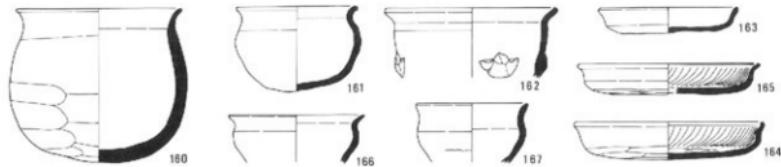


fig. 37 S G3500中层出土漆绘着土器 1 : 4

0 10CM

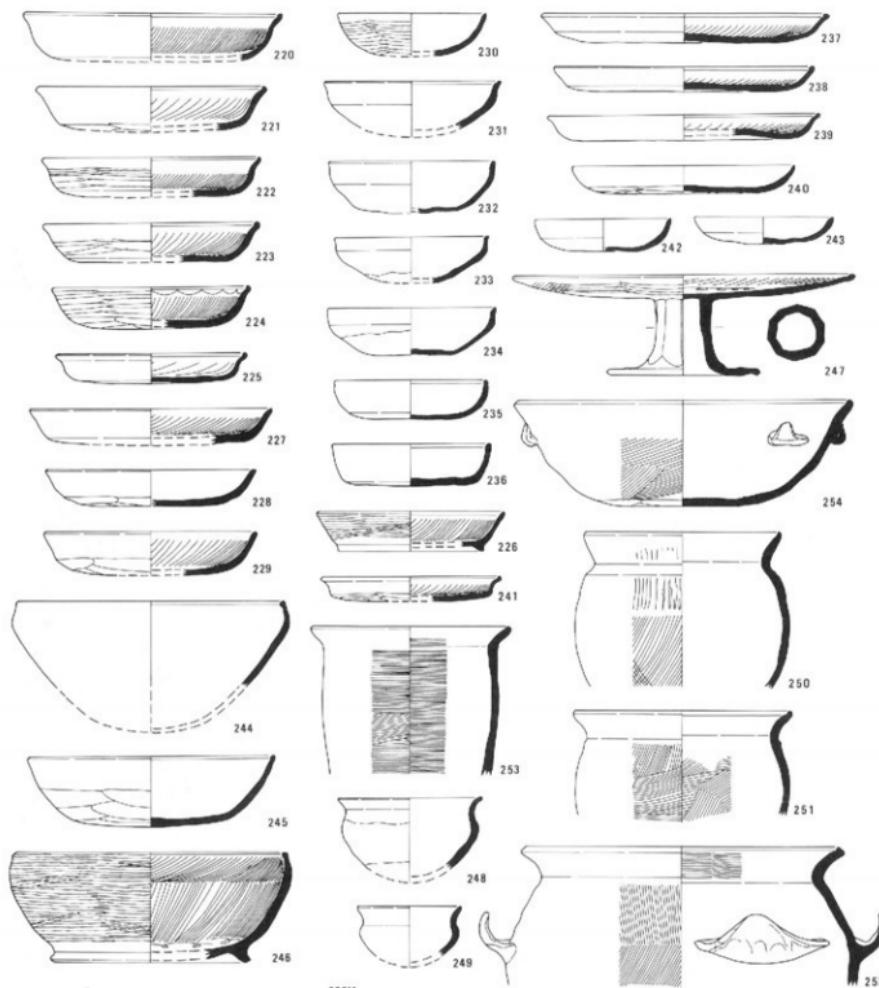


fig. 38 S G3500上层出土土器 1 : 4

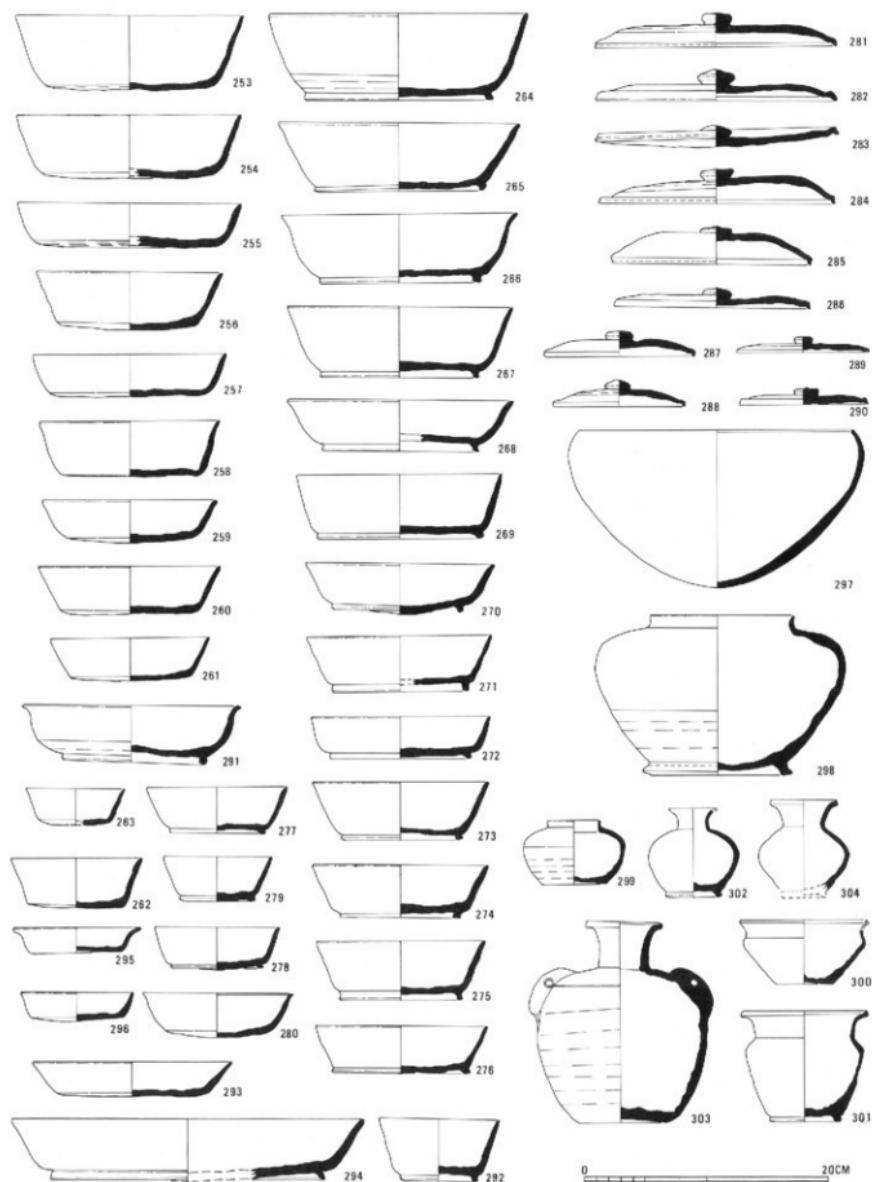


fig.39 S G3600上層出土須惠器 1 : 4

混入である可能性も否定できない。

S G3500上層からは、皿A II (240)・皿A III (241) が出土。皿A II (240) は b₀ 手法で、口縁端部は肥厚しない。内面は剥落しているが、暗文はないであろう。平城宮III～IV期の土器の混入であろう。皿A III (241) は外面を b₁ 手法で調整し、内面に螺旋暗文・放射暗文を有する。同形態の皿A III は S G3500中層からも出土 (165)。これには漆塗り用の受皿と考える根拠がある。小型の皿Aは平城宮・平城京を通して数が少ないので、特殊な用途が考えられる。

皿B 皿Bは高台を付した大型の皿。S K3300中土皿B (29)、S G3500中層出土皿B (147)とも、内面に螺旋暗文・放射暗文を有する。147では、底部内面に数段の螺旋暗文を施す。29の口縁部外面は剥落しており、判断は難しいが、ヘラ磨きはないようである。即ち、底部外面にヘラ削りを行なう b₁ 手法である。147は口縁部外面にヘラ磨きのある b₁ 手法。平城宮IIの代表例 S D485の皿Bはヘラ磨きがあるが、平城宮IIIの代表例 S K820の皿Bにはヘラ磨きはないから、S K3300出土の皿Bは S D485よりも S K820により近いこととなる。

皿C S G3500中層出土の皿C (148・149・150・163) は、口縁部の内外を横ナデするにとどまり、底部外面の調整をおこなわない。148は口径15.4cmで、皿Cとしては人形の器。148・149の内面にはスヌが、163の内面には漆が付着する。前者は灯火器、後者は漆塗り用の受皿として使用したのである。S K3300及びS G3500上層 (242・243) からも皿Cが出土。

鉢A S G3500上層出土の鉢A (244) は、口縁部の破片で、口縁部内外面を横ナデする。

鉢B 鉢Bは、わずかに内凹する口縁部をもつ。外面調整には、a₀・b₁・b₀・c₁ 手法の4手法がある。S K3300出土の鉢Bには、c₁ 手法で調整するもの (30) と、a₀ 手法で成形時の凹凸をとどめるもの (31) がある。S G3500中層出土鉢B (151) は b₁ 手法、S G3500上層出土鉢B (245) は b₀ 手法で調整する。4例とも、内面に暗文を有しない。

鉢C S G3500上層出土の鉢C (246) は、b₁ 手法で外面を調整し、内面に螺旋暗文・二段放射暗文を有する。

高杯 S K3300出土高杯の杯部破片 (32) は、杯部外面に口縁に添う数回のヘラ削りをおこなうが、ヘラ磨きはない。杯内面に螺旋暗文・一段放射暗文を有する。S K3300出土高杯の脚部破片には、粘土紐をまきあげ、脚の軸部を下から上にヘラ削りして九角形に面取りしたもの (33) と、丸い棒状のものを芯にして脚柱部をつくり、外面をヘラ削りで八角形に面取りしたもの (34) とがある。S G3500中層出土の高杯は、粘土紐を巻きあげて脚部を形成したが多く、脚部の高さが4.5cmで低いもの (152) と、9cmでやや高いものがある。脚柱部外面は、九角から十三角に面取りされ、九角形のものが多い。杯部上面に螺旋暗文・一段放射暗文を有するものと、螺旋暗文・二段放射暗文を有するもの (152) がある。S G3500上層出土の高杯には、粘土紐をまきあげ、脚の軸部を十角形に面取りしたもの (247) と、丸い棒状のものを芯にして脚柱部をつくり、外面を七角形に面取りしたもの (図示せず) とがある。後者は、平城宮IV期の土器の混入であろう。

壺A S G3500中層出土壺A (152) は胴部外面にヘラ磨きをおこない、胴部には斜め上方に向かう三角形把手がつく。胴部内面にはヘラ工具による縱方向の押圧の痕跡がある。体部外面にスヌが付着する。S G3500上層出土壺Aは表面剥落して、技法不明。

壺B S K3300出土壺B (35) は胴部にハケメ調整をおこなうが、胴部下半には成形時の凹凸

をとどめる。S G3500中層出土壺Bには、三角形把手を有するもの（154・162）と把手を有しないもの（161・167）がある。154は肩部に三角形把手をもつ。胴部外面に粘土紐の痕跡を残し、底部へかけて指による押圧の痕跡が残る。口縁部内面に横ハケメをおこなう。162の三角形把手の先端は、胴部に付着しており、ボタン状の把手に近い形態。161は胴部下半に成形時のU内をとどめる。160・161の内面および162の内・外面上には漆が濃く付着している。161と同形態の土器で、内面に漆が付着する土器は10点以上あり、漆容器として使用されたことは疑いない。S K3300出土の160は底部および体部外面をヘラ削りしており、壺Bとしては特異な例。S G3500上層出土の壺B（248・249）のうち、249には内面に漆が付着。

壺A S K3300出土壺A I（38）は体部外面をハケメ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。

壺A IIIには、体部内面にヘラ削りをおこなうもの（36）と、ナデによって調整するもの（37）がある。S G3500中層出土壺A Iは、体部外面をハケメ、内面をナデ、口縁部内面をハケメで調整。S G3500上層出土壺A III（250・251）のうち、251の体部内面には横ハケメがある。

壺B 壺B（156・252）は上方にのびる三角形把手を有する。胴部外面及び口縁部内面にハケメをもつ。156の胴部内面は指による押圧の後、ヨコハケで調整し、ナデで仕上げる。

壺C S G3500上層出土の壺C（253）は体部内外面を横ハケメで調整し、胎土に多量の白色砂粒を含む。

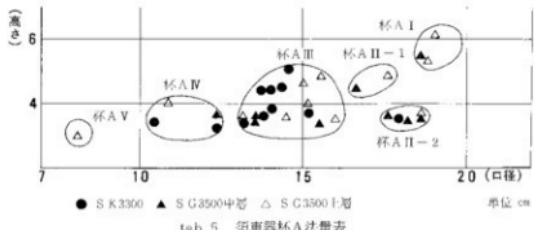
鍋A S G3500出土の鍋A（39）は、体部外面をハケメ、口縁部内外面をヨコナデで調整する。

鍋B S G3500上層出土の鍋B（254）は体部と口縁部の屈曲が少なく、底部外面をヘラ削り、体部外面をハケメで調整する。体部内側の三角形把手の先端部は口縁部外面に付着する。

瓶 S G3500中層出土の瓶（157・158）は、胴部外面をハケメ調整するもの（157）と、指による押圧で未調整のもの（158）がある。157は上方にのびる三角形把手をもつ。158には粘土紐の痕跡が明顯に残る。把手先端は157にくらべて胴部に近接するものであろう。

S K3300・S G3500中層・S G3500上層出土須恵器 (fig.34・36・39, PL.24・25・26)

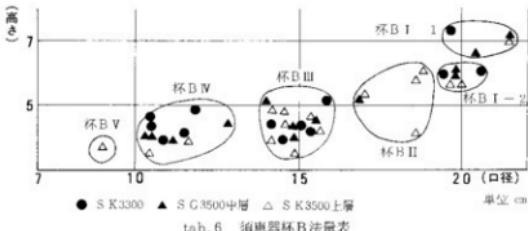
杯A 法量によって、杯A I・杯A II・1・杯A II・2・杯A III・杯A IV・杯A Vに区分できる (tab. 5)。底部外面をヘラ削りするのは、杯A I（253）、杯A II・1（1点図示せず）、杯A II・2（173・255）、杯A III（44・45・259）であり、他の杯A I～杯A III、およびすべての杯A IVと杯A Vは底部外面ヘラ切りのまま不調整である。杯A I（口径18.5～19.2cm、高さ5.3～6.2cm）および杯A II・1（口径16.5～17.6cm、高さ4.4～4.9cm）には、底部外面上にヘラ削りをおこなうもの（253）と、ヘラ切りのまま不調整のもの（170・174・254）がある。いずれもS G3500中・上層からの出土で、S K3300からは出土していない。杯A II・1



2 (口径17.5~18.7cm、高さ3.4~3.8cm)には、ヘラ切りのまま不調整のもの (40・171・172) とヘラ削りするものとがあるが、ヘラ削りする173と255とは、器壁が分厚く、底部が水平で、口縁部との屈曲部がまるく、口縁端部が内傾する特徴を有し、胎土・焼成が酷似している。杯A III (口径13.1~16cm、高さ3.3~5.1cm・41~46・176~178・256~261) で、ヘラ削りをおこなうS K3300出土の44・45は、器高がやや高く、まるみをもつ平底を有する。SG3500上層出土で、ヘラ削りをおこなう259は、口縁部が斜め上方に開く。ヘラ切りのまま不調整の258は、口縁部が上方へ直立気味に立つ。258は平城宮III~IV期の混入品であろう。杯A IV (口径10.4~12.5cm、高さ3.2~4.1cm・49・50・178~262) および杯A V (口径8.2cm、高さ3cm~263) は、いずれも底部外面へラ切りのまま不調整。なお、41・47はロクロ左回転、他の杯Aはロクロ右回転である。

杯B 法量によって、杯B I-1・杯B I-2・杯B II・杯B III・杯B IV・杯B Vに区別できる (tab. 6)。杯B I-1 (口径19.5~21.5cm、高さ6.5~7.4cm) には、底部外面をヘラ削りするものが多く (179・180・264)、高台は外に力強く張り、断面が角張っている。杯B I-2 (口径19.4~20.6cm、高さ5.5~6.2cm) には、底部外面をヘラ削りするもの (52・265・266) とヘラ切りのまま不調整のもの (53・181・182) とがある。ヘラ削りするものには、口縁部が斜め上方に開くもの (265) と、屈曲しながら上方へ開くもの (266) とがあり、ヘラ切りのままのものには、高台が外方へふんばるもの (53) と、下方にのひる小さな高台 (182) とがあり、技法および形態に多様性がある。杯B II (口径16.8~18.9cm、高さ5~6.2cm) は、ヘラ切りのまま (183・268・269)。268は後述する杯Iと杯Bとの中間的形態を示す。杯B III (口径13.9~16cm、高さ3.5~5.2cm) は1例 (272) をのぞき、底部外面へラ切りのまま (54~57・68・184~187・270・271・273~276)。68の高台は底部やや内方よりに付される。187は胎土に多くの白色粒を含み、器壁も分厚い。他の杯Bとは生産地が異なるのであろう。187の底部外面には磨耗があり、墨が付着する。転用観として使用されている。270は底部がまるみをもち、高台は底部内方よりに付されており、古い要表をもつ。杯B IV (口径10.2~12.9cm、高さ3.5~5cm) は、底部外面をすべてヘラ切りのまま (58~62・188~191・277~278)。SK3300出土の杯B IVの高台は、外に力強く張り出す。SG3500中・上層出土の杯B IVの高台は、外に張り出すもの (191・278) と、口縁部と底部の境の位置に、小さく下方に付されるもの (189・277) とがある。後者は平城宮IV期頃の混入品であろう。杯B V (口径9.0cm、高さ3.7cm) は、底部外面へラ切りのまととする (279)。

杯B蓋および杯蓋 口径から蓋I・蓋II・蓋III・蓋IVに区別できる。蓋I (70・71・281~283)



は、いずれも頂部上面をヘラ削りの後、ロクロナデで仕上げる。口縁部が屈曲しないもの（70・281）とやや屈曲するもの（71・282）、口縁部が屈曲して、そり返るもの（283）がある。283は平城宮IV期頃の混入品であろう。蓋II（199・284）は、頂部上面をヘラ削り後、ロクロナデで仕上げる。284は杯蓋観として使用。蓋III（76・200～204・285・286）は、頂部上面をヘラ削りするもの（201・202・285・286）と、ヘラ切りのままのもの（76・200・203・204）がある。ヘラ削りする蓋IIIには、まるく笠形の頂部をもち口縁部が屈曲しない202・285と、頂部が平坦で口縁部がわずかに屈曲する201・286とがある。ヘラ切りのままの蓋IIIは、すべて頂部が平坦である。蓋IV（72～75・77・205・206・287～290）は頂部上面をヘラ削りするもの（72～74・288・290）と、ヘラ切りのままのもの（75・77・205・206・287・289）とがある。両者とも口縁部の屈曲は少ないが、口縁部がS字状に屈曲する205は平城宮IV期頃の混入品であろう。

杯C 杯Cは口縁端部が内側に巻き込むもの。口径によって杯C I（20cm前後）・杯C II（17.5cm前後）に区別できる。杯C Iには底部外面をヘラ削りするもの（67）としないもの（SG3500上層例）、杯C IIにもヘラ削りするもの（193）としないもの（192）とがある。

杯E 平底と内唇する口縁部からなる鶴瓶形の形態。口径によって、杯E I（15.5～17cm）・杯E II（13.4～14.5cm）に区別できる。杯E Iには、底部外面から口縁部下にかけてヘラ削りするもの（64）と、ヘラ切り後荒いナデで調整するもの（65・196）とがある。杯E IIは、ヘラ切り後ナデで調整するもの（194・195・280）と、口縁端部を除く口縁部の大部分にヘラ磨きをおこなうもの（66）とがある。

杯F 杯Fは高台を有し、口縁端部が平坦面となるもの。SG3300出土杯F（63）は底部をヘラ削りし、口縁部をヘラ磨きする。須恵器II群上器。

杯L 杯Lは丸底盤の底部と口縁部よりかなり内方により高台をつけ、外反して立ちあがる口縁部は上端でさらに外反する。底部外面にヘラ削りをおこなうもの（69・198）、底部と口縁部の屈曲部のみヘラ削りをおこなうもの（291）、ヘラ削りをおこなわないもの（197）がある。環状の紐をもつ蓋 SG3300出土の蓋78・79は頂部上面をヘラ削りし、環状のつまみをつける。いずれも黒色物質の粒子が移動してくずれ、墨でぼかしたような状況を示す（須恵器II群土器）。この蓋は高台を有する杯Fまたは杯Lの蓋と思われるが、本遺跡出土の杯Lは口径が18cm前後であるのに対し、蓋は14cm前後であり、杯Lとは大きさが合わない。SG3300出土の杯F（63）は須恵器II群土器であり、杯Fと組み合う可能性がある。しかし杯Fは宝珠形の紐を有する蓋と組み合って使用されたことは後述の通りであって、常に杯Fと環状の紐をもつ蓋とがセット関係をなすものではないだろう。同型式の蓋はSG3500上層からも出土している。

皿A SG3500上層出土の皿A（293）は、底部外面をヘラ切り後、ナデで仕上げる。

皿B 皿B I（80・81・207・294）は、いずれも底部外面をヘラ削りした後、高台をとりつける。SG3500中層出土の皿B I（207）の口縁部外面にはヘラ磨きがある。

皿B蓋 皿B蓋（85・208）は、いずれも頂部外面をヘラ削りする。

皿C 皿C（82～84・209）は、いずれも底部外面をヘラ切り後、ナデで仕上げる。

椀B SG3500上層出土椀B（292）はヘラ切りのままで、ヘラ削りをおこなわない。

鉢A いわゆる鉄鉢形の器形。丸底が古く、尖底が新しい。SG3500中層の鉢A（210・211）

は丸底で、210の口縁部外面をヘラ磨きする。SG3500上層の鉢A（297）は、やや尖底に近くなるが、なお丸底であり、平城宮Ⅲ期の代表例SK820出土の鉢Aよりも丸味をもっている。

鉢B 平底で内側する口縁をつけ、口縁端の1個所を曲げて注口をつくる。底部と口縁部を別粘土で作り、口縁部外面をヨコナデする。口縁部外面に「宅主」の墨書きがある。SG3500中層と下層の土器が接合。

高杯 SK3300出土の高杯（86）は杯部と脚部を別に作り、接合部に溝を入れて接合する。杯部下面はヘラ削りのあとロクロナデで調整。脚柱部内面の上半にはシボリ目が認められ、脚柱部下半にはロクロ上で挽いた痕跡が認められる。

壺A 肩が張り、直立する短い口縁部と高台を付す壺。212・298は、いずれも蓋をかぶせて焼成した痕跡が残る。体部下半および底部外面をヘラ削りする。

壺C 肩が張り、直立する短い口縁部をもつ小型の壺。SG3500中層出土の壺C（213）は、肩部と底部内面に自然釉が付着する。213は底部外表面をヘラ削りした後、高台を付ける。SG3500上層出土の壺C（299）は、高台を持たず、底部外面に糸切り痕を有する。

壺E 斜め上に開く肩部と、狭い肩部に外傾する短い口縁部を付した広口の壺。SG3500上層出土の壺E（300）には、底部外面に糸切り痕をとどめる。

壺H 幅の狭い肩に、直立する頸部と大きく外反する広口の口縁部を有し、高台を付す壺。体部の低い壺（214）は、体部と底部外面にヘラ削りをおこない、体部のやや高い壺（215・301）は、底部外面にヘラ切り痕をとどめる。

壺K 肩が張り稜角を呈する体部からなる長頸壺。SG3500中層出土の壺K（216）は、体部をヘラ削りし、底部に高台を付す。壺Kは平城宮Ⅲ期の代表例SK820では消失している。

壺L 卵形の体形に口縁部が外反する口頸部をつける壺。SG3500中層出土の壺L（217）は口縁端部が屈曲し、体部下半と底部外表面をヘラ削りする。高台を付す。

壺M 平底でイチジク形の体部に、外反する口頸部をつける小型の壺。SG3500中層出土の壺M（218）は体部にヘラ削り様の調整があり、SG3500上層出土の壺M（302）には底部外面にヘラ切り痕をとどめる。218に高台がなく、302に高台がある。SG3500上層出土の壺M（304）は、口縁端部が屈曲する。

壺N 平底で卵形の体部に直立する口頸部を付し、肩部に一对の特異な把手を付す。SG3500上層出土の壺N（303）では、肩部に一条の沈線を入れ、半月形の把手を付した後、把手の中央に円孔を穿つ。体部下半および底部下半をヘラ削りで調整する。

平瓶 SK3300出土の平瓶（87・88）は体部背面中央の開口部を円板で塞いた後、円孔を切り注口をつける。広口の注口が閉鎖口まで及ばないもの（87）と及ぶもの（88）とがある。

壺A・壺C 壺Aは宋處理で省略。壺Cは広口に開く口縁部と器高の低い体部からなるもの。

壺C I （口径37cm、高さ20cm）、**壺C II** （口径24～26cm、高さ17cm）に別れる。SG3500上層出土の壺C Iは、高台を有し四方に把手を有する。壺C IIは、高台を持たず、二方に把手を有するもの（SG3500上層出土）と、三方に把手を有するもの（219～SG3500中層出土）とがある。219は底部外面をヘラ削りで調整する。いずれも器の内外面に叩目痕を残さない。

壺X SK3300出土の壺X（89）は平底で、わずかに上に広がる胴部をもつ。底部と胴部を別に作る。底部外面をヘラ削り、内面をヨコナデ調整する。胴部内面には円弧と斜線を組み合わ

せた特殊な叩目文、胸部外面には平行叩目文を有する。胴部、底部内面全体に漆が付着。

S G3500下層出土土器 (fig.40, PL.24)

S G3500の下層は、下層Ⅰとその上の下層Ⅱに細分できる。前者の土器は平城宮Ⅰ、後者の土器は平城宮Ⅱの特徴を示している。したがって、以下では、分離して説明する。

S G3500下層Ⅰ出土土器 土師器杯A・須恵器杯B・壺がある。土師器杯A (90) は底部外面に木葉痕を残し、口縁部及び底部外面をヘラ磨きする α_3 手法。内面に螺旋暗文と一段放射暗文がある。須恵器杯B (91) は底的外面をヘラ切りのまま未調整で、高台をつける。ロクロ右回転。壺 (92) は体部最大径16.3cmで、高台をつける。

S G3500下層Ⅱ出土土器 杯A・杯C・皿A・皿C・碗C・壺A・壺Cがある。杯A II (93)

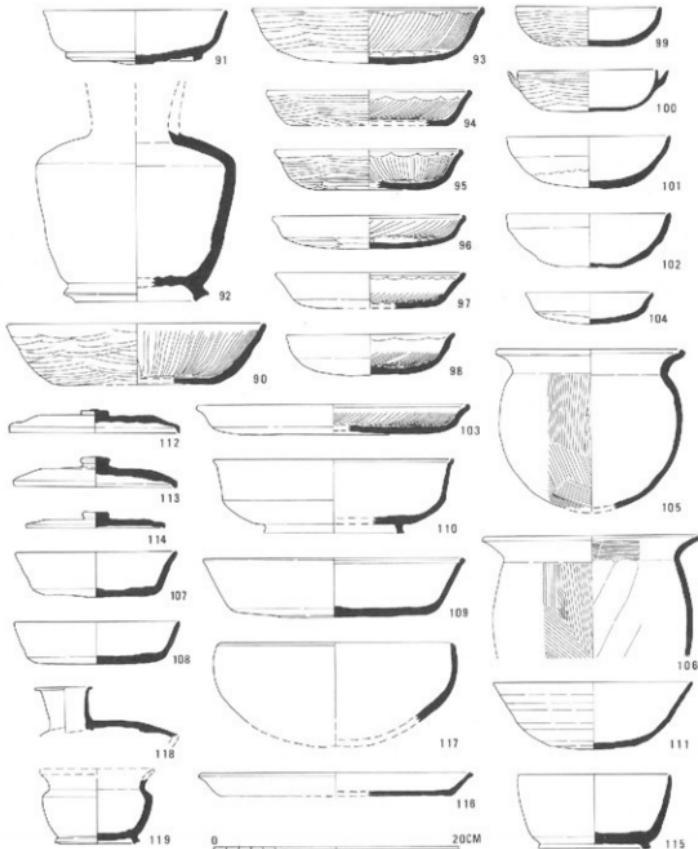


fig.40 S G3500下層出土土器

は a₁ 手法で、内面に螺旋暗文・放射暗文・山形の連弧暗文を有する。杯 A III (94~97) には、a₃ 手法 (94)、b₁ 手法 (96)、b₂ 手法 (95) がある。94・95・97 は螺旋暗文・放射暗文・連弧暗文を有する。96 は放射暗文がまばらで、連弧暗文を有しない。杯 C (98) は a₂ 手法で、内面に螺旋暗文・放射暗文・連弧暗文を有する。杯 E (99) は底部外面をヘラ削りした後、底部外面と口縁部外面をヘラ磨きする b₃ 手法。100 は E の形態に把手を有するもので b₃ 手法。椀 C (101・102) は口縁部のヨコナデ以下には成形時の凹凸をとどめ、101 の外面に粘土紐の痕跡を残す。皿 A (103) は b₁ 手法で、内面に螺旋暗文・放射暗文を有する。皿 C (104) は底部外面未調整で、外面上に粘土紐の痕跡を残す。内面にスヌが付着しており、灯火器として使用。甕 A (105) は外面上をハケメ、内面をナデで調整。甕 C (106) は体部内面をヘラ削りし、体部外面および口縁部内面をハケメで仕上げる。

SG3500 下層 II 出土須恵器 杯 A・杯 B・杯 B 盖・杯 C・杯 L・杯 X・皿 B・皿 C・鉢 A・平瓶・甕 A がある。杯 A IV (107・108) は底部外面をヘラ切り後、荒いナデによって調整。杯 B 盖には、杯 B IV 盖 (112・113) と杯 B V 盖 (114) がある。112 は頂部上面をヘラ削りし、113・114 はヘラ切りのままロクロナデして仕上げる。113 には口縁部の屈曲はなく、112・114 も口縁部の屈曲は少ない。杯 C (109) は底部外面をヘラ切り後、ナデで調整。杯 L (110) は、平底の底部をもち、口縁部よりかなり内方に寄りに高台をつけ外反して立ちあがる口縁部は上端でさらに外反する。口縁部内面上端には沈線を有し、口縁部下半と底部外面をヘラ削りする。本例は、先述した SK3300 および SG3500 中・上層出土の杯 L にくらべて、はるかに佐波理容器に近い形態を示す。京都府長刀坂古墓出土佐波理容器などの直接の模倣と言ってよい。ただし、この杯 L は遺物取り上げ時に若干の混亂があり、SG3500 下層の可能性が強いが、中層に比定される可能性も捨てきれない。杯 X (111) は杯 E に類するが、口縁部が斜め上方に開く。底部外面をヘラ削り・横ナデ、口縁部内外面を横ナデで仕上げる。底部内面には、使用して磨耗した痕跡がある。椀 B (115) はヘラ切りのままで高台をつける。

その他の土器・特殊土製品 (fig.41, PL.26)

土器埋納遺構の土器 S X 3466 例 (305・306) と S X 3434 例 (307・308) は須恵器杯 F と宝珠形の紐を有する蓋とが組み合って出土。蓋 (305・307) は両者とも口縁部を強くナデしており、口縁部が屈曲するのが特徴。杯 F は特殊な用途を考えさせる。305~308 はヘラ削りをおこなわない。S X 3388 例 (309・310) は土師器甕 A と須恵器蓋とが組み合って出土。309 は頂部外面にヘラ削り。310 の体部外面と口縁部内面にハケメ調整。

陶鏡 合付圓足鏡 3 個体と鳥形鏡 1 個体が出土。324 (三坪出土) は陸と海との区別が明確。325 (三坪出土) は、陸の周囲に低い内堤をめぐらし、圓足部に透しがない。326 (SG3500 中層) は圓足部に 23 の長方形透し孔をあける。327 (SK3300) は嘴と体部を失っているが、水鳥を表わす鳥形鏡と推定できる。竹管で眼を表わし、ヘラ描きで頸部の羽根毛をあらわす。土馬 頭部の出土はなく、頭部・胴部・四肢・尾部の残る 2 例を図示した。SG3500 中層 (329) と上層 (328) 出土。いずれも頭部横断面は腹部面が凹み、尾は斜め上方に立つ。

墨書き土器 SG3500 F 層 (311)・同中層 (312~318)・同上層 (319~320)・SE3451 (321)・SE3260 下層 (322) 出土上器を図示。上層器杯 C (312) は a₂ 手法、杯 A I (322) は c₂ 手法。須恵器杯 A および杯 B で底部外面にヘラ削りをおこなうのは 314・318・319 である。

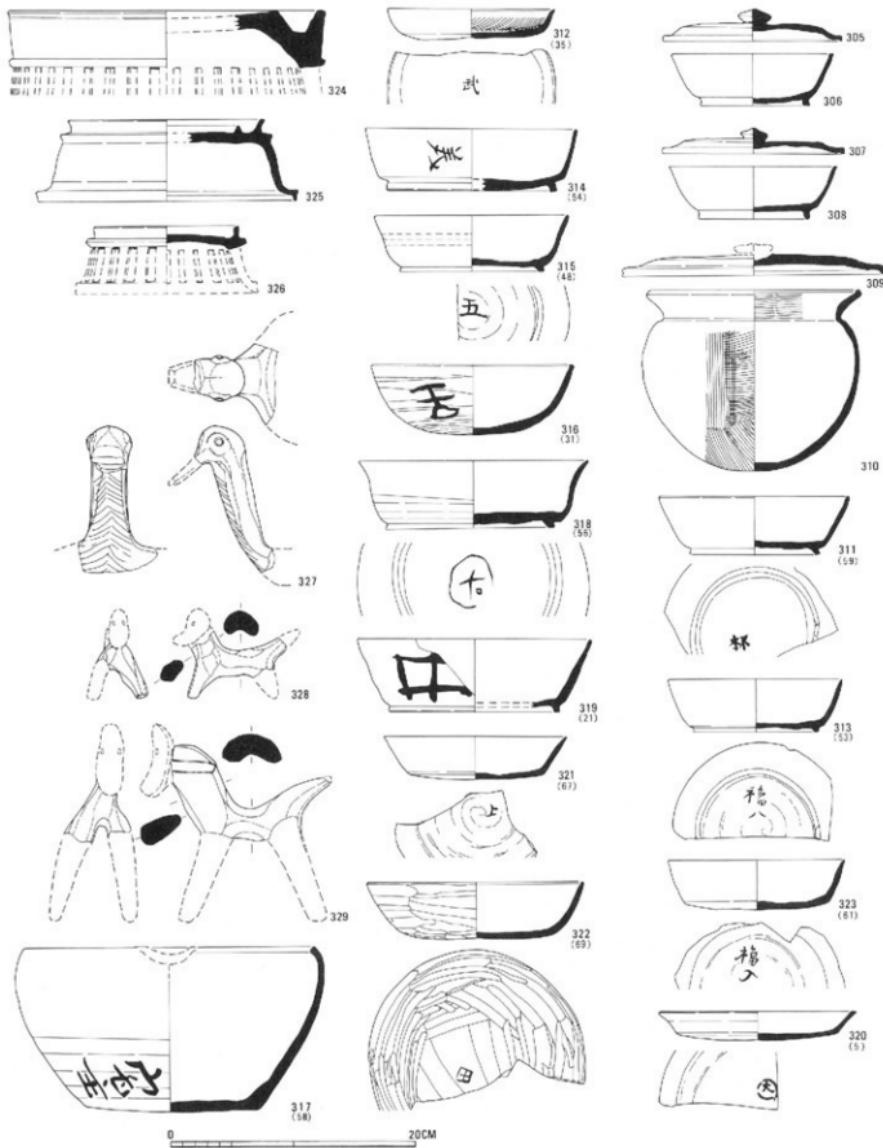


fig. 41 埋納土器・墨書き器・鏡・土馬 1 : 4

C 墨書き土器 (fig.41・42, tab. 7, PL.27)

墨書き土器は池田遺構 S G3500から88点、大土塁 S K3300から5点、井戸 S E3260から2点、三・六坪の坪境小路東側溝 S D3333から1点、奈良時代の遺物包含層から3点、混入ではあるが近世井戸 S E3451から6点が出土した。総点数105点で、そのうち土師器は39点、須恵器は66点である。以下、墨書き土器のうち注目されるものを選び、若干の注釈を付す (PL.27)。

神 (33) 「神」の字の左下から斜め上方へ5葉の忍冬文が描かれている (表紙カット、fig.41)。「神」の字の右側が欠けた破片であるため断定はできないが、恐らく右側にも同様の文様があって、「神」の字を挟んで左右に5葉の忍冬文が配される構図であったと思われる。似た構図は、^{註1} 例えば法隆寺納御物四十八体仏中の「光三尊仏立像光背の頃光頂上部にみられる (fig.42)。これは中央の蓮華座上に宝珠形を置き、宝珠形の背後から上方に化仏の乗る蓮台、左右の上方に5葉の忍冬文を配したものである。両者を比較すると、「神」は位置的に蓮華座に乗り仏の象徴である宝珠形と同じとみてよいであろう。「神」がただちに神祇を指すとみてよいか検討の余地はあるが、仏やその象徴に用いた座の表現を応用したものと考えられる。ただし、土器の底部に画かれた理由は判然としない。三坪居住者によって祭祀に用いられたものであろうか。あるいは戯画的なものかもしれない。

福入 (32・53・60・61・62) 福が入ることを祈って書いた咒句・吉祥句の類か。古代の人々が^{註2} 福を求める姿については既に遺物に基づいた研究があるが、民俗例にも人々が福を求める招福行事がある。福入雑煮を食べて祝う行事等、とくに正月に集中して全国各地に招福行事がみられる。^{註3} 「福入」と墨書きされた土器は三坪の S G3500中層から2点、六坪の S K3300から3点と、坪を異にするほぼ同時期 (平城宮土器編年Ⅱ～Ⅲ) の遺構・堆積層から出土し、少なくとも須恵器に書かれたものは同筆とみられるが、このことが古ちに三・六坪居住者相互の密接なつながりを示すと断定することはできない。

逆 (1・19・22・27・43・66) 「逆」一字記すものが3例、「逆」に続けて数字を記したもののが3例ある。数字が数を算えたものとすれば、「逆」は用途・所属を示すものか。

杯 (59) 杯Bの底部外面に墨書きされ、器名を記したもの。現在、杯と命名分類している器形が奈良時代にも杯と呼ばれたことを示す。ただ何故に器名を籠々墨書きしたのかは明かでない。

「柏」(52) と墨書きされる杯Bの蓋はこの杯Bと組み合うもので、「柏」は「杯」とみられる。

甌 (20・29・39・51) 甌はミカと訓み、甌のことと、液体を容れる大形の容器を指す。「甌」と書かれた上器で器種の判明する例は須恵器の杯Bで、「甌」を杯Bの器名と考えることは文献史料の用例からみても困難である。「甌」はこの場合、人名であろうか。

佐加口 (君ヶ) (65) 佐賀君のことか。『日本書紀』下巻第十九縁に肥前國佐賀郡大領として佐賀君兒公がみえる。ただし、佐賀君が京・畿内に居住していたことを伝える史料はない。

宅主 (58) ・刀自女 (2・36) 宅主・刀自女は各々男性・女性の名を記したもの。口口 (刀自ヶ) (23) も上器そのものが欠けていて断定はできないが、恐らく刀自女であろう。刀自女と記す3点は同筆らしい。

註1 東京美術学校『法隆寺大鏡』九 1932

註2 水野正好「福德 - その心の考古学」(奈良大学『文化財学報』1) 1982

註3 横田国男編『成時習俗語彙』1939など。



fig. A2 SG 3500出土墨書上器



fig. A3 御物四十八体位光背

番号	墨書内容	器種	位置	PL.28	番号	墨書内容	器種	位置	PL.28
1	逆(上卦)	土師器	杯AⅢ	底外	37	大	土師器	杯or皿	
2	刀自女	"	杯C I	"	-22	38	山	"	"
3	庚	須惠器	杯BⅢ	"	-5	39	龜	"	-11
4	㊣(記号)	"	杯B I	"		40	長	"	
5	宀	"	皿C	"		41	井	"	
6	宀	"	杯BⅢ	"		42	器	"	-15
7	五	"	杯BⅢ蓋	頂外	43	逆口(下)	須惠器	杯A II	-19
8	五	"	"	"	44	十	"	皿B I	"
9	五	"	"	"	45	十	"	杯A III	"
10	山	"	杯BⅢ	底外	-10	46	十	杯or皿	"
11	山	"	杯or皿	"	47	申	"	杯A	"
12	大	"	"	"	48	五	"	杯B III	"
13	十	"	杯B III	"	49	五	"	杯B III蓋	頂外
14	十	"	皿C II	"	50	武	"	"	"
15	冊	"	杯B I	"	51	龜	"	杯B III	底外
16	干	"	杯A I	"	52	乾(記号)	"	杯B III蓋	頂外
17	①	"	杯or皿	"	53	福入	"	杯B III	底外
18	乙	"	杯A	"	54	美	"	杯B II	口外
19	逆(下卦)	"	"	-18	55	○(記号)	"	杯or皿	底外
20	爻	"	杯or皿	"	56	②	"	杯B II	"
21	□(記号)	"	杯A I	"	57	淨	"	杯B III蓋	頂外
22	逆	土師器	皿A I	"	58	宅主	"	鉢A	口外
23	□□(刀自上)	"	杯or皿	"	59	杯	"	杯B III	底外
24	㊣(記号)	"	"	"	60	福入	"	杯B I	"
25	㊣(")	"	"	"	61	福入	"	杯A III	-1
26	十	須惠器	杯B III	"	62	福入	"	杯B III	-4
27	逆	"	杯B I 蓋	頂外	-16	63	福	"	杯A III
28	器	"	杯or皿	底外	-14	64	□人	"	杯B III
29	龜	"	"	"	-13	65	佐加□(君)	土師器	杯or皿
30	五	"	杯B	"	66	逆	"	"	-21
31	䷁(記号)	"	杯E	口外	-23	67	上	須惠器	杯A III
32	福人	土師器	杯or皿	底外	-5	68	上	"	杯or皿
33	神	"	"	"	69	田	"	土師器	杯A I
34	十	"	皿A I	"	70	十	須惠器	杯A	"
35	武	"	杯C II	"	71	大	"	"	"
36	刀自女	"	杯or皿	"					

1~21: SG 3500上層出土

60~64: SK 3300出土

70: SE 3260上層出土

22~56: SG 3500中層出土

65~68: SE 3451出土(混入)

71: SE 3333出土

57~59: SG 3500下層出土

69: SE 3260下層出土

tab. 7 墨書土器一覽表

D 漆紙文書 (P L. 28・29)

六坪の掘立柱建物 S B3190の身舎西南隅柱穴の柱抜取穴から出土した漆容器の曲物に紙片が付着、残存していた。肉眼では墨書の存在を確認できなかったが、赤外線テレビカメラで撮影すると受像機に墨書が写し出され、漆紙文書と判明した。平城京跡から出土した漆紙文書片はこれまで四回の発掘調査で小片が計10点 (tab. 8) あるが、いずれも数字から10数字が判読できるに過ぎなかった。今回出土した漆紙文書は既出土のものに比べ現状で少なくとも80字余りが確認でき、内容的にもまた遺跡との関係でも種々の問題を内包していく注目される。

後述の如く、曲物本体は既に腐朽し、内面に付着した漆液のみが硬化して遺存する。漆紙は曲物の底に残った漆液の表面と側板内面に付着している。漆紙は、漆液保存のため蓋紙に用いられた際に、曲物の口徑に合うよう周囲を折り曲げ漆液表面に密着させていたと思われる。漆紙に墨書が認められるのは平滑な部分で、紙が破れ漆液があふれ出した部分や現状では漆液だけが確認され紙の存否が明らかでない個所には墨書は認められない。

以下に釈文を掲げ若干の注釈を加えるが、現状では漆紙の紙数すら判然とせず、従って漆紙文書の点数も確定できないので、ある程度字数が認められまとまりのある部分に限定したい。

(1) 漆液表面に付着した紙の平滑な部分に60字余りの墨書があり、小子・少女を列記した歴名である。歴名記載は、7・8行目では1行に2名を記し、下段6・7行目の頭部を揃えていることから、意識的に少なくとも二段とした様式である。なお、6行目以前にも当該部分に墨書らしきものが認められる個所はあるが、紙が襞状に曲折していて字数すら確定できず、裏文書の可能性もあるので、釈文からは一応除外した。1名の記載に要する長さは約6cm、上下両段間の空白部分は約4cmを測る。仮りに上段の1行も6cm程とすると、上段の記載上端から下段の下端までは16cm程度となり、更に下段の記載から下の長さは不明ながら4cm程みると、二段の歴名記載に最低20cm余りが必要である。上段の上に若干の空欄をとっても奈良時代の文書に用いられた紙の継ぎの長さには10cm弱足らない。したがって現状の上段の上または下段の下にもう一段歴名記載があり、本来は計三段の1行3名書きの可能性もある。1行に複数名を記す体裁の歴名文書は少なく、正倉院に伝存する大宝2(702)年御野国戸籍があるにすぎない。

1名毎の記載は、やや小さめに「口」字を頭書しその下に姓名を書き、統けて年令・年令区分呼称を二字で2行割書にする。同じ書式の歴名文書には、大宝2年御野国戸籍、鹿の子C遺跡出土²の計帳、国名未詳大税貢給歴名帳等があり、また平城京左京三条一坊出土の漆紙文書も同じ体裁である。1行の間隔は16mm前後、歴名の文字は8mm角前後、割書小字は5mm角前後。歴名記載の下に少し離して書かれている「一」「-十」等の漢数字、9・10行目の「上」「口

次數	調査位位置	点数	内容	出土遺構	文献
32次	左京三条一坊十六坪	1	計帳	宅地内土壤	木原学全『木原研究3』1981、 奈良県教育財團『鹿の子C遺跡』 1983
32次持	平城宮東南隅	2	不明	南面大垣北傾崩	
68次	左京三条一坊	2	田舎閑保丈壹等	坊間大路西傾崩	奈文研『平城宮第59・63・68次発 掘調査報告』1970、『奈良國立文 化財研究所年報71』、『字號書 界別調査出土木造機械8号』1971
93次	左京八条三坊	5	不明	九・十坪坪境小路南側溝	奈文研『平城左京八条三坊発 掘調査報告』1976
160次	左京八条一坊六坪	不明	1. 小子少女歴名	宅地内掘立柱建物柱抜取穴	

tab. 8 平城京出土漆紙文書一覧表

(上)「□」は歴名の筆頭と異なり、追記と思われる。

本文書の年代に関しては記載に全く手頃りがなく、むしろ検出構造の時期変遷から S B3190が発現する奈良時代末期に下限がおさえられ、書風からみても奈良時代後半かと考えられる。

本文書は様式的には戸籍または計帳に近いと思われるが、断簡でしかも小子・小女等不課口のみが記載され、文書名を容易に確定し難い。計帳には共通する戸口の身体的特徴・異動に関する記載がみられないこと

から戸籍ないしは類似の歴名文書の可能性がより強いと思われる。しかし、このように推定するには無界・無印である点を除いても種々の問題点がある。

第一に、下段6・7行目の2人の小女に関する記載で戸主との統柄記載の代りに姓名の上に「口」字を頭書している点である。籍帳では必須の要件である統柄記載がないことは本文書の性格を考える上で見逃せない事実である。「口」の語が戸口を意味するならば、歴名文書で「戸主…戸口…」と1行に続けて書く様式がないわけではないが、それは籍帳の如く戸口全員を列記する場合ではなく、多くは特定の人物について所属の戸を明示する場合等に限られている。本文書のように人名を列記した籍帳様の歴名では例がない。第二に、本文書に記載され年令・年令区分呼称のわかる人物は現状では全て課役負担のない小子・小女のみである点である。奈良時代の公文書で課役負担のない子供ばかりを書き上げた歴名文書は確認できないが、籍帳等のこののような歴名記載部分が残ったと考えるのは偶然にすぎるかもしれない。既に指摘した如く現状で最少限1行2名、あるいは1行3名書きの可能性もあるので、9人の歴名記載の上下に少なくとも1名または2名の記載があったと思われること、また7行目の2人の小女の記載順序が同一年令区分の中では年令順になっており、籍帳の如く男から女に及ぶ記載順序でもあったとすると、9人は少なくとも4グループ(年八件別不明の子供と年五小子、年十四小子と2人の年八小女、年十二と年七の小女及び年令未詳の女性、年九小子)に分けることができるこことを考慮すると、いくつかの戸主・戸口を含んだ戸の歴名中課役負担のない子供ばかりの部分が偶々違ったとみることも決して不可能ではない。8行目上段の女性に関する割書の年令区分呼称第一字目が残ぬからみて小・黄・緑と読みがたいことも参考となる。第三に、異筆の書き込み、特に各人物の歴名記載の下にやや離れて書かれる「一」「一」等の数字の問題である。不課口たる小子・小女に対して書かれていることから税ではありえない。人物を異にして同じ数が記されるが、男女で違うわけではなく、また同性の中で年令により異なるのでもなく、かといって全員同数とも言い難い。何らかの物を不課口の小子・小女に支給したことを記録したものかかもしれないが断定できない。異筆書き込みが本文と関連することは認められるが、異筆とはい

(1)

(2) □比貴⁴口

□□比貴⁴口

□野
□ヶ八 一
□千⁵小子 一(上)
二年(下) □
□女小女 一
□田□□ 小□女小女 一+
□□□□ 女小女 一
□多麻呂 年小
上
(上)
□□

(3) □□□□□

左京八条一坊出土漆紙文書訳文

え本来的なものなのか、異筆の書き込みが本文書の性格をどれ程まで規定するのか問題がある。

本文書を記載の様式の類似から戸籍またはそれに近い歴年文書かと考えたが、異筆書き込みの存在から物品支給に関する様名の可能性もあり、問題点の多い文書である。

(2) 漆液表面に付着した紙が側板に沿って折れ曲がる個所に左文字で2行が確認できる。2名の女性の名が記され、各々の下に小字で行の右に寄せて年令かと思われる墨書きがあるが、判読し難い。(1)とは異筆と思われる。界線は認められない。

(3) 側板に付着して遺った紙に墨書きがあり、外側からみえる。1行目第二字は「月」一字または「二月」の二字のいずれかである。

(1)と(2)(3)との関係は、(2)が左文字であること、(3)が側板に貼り付いて遺った紙の外側からみえることから、(2)(3)が(1)の裏になる可能性がある。先に紙数・点数不明としたが、一紙でのその表裏がともに使用された文書かもしれない。

次に、左京八条一坊六坪の宅地から漆紙文書が出土したことがもつ問題点を整理しておこう。

平城宮・京跡を除き、日本各地で漆紙文書を出土した遺跡は16遺跡にのぼるが、これらを遺跡の性格から分類すると、都城跡1・城柵・官衙跡6、官衙的性格の遺跡ないしは官衙関連の遺跡3、集落跡6となる(tab. 9)。一般に、漆紙文書は、漆を用いた作業に使う漆液を入れた容器に蓋紙として反故文書を使用するために遺存したもので、多くは漆工房で使われたと推定されている。集落跡に分類されている6遺跡の中には官衙に関係の深い集落や工房・工人の住居、あるいはそうした工人達の臨時の作業場等も含まれていると考えられ、純粋な集落跡出土の例は確実に6遺跡を下回ると思われる。日本各地で出土した漆紙文書の大半は地方官衙やその関連施設から出土していることになるが、こうした漆紙文書には共通の特徴がみられる。それは公文書、特に地方行政に直接関わる文書が多くを占める点で、これらの文書は地方官衙で不用となって廃棄された反故文書が漆工房に払い下げられ漆液容器蓋紙に利用されたのである。

平城京で漆紙文書を出土した遺構の多くは条坊道路側溝で、漆紙文書と直接の関連を求めていくが、その中で漆工房との関わりが指摘されているのは、左京八条三坊東市周辺地域の調査で出土したものである。漆紙文書とともに漆器をはじめ漆塗作業用具等が出土したことから東市北辺に漆工房の存在が推定されている。漆紙文書は小片で内容も不明であり、漆工房が官衙か否か、また東市の肆との関係の有無等は明らかではない。

漆紙文書と遺跡・遺構との関りを考える上でより重要なのは宅地内の遺構から出土した例である。左京三条一坊の調査で出土した漆紙文書は既に紹介されているが、今回改めて赤外線テレビで検討し直し、若干訛文を改めた。この文書は戸籍ないしは計帳と推定され、書風から養老5(721)年下總國大船郷戸籍より古風とみられ、養老年間かそれ以前の戸籍とも考えられ

遺跡の種類	遺跡跡名
都城跡	平城京・長岡京
城柵・官衙跡	多賀城・延沢城・秋田城・塙輪柵・大寺柵・下野田柵
官衙関連遺跡	宮城県高麗川遺跡・茨城県鹿嶽の丁・池跡・茨城県吉田古墳群
集落跡	宮城県下巣遺跡・同小栗川遺跡・山形県沼田遺跡・福島県鹿和久上町遺跡・茨城県原氏平遺跡・長野県内空北栗遺跡

tab. 9 漆紙文書出土遺跡一覧表

ている。しかし、1行目の記載からみてむしろ計帳の可能性の方が高いと思われる。1行目には戸口姓名に続けて小字で2行割書に年令・年令区分呼称を書き、更に「浮浪 和^ル」と異動を注記している。この戸口の異動注記は戸口姓名・割書と同筆で、本文書に本来必要な注記であったとみられるので、戸口の左京三条一坊出土漆紙文書異動を注記する計帳と考えられる。年代は、「和^ル」とあるのが逃亡の年次を記したものとすると、和歎年間以降に上限をおさえることができる。この調査は宅地の東北隅を発掘したに止まつたが、特殊な構造の掘立柱建物と数条の溝等が検出されている。また二条・東一坊両大路に面し宮を望む位置に当たることから何らかの公的施設か高位高官の宅地と考えた方がよい。

左京八条一坊六坪の場合、宅地は奈良時代後半初頭の1町ないしはそれ以上から、後半には少なくとも1町に拡大されている。宅地の規模と居住者の官位は平城京の場合必ずしも整合的に対応しているわけではないが、左京三条一坊と同様に一般官人・庶民を六坪の居住者とみることはできない。また漆に関する他の遺物は時期の異なるS K3300出土の漆付着土器數点のみで、漆工房に結び付けることも困難で、また公的施設とみる要素もない。高位高官の宅地の一部とみた方が検出遺構の状況に合う。恐らく、居住者の需めに応じ漆を用いる臨時の作業を行った^{註4}工人たち、あるいは居住者の家政機関に属する工人たちが用いた残りがS B3910解体時に捨てられたのであろう。漆紙文書が直接には公的機関とつながりをもたない宅地から出土したことの意義は少くない。公的文書であるなら、本文書が何處で使用されたのち廃棄され、如何なる経路を経て六坪で捨てられたのかを考える上で重要な論点である。文書の性格が今一つ明らかではないので断案は示しえないが、可能な限り考えうる所を記し後考をまちたい。公文書の場合、まず六坪居住者が反故紙入手した経路として所属官司で廃棄された文書の払い下げを^{註5}受けたとの推測ができるし、また官司の反故文書が市に払い下げられることがありうるならば、市での反故紙購入の可能性もある。本文書が公文書そのものではなく、六坪居住者が用い反故として漆容器蓋紙に使ったのかもしれない。あるいは本文書自体六坪居住者とは全く関係をもたず、漆の作業に携った工人たちが六坪へもたらしたと考ることも可能である。

漆紙文書は出土遺構・殊に集落・宅地等からの出土の場合、生産・交易を含む古代社会全般にわたる数多くの問題があり、文書としての検討の上により広汎な論議が必要である。

註1 「大日本古文書」第1巻 1~96頁。

註2 財團法人茨城県教育財団「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C追跡漆紙文書一本編」1983

註3 「大日本古文書」第24巻 549~550頁。

註4 例えば、国名未詳人税帳給歷名帳（註3参照）・天平11年出雲国人税帳給歷名帳（『大日本古文書』第2巻201~247頁）等。

註5 佐藤宗淳「漆紙文書」出土概要（『木簡研究』4）1982、橋本義則「1982年以降出土の漆紙文書」（木簡学会1984年度大会報告レジュメ）1984

註6 桑原进郎「多賀城における器物製作を示す二・三の資料」（宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』V）1978

註7 延喜式卷42東市司には、平安京東市の隠として漆匱、木器匱を始め、鍛頭・杏・墨等多くの漆を用いる職を掲げている。

註8 正食院文書の中には、造東大寺司等の造営・營繕関係官司から所属の工人が貴族宅に派遣され作業に従事していたことを証する文書があり、工人が特定の貴族に専属するのではなく官衙に属し臨時に貴族に雇用・雇傭されることもあったとする説がある。宋原永道男・柳本謙周「技術と政治一律合國家と技術」（『技術の社會史』1 1982）。

註9 正食院文書によると、造東大寺司が事務に必要な紙を貨幣で購入している中に反故紙があり、市での購入と推定されている。仲洋子「写真用紙の入手経路について」（東京女子大学『史論』33）1980。

□^ル崎^テ九 浮浪 和^ル

□^ル寺

□^ル安女^テ七

□^ル..

E 木製品・金属製品・石製品 (fig.45, PL.30)

銭貨 土器埋納遺物 S X3466から「神功開寶」銭1枚が出土した (fig.13)。銭文は、開を隠間に、功の旁を長くのびた「刀」につくり、「長刀」とよばれる。神功開寶Eに分類される。径2.5cm。

木製品 1は全面黒漆塗りの杯。漆は平滑に塗られ、布着せはない。本地はケヤキとみられる広葉樹材を横木取りで挽いている。正倉院に類例がある。形態・法量が近似し、ケヤキ材を使う点も共通するが、正倉院の例は布着を行っている。復原径18cm。S G3500中層出土。漆器としては他に、全面黒漆塗りの高台付き楕と推定されるものが土壙 S K3300から出土した。木質部が完全に失なわれているため詳細は知りえないが、高台をもち胴部下半に穂が走るので佐波理を模した器形とみられる。長岡京左京二条二坊六町 S D5102から類例が出土している。^{註1}

2は井戸 S E3260の網代の下層から出土した斎串。上部を圭頭につくり、上端近くに側刃から左右各1個所の切り込みを入れている。『平城宮発掘調査報告』VIで行った斎串分類のB型式にあたる。下端を欠失し、現存長12.9cm、幅2.1cm、厚さ0.2cmをはかる。

3は井戸 S E3260の網代から出土した3本の細棒のうち、東側枠板の外側から出土したもの。ヒノキの扁平な棒状品で、岡の左側辺に10個所、右側辺に11個所の切りこみを1.6~2.4cm間隔に入れ、下辺にも2個所に切り込みを入れる。全面に割り裂き面が残る。全長25.5cm、幅4.0cm。他の2本に細棒にはこのような切り込みがない。

4は掘立柱建物 S B3190の身舎西南隅柱穴の柱抜き取り穴から出土した曲物 (fig.43)。漆容器として使われており、内面に分厚く付着した漆だけが遺存し本体は腐朽し去っていた。2個所に桟皮で綴じつけた痕跡が残る。径17.2~18.0cm。残存高約6.5cm。なお、曲物内には前述したように漆紙文書が残っていた。

5は井戸 S E3260埋土上層出土の櫛。高さ4.3cm。3cmあたりの歯数は30本。イスノキ製。

鉄製品 6は井戸 S E3260埋土上層出土の方頭釘。井戸内におちこんでいた枠板に打ちこまれた状態で出土した。全長11.8cm、頭部径1.5cm。

石製品 石製品は砥石が計6点出土した。7は平面長方形、断面不整五角形の砥石。上面と3側面を使用するが、各面とも敲打痕を残す。全長15.0cm、幅8.7cm、厚さ6.4cm。滑石製。S G3500中層出土。9は正方形板状の砥石。上辺中央を打ち欠いて薄くしたのち、径6mmの孔を穿つ。懸垂のための孔であろう。各面を使用するが、下面の研磨痕は顕著でない。全長7.3cm、幅7.6cm、厚さ2.5cmをはかる。滑石製。三・六坪の坪境小路東側溝 S D3333出土。10は長方形の砥石の破片。上下側面ともすべて使用し、大きく凹んだ上面には長軸方向に走る研ぎ痕が多数残る。大半を欠失するが、破面にも研磨痕があるので、破損後も使用したことがわかる。S G3500上層出土。このほか、S G3500の上層と、掘立柱建物 S B3210の柱穴(図)から各1点出土した。

その他 11は砲弾形をしたガラスるつぼ。S G3500上層から、胴下半部の破片が出土した。器壁は厚くつくられ、胎土には大型の砂粒を多く含み、もりい。外面には斜格子の叩き目を残し、内面には淡緑色のガラス釉が厚くかかる。分析の結果、

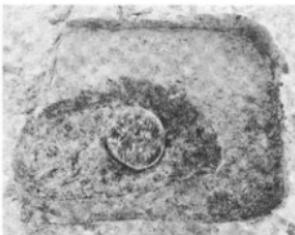


fig.44 曲物出土状況 南から

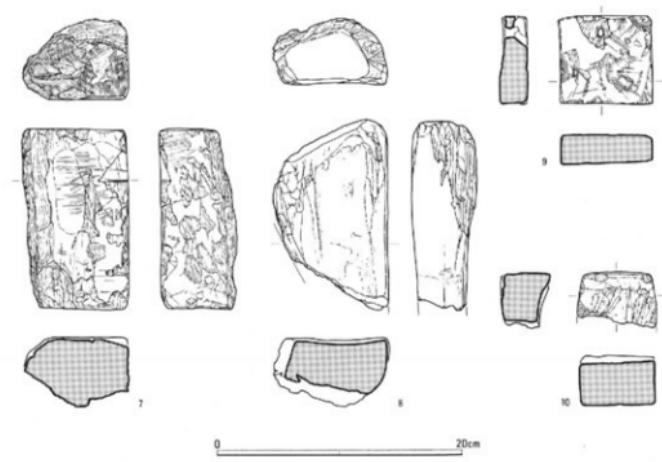
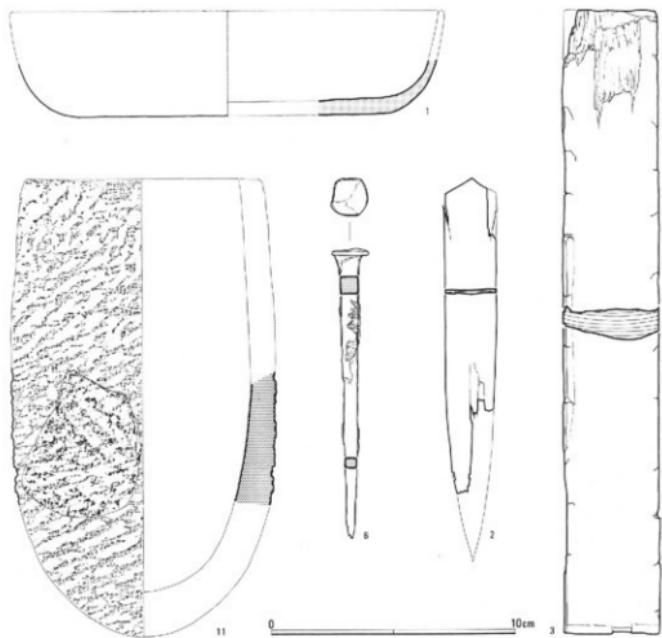


fig.45 木製品・石製品・土製品

この釉からは多量の鉛と銅が検出された。おそらく、銅で着色した鉛ガラスを溶解したものと考えられる。平城京内からのガラスのつぼの出土はこれまで、左京三条二坊七坪、左京八条三坊九坪東源河 S D1300、右京二条二坊十六坪井戸 S E0540の三例がある。このうち、ほぼ光形^{註4}の左京二条二坊十六坪 S E540出土例は、高さ18.7cm、口径9.8cmを有する。今回出土した破片も、胸部僅からみてこれと同じ法量と考えられる。

註1 京良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』VI 1974

註2 正倉院寺務所『正倉院の漆工』1975

註3 向日市教委『向日市埋蔵文化財調査報告書』7 1981

註4 奈良国立文化財研究所『昭和57年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1983

註5 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報』1976

註6 奈良国立文化財研究所『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』1982

2 中世の遺物

木製板五輪卒塔婆 (fig.46, PI.32) 中央調査区のほぼ中央を流れる河川 S D3340中層最上部から木製板五輪卒塔婆が1点出土した。厚手の短冊状の材の上部約3分の1を五輪塔形に削み、地輪部を下方へ延ばす。空・風・火三輪の右端は欠損。下端は尖らせず平に削る。表には「^{ナム}アミタ^{バツ}」五人種字とその下にややあけて「南無阿弥陀佛」の六字名号を墨書きする。墨痕は明瞭に残り、更に文字の部分が浮き上がっている。裏にも墨痕はあるが、腐蝕が著しく、わずかに阿弥陀佛の種字「^{アミ}」が判読できるにすぎない。二個所に小孔が穿たれている。一個所は上端より13.5cmの位置で最後の種字「^{アミ}」と名号の最初の字「南」との間、他は下端より1.7cmの位置で名号の最後の字「佛」の下にある。いずれも表から穿たれ、木釘を用いて何かに打ち付けて使用したものらしい。書風や頭部の形状からみて室町時代に属する遺物と思われる。

(穿孔) (穿孔)
・^{ナム}アミタ^{バツ}。南無阿弥陀佛。 290 × 38 × 9 061

・□ □ 。□□ 表二コ。 杉・桧 日

以下では、民俗例を中心としながら発掘調査による出土例を勘案しつつ、今回出土した木製板五輪卒塔婆について若干検討したい。

民俗例では木製卒塔婆が用いられるのは追善供養が主で、死者埋葬時の角塔婆・板塔婆・十三仏・四十九院の塔婆、死後四十九日の中陰法要に用いる七本塔婆・年忌法要の板塔婆、最終年忌(弔い上げ)に使う生木等の特殊な塔婆、施餽鬼・盆・彼岸の供養の塔婆等がある。いずれも原則として供養の対象となる人物の墓に立てるものである。墓に立てずに川の流れの中に立てて用いる流れ置頂の塔婆もある。出土例でも使用目的の明らかなものは大部分が追善供養で、七本塔婆・年忌供養の塔婆・盆供養の塔婆等がある。こうした卒塔婆は、供養が終れば焼却処理されたり川へ流すこともあるが、そのまま墓地立ち腐るままに放置されることが多い。木製卒塔婆が出土した遺構には墓地と河川・池・溝の例が多く、民俗例を裏付けるとともに、上述の習俗が中世まで廻ることを示している。

次に卒塔婆の形状と使用方法の係わりに注目したい。民俗例でも出土例でも下端を尖らせたものと平に削ったものに二大別でき、原則として前者は墓の後等で土に突き刺して立てるもの、後者は墓に立て掛けたり墓・墓石等に納めるものと別けて考えることができる。中には特殊な

ものとして、民俗例では、十三仏・七本塔婆・流れ灌頂の塔婆のように中央に下端を尖らせた大型の板塔婆を配し、左右に小塔婆を並べて横木でとめ一組としたもの、四十九院の塔婆のようにやはり複数の小塔婆を横木で止めたものを忌垣の如く墓壇の周囲に続らせたものもある。出土例でもこれらに似たものがあり、九本の小塔婆を横に並べて上中下三個所に横木をあて釘^{註1}で打ち付けたものが一乘谷朝倉氏遺跡から、また上下両端近くの二個所に孔を穿ち何かに打ち付けたか結び付けた痕跡のあるものが草戸千軒町遺跡^{註2}から、各々出土している。

S D3340出土の板五輪卒塔婆には直接使用目的を示す墨書きなく全く推測の手掛りがないが、上述の民俗例や出土例も参照すると、形状や出土状況から使用方法や供養後の処理に関して若干の指摘ができる。(1) 木釘の穿孔の存在とその位置から、複数の小塔婆を横に並べ上下二個所に横木をあてて木釘を打ち付け、一組みとして用いた可能性がある。(2) 河川からの出土であるから、供養ののち S D3340へ流された、所謂「流し塔婆」の可能性がある。

木製品 (fig. 47, Pl. 32) 1 は木壇の頭部である。扁平な八角材で、中央に方形の穴を開ける。頭部の長さ6.4cm、幅2.5cm、厚さ1.9cm、材はアカガシ亞属。S K3201出土。

2 は差歎下駄の歎である。上辺を切りこんだ台形をし、両側辺は削って丸くしている。上辺中央に2本の柄をつくり出すが、折損しているため露卯か陰卯かは決め難い。下辺は使用により著しく磨滅する。現高6.0cm、復原下辺長13.4cmである。材はケヤキである。S K3201から出土した。

註1 福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乘谷朝倉氏遺跡』X V 1984

註2 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒木駄一』1982

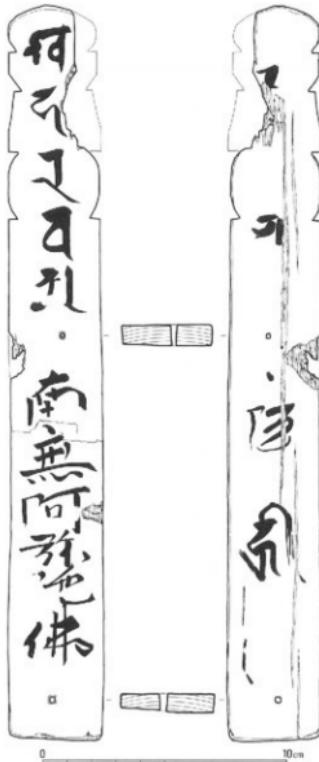


fig.46 S D3340出土木製卒塔婆 1 : 2

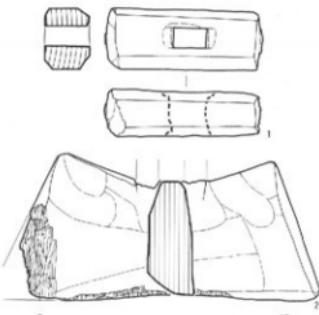


fig.47 S K3201出土木製品 1 : 2

3 古墳時代の遺物

A 土器 (fig.48~50、PL.31)

SD3222出土土器 土師器壺・高杯・甌および手づくねで小型の鉢・壺、須恵器杯身・甌がある。甌には、小型甌（1・2）と中型甌（3・4）がある。中型甌は口縁部が直線的にのびるもの（3）と、口縁部の中位外間に稜があり、口縁部上半と下半との間でやや屈曲するもの（4）がある。4は体部内面上半を指で押さえ、下半部をヘラ削り、口縁部内外面をヨコナデする。高杯の杯部の形態は、丸底の底部から口縁部がゆるやかな丸味をもって斜め上方にのびるもの（8・9）と、円盤状の底面から屈曲して口縁部が外方へひらくもの（5・6）がある。前者は軸部内面にシボリ目を残し、ヘラ削りをおこなわず、後者は軸部内面の大部分をヘラ削りして調整。両者とも裾部内面にはハケメを有せずナデ調整し、脚部に円孔はない。甌の口縁部の形態は、外側斜め上方にまっすぐのびるもの（11）と、口縁部が内弯気味に立ち上がり、口縁端部内面が肥厚するもの（12・13）とがある。11は底部外面をヘラ削りし、体部外面上一部ハケメを残す。甌（17）は、口縁端部近くの内外面をヨコナデし、以下の内面と底部外面上荒い削りで整える。手づくねで小型の鉢（14・15）と壺（16）のうち、15は内外面に指による押圧痕が残り、14・16では体部内面または底部内面の粘土を放射状に削り取る。須恵器杯身（18）は、立ちあがりがやや内傾し、端面は内側へ傾斜し、浅く凹む。受部縁の稜はある。底部外面上ヘラ削り。陶邑古窯址群のMT15窯（6世紀前半）の出土品に近い時期のもの。

SD3311出土土器 土師器甌・甌、須恵器杯身・杯蓋・高杯がある。甌の口縁部の形態は、まっすぐのびるもの（21）と口縁端部内面が肥厚するもの（20）がある。甌（22）は口縁部端面のみヨコナデ。体部中位に一对の把手がある。体部壁に円孔を穿ち、把手を押し込み接合する。体部内面をヘラ削りし、体部外面上縦方向のハケメで調整。須恵器杯身（23）は立ちあがりが内傾し、端面は内側へ傾斜し、浅く凹む。底部は丸味をもち、立ちあがり中位内面に粘土紐痕跡が残る。杯蓋（24~26）は、いずれも口径12.3~12.6cm・高さ4.5~5.1cmと近似した数値を示す。頂部上面をヘラ削り。ヘラ削りの方向は、23~25がロクロ左回転、26が右回転。高杯（27）は脚部を欠損。立ちあがりは強く内傾し、端面は浅く凹む。須恵器は、陶邑古窯址群のTK47窯（6世紀初）、またはTK23窯（5世紀末）のうち新しい様相の土器に近い時期のもの。

SK3317出土土器 S K3317から土師器高杯・須恵器杯身・杯蓋が出土した。高杯（28）は軸部内面にシボリ目を残し、脚部に3孔を穿つ。杯身（29）は、立ちあがり端面の内傾度は著しく、浅く凹む。杯蓋（30）は、口縁部端面の内傾度が著しく、内面に段を有する。高杯蓋（31）はSB3393の柱穴出土。中央部が凹むつまみを有し、頂部内面に同心円文を有する。中央調査区東半部の遺物包含層より無蓋高杯（33）と杯身（32）が出土。32は、立ちあがりが高く、体部が低く、受部先端の稜が鋭い。33は口縁部と底部をわける稜が二条あり、稜線の下に柳描き波状文をめぐらす。透しは四方にあける。29・30はTK47窯、31~33はTK23窯の出土品に近い時期のもの。須恵器高杯蓋（34）はSD3355出土。中央部が凹むつまみは径4cmと大きい。頂部と口縁部とをわける稜は短い。須恵器杯身（35）は豊穴住居跡SB3490から出土。SB3400下層出土の杯身（36）・杯蓋（37）は、TK43窯併行期（飛鳥寺下層）のもの。35の頂部内面に同心円文を残す。31・32・36・37はロクロ右まわり、30・33・34はロクロ左まわり。

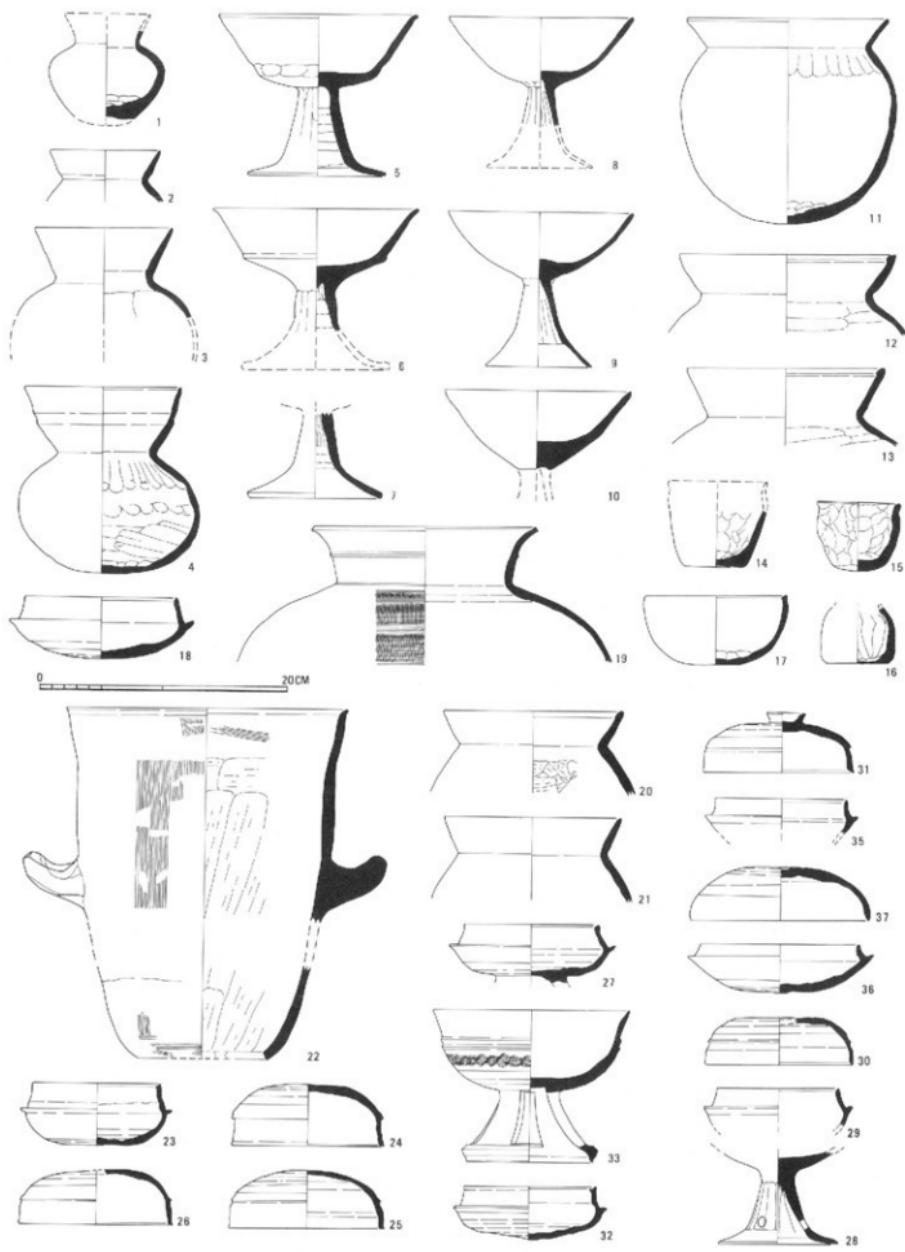


fig.48 S D3222・3311等出土土器 1 : 4

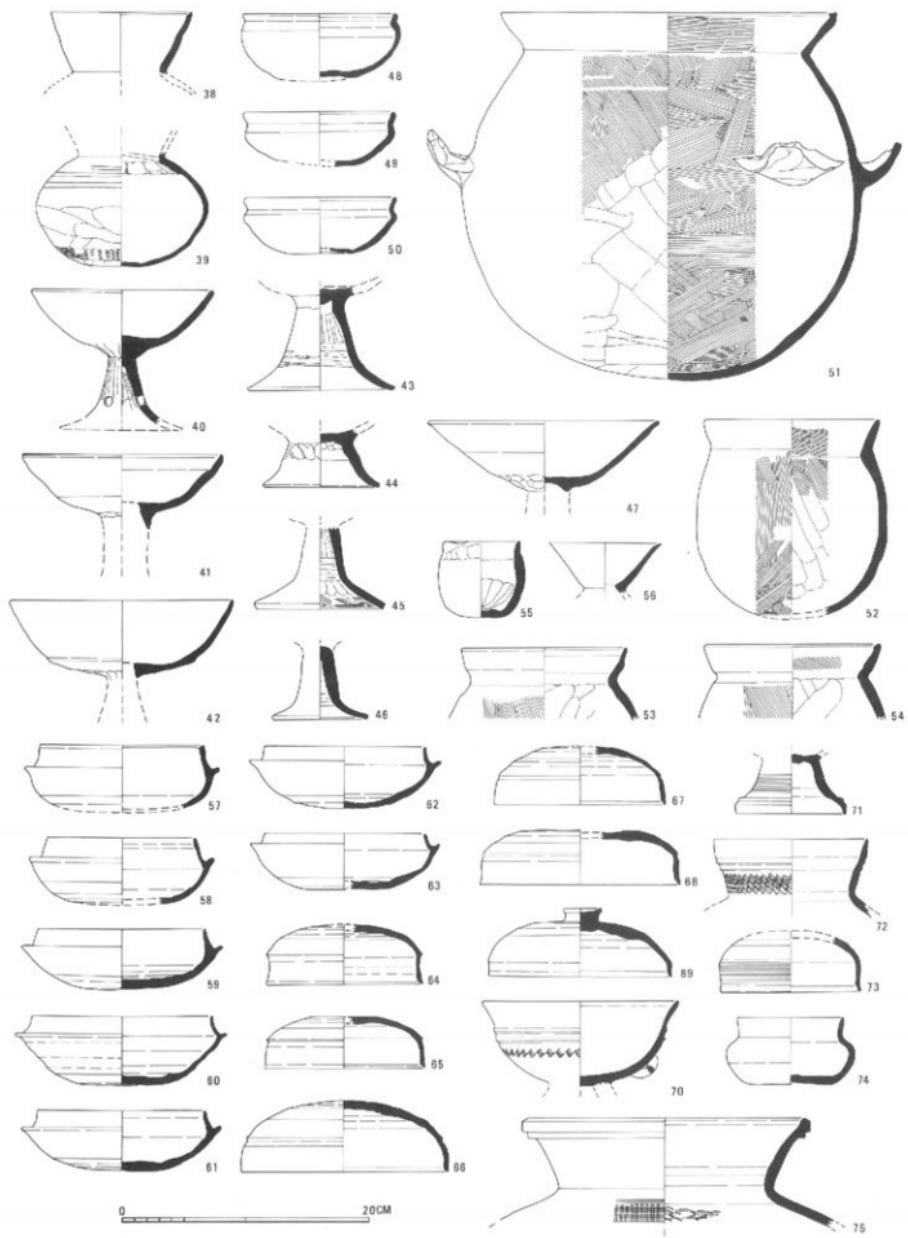


fig.49 SD 3400出土器 1 : 4

SD3400出土土器 SD3400は大きく下唇と上唇に分離できるが、出土土器からみると、下唇・上唇とも5世紀末から6世紀末までの時期が主体である。他に下唇から「布留式土器」の器台・上唇から7世紀末頃の「近江型」の甕が少量出土した。

土師器 瓢は全形をうかがえるものはない。口縁部(38)は内外面をヨコナデし、体部(39)では、上半に4~7条の沈線を施し、沈線部に赤色顔料が認められる。体部外面下半および底部をヘラ削りするが、両部分の移行部に壓状の圧痕を残す。高杯では、杯部と脚部の結合関係がわかるのは1点(40)のみ。40は杯部の口縁部がやや内凹するが、ほぼ直線的。脚部内面にシボリ目を残し、脚部中位の3方に円孔を穿つ。高杯杯部では、口縁部が内凹するもの(41・42)、直線的に開くもの(47)がある。脚部では、袖部内面ヘラ削りと裾部内面ハケ目の脚(45)、袖部内面削りと裾部内面ナデの脚(46)、袖部内面シボリ・削りと裾部内面ナデの脚(43)、袖部内面指の押圧と裾部内面ナデの脚(44)がある。碗(48~49)は口縁部内外面をヨコナデし、ヨコナデ以下には成形時の凹凸をとどめる。器台(56)は受部の破片。受部は内外面をヨコナデで調整し、受部外面下間にタテ方向の削りをおこなう。手づくねで小型の鉢(55)は口縁部内外面をヨコナデする。甕(51)は球形の体部と内凹する口縁部をもつもの。外面はハケ目をつけ、体部下半をななめにヘラ削りする。内面は、口縁部・体部とともにハケ目調整。把手は斜め上方に開く。いわゆる「近江型」の甕で、7世紀末頃の時期であり、奈良時代の土器の項で述べたS G3500最下層出土の土器(90・91)と同じ時期のもの。

須恵器 杯身には陶古窯址群のTK47またはMT15窯併行期のもの(57・58)、TK10窯併行期(6世紀中頃)のもの(59)、TK10窯後続型のもの(60~62)、TK43窯併行期のものがある。57・60がロクロ左回転、他は右回転。60・62の底部内面に同心円文を有する。杯蓋には、TK23またはTK47窯併行期のもの(64・65)、MT15またはTK10窯併行期のもの(66~68)がある。64はロクロ左回転、他は右回転。66の頂部内面には同心円文がある。高杯蓋(69)は6世紀後半代のもの。無蓋高杯(70)は、飾りつまみを有し、TK208またはTK23窯併行期のもの。直口壺(72)は二条の凸帯と波状文をめぐらす。短頸壺(74)は、口縁部が長く直立する形態。底部を静止ヘラ削りと、カキ目で調整。壺蓋(73)は、口縁部外面をカキ目で調整する。

SK3177出土土器 いわゆる「庄内式」の丸底甕(76)と甕(77)が出土した。丸底甕は、球形の体部に外傾する口縁部のつく小型の器。体部外面の一部を粗いケズリによって調整。未調整の部分には粘土紐痕跡が残る。底部外面には木葉圧痕が残る。体部内面をケズリで調整する。甕は最大径が中位より上にある丸い体部と外反する口縁部を有する。体部外面に右上りのタタキ調整を施す。底部は平底の外周が輪状に突出し、外面中央がくぼむ。体部外面にススが付着する。

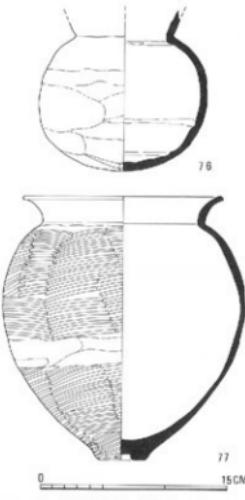


fig.50 SK3177出土土器 1:4

B 木製品・石製品 (fig.51、PL.32)

木製品 1は先端を鋸状に尖らせた棒状品。先端に向って刀身状に削るが、基部は角棒に近い今まで割り裂き面を一部残す。基部は現在折曲するが、方孔をあけようとした痕跡がある。穿孔は未成に終わっているが、本来は組み合わせて使うのであろう。現長39.5cm。材はアカガシ亞属である。河川 S D3400下層から出土した。

なお、河川 S D3400下層からは、植物の蔓を束ねて円形に曲げ、2個所でとめた直径約12cmの輪状品が出土している (PL.32)。

石製品 2は径4.6cm、厚さ1.0cm、孔径0.8cmの滑石製紡錘車。上面と側面はよく研磨されているが、上斜面と下面には浅い削り痕を残す。上面の径2.6cmの範囲には同心円状の擦痕が認められる。約2分の1が欠損し現重量23.9gをはかる。溝 S D3311出土。

3は径2.8cm、厚さ0.3cmの粘板岩製双孔円板。中心からやや一方に寄った所に、1.85cm間隔で2小孔を穿つ。素材を剥離加工した後全面を研磨して仕上げるが、研磨が不十分で正円形にならず、縁辺にも側離痕が残る。奈良時代の建物 S B3465の柱揮形から出土した。

4は花崗岩アブライト製の砥石。両小口を除く4面を使用し、中央部は擦り減って細くなっている。上下面の中央は浅く桶状に凹み、さらにその中を長さ14cm前後の細い研ぎ溝が走る。全体に風化が著しい。全長15.7cm、中央の幅5.3cm。河川 S D3400上層出土。

このほかに、弥生時代のサヌカイト剝片2点と、縄文時代の石鏃と石皿片各1点が出土した。5はサヌカイト製凹基式の石鏃。表裏とも細かい剥離調整が行われ、主剥離面を残さない。全長2.4cm、幅1.6cm、重さ0.6g。古墳時代の櫛 S A3390の柱穴から出土した。6は石皿の小破片。河川 S D3400下層から出土した。

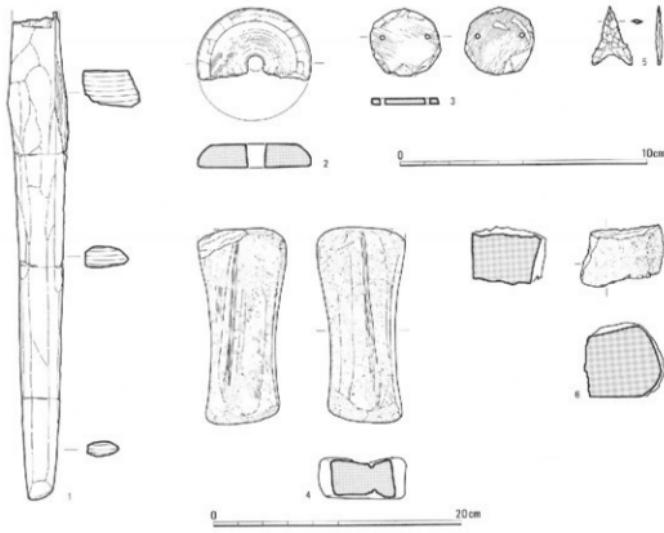


fig.51 木製品・石製品

IV まとめ

1 条坊復原

第II章条坊遺構の項で述べたように、今回の調査では八条々間路の路面および南北両側溝と、三・六坪々境小路東側溝と推定できる遺構を検出した。これらの遺構と周辺でこれまでに発掘された条坊遺構の成果をもとに三・六坪の四周を画する条坊の復原を行いたい (fig.52)。

まず、八条々間路の復原を行う。八条々間路については、今回の調査地東方約170mの地点で、昭和47年に奈良国立文化財研究所が行った調査（国道24号線バイパス関連調査）において、路面敷および南北両側溝を検出している。位置は左京八条一坊十・十一坪間にあたる。ここでの条間路の幅員は溝心々で8.95m、今回の調査（六・七坪間）は9.38mである。八条々間路南北両側溝の心々距離はほぼ3丈とみることができる。路面幅は十・十一坪間に約6.8m、今回が約7.3mであり、平均すると7.05mで24尺に近い数値を得る。2点間における国土第6座標系方眼（以下「方眼東」、「方眼北」と呼ぶ）に対する振れは、西で南に $0^{\circ} 22' 19''$ である。

朱雀大路と左京一坊々間大路との間にあら南北方向の小路については、これまでに今回を含めて計4回の発掘調査が行われている (fig.52参照、以下では北から順に三条地点、五条地点、八条地点、九条地点と略称する)。今回

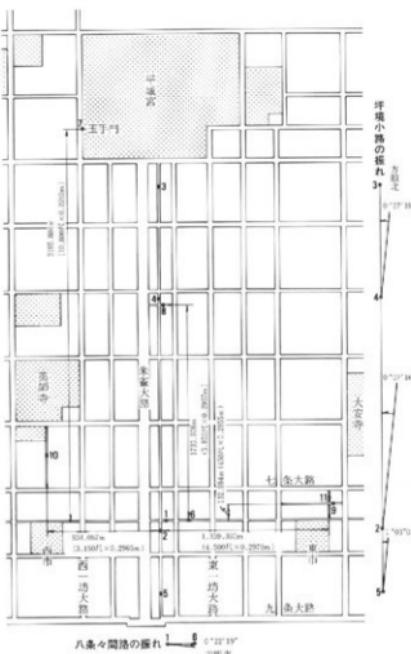


fig.52 条坊遺構発掘調査位置図

の調査、八条地点では東側溝を検出したにとどまったが、他の3地点ではいずれも東西両側溝を検出し、小路心がおさえられている。小路の幅員を溝心々間距離で比較すると、三条地点：6.45m、五条地点：3.7m、九条地点：7.1mである。これまで平城京の小路については溝心々で2丈という発掘成果が比較的多くあがっているのに対し、三・五・九条地点の小路は幅に広狭があり、規則性に欠けたものとなっている。こうした傾向は振れの面でも指摘できる。八条地点における小路心は確認されていないが、ここで的小路幅員を溝心々で2丈と仮定し小路心を求め計算を進めると、三条地点と五条地点間では $0^{\circ} 27' 19''$ 、五条と八条間では $0^{\circ} 07' 16''$ 、八条と九条間では $1^{\circ} 03' 07''$ という大きさで方眼北に対し西へ振れる。

同一延長線上にあると考えられる小路の幅員や振れが、このように分散した結果を示す原因は何なんであろうか。それぞれの発掘調査で得られた知見をもとに、各調査で小路を推定している訳であるが、この推定自体に問題があったと考えられないこともない。また、同一線上にあると考えられている小路が実際には各坊ごとに多少違い違っていたとか、あるいは本来は同一幅員で直線的に計画されていたものが、施工時に誤差を生じたとか、発掘遺構は京廃絶時の状況であると考えられるから、京造営当初は直線的であったものが長年月のうちに歪んでいたとか、様々な要因を考えることもできる。だが、むしろ平城京の条坊のなかでも大路については、相当精度の高い計画なり、施工が行われていたのに比べ、小路については必ずしも大路に見合う精度で実施されなかったのではないだろうか。一筋の小路の検討だけでは断定できないが、平城京の小路に関する調査の進展につれて、さらに検討を深める必要があろう。

このように各条坊の幅員や振れを詳細に検討してゆくと、条坊の復原を画一的に行うことは不可能であるし、また厳密な復原も期し難い。こうした一定の限界を踏まえて、三・六坪を画す条坊の復原を行うと以下のようになる（fig.53）。

まず、北東調査区で検出した二条の東西溝の中点を求め、これを八条々間路の中心点とする（A点）。幅員は路面幅24尺（7.1m）、側溝幅各6尺（1.8m）とし、振れば方眼東に対し北へ $0^{\circ} 22' 19''$ とする。つぎに三・六坪の坪境小路については幅員を溝心々で2丈とする。振れについては、平城京の基準方位として定説化しつつある、朱雀大路の発掘調査（1972年）で得られた方眼北に対して西へ $0^{\circ} 15' 41''$ の振れを用いることにする。今回の調査で検出した

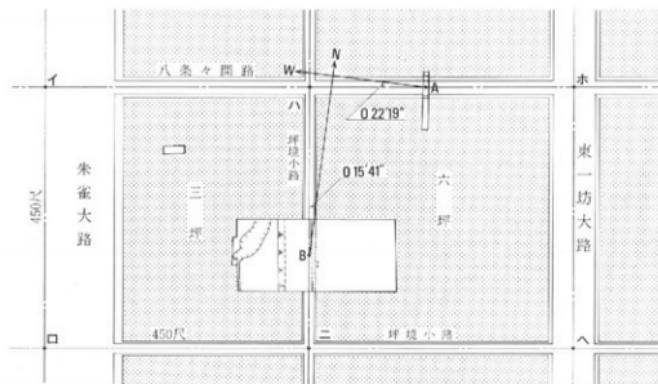


fig.53 条坊復原概念図

地点	X (m)	Y (m)	地点	X (m)	Y (m)
A	-148,946.123	-18,380.000	ハ	-148,946.506	-18,438.995
B	-149,031.000	-18,438.610	ニ	-149,079.705	-18,438.387
イ	-148,947.114	-18,572.194	ホ	-148,945.898	-18,306.796
ロ	-149,060.313	-18,571.586	ヘ	-149,079.097	-18,305.188

tab 10 復原条坊座標値一覧表

小路東側溝 S D 3333心から西へ1丈の点を求め、これを小路心（B点）とし、ここからN 0° 15' 41" Wの振れで延長した中軸線との交点座標を求める（ハ点）。さらに、各坪の一辺を450尺、一尺=0.296mと仮定し、東西方向については八条々間路の振れ（E 0° 22' 19" N）、南北方向については朱雀大路の振れ（N 0° 15' 41" W）として三・六坪の四周を画す条坊の交点座標を求める結果を得る。この復原結果に今回の調査区および主要構造を重ねた図がfig.53である。ちなみにこの図から、朱雀大路を確認すべく設定した西北調査区は三坪内にとどまっており、朱雀大路には到っていないことが明らかになる。このことは西北調査区の発掘結果とも矛盾しない。

最後に、造営尺を検討しておく（fig.52）。2点間の距離の測定にあたっては、できるだけ同一延長線上に近く、振れの影響が少ない場所の発掘結果を用いた。それでも距離に影響がある場合は朱雀大路の振れ（N 0° 15' 41" W）で修正を加えた。

南北方向については、今回の八条々間路心と平城宮西面南門（玉手門）間、および左京五条一坊七・八坪の小路心間との2地点を計測した。前者が3195.80mであり、後者が1735.91mである。それぞれを計画尺である10800尺、5850尺で除すと、前者が1尺=0.2959m、後者が1尺=0.2967mとなる。東西方向については崇禪寺の南に位置する右京七条二坊々間路心と、東市推定地東北方の左京八条三坊九・十六坪の小路心の座標がある。今回調査検出した三・六坪の小路推定心との距離は、崇禪寺南方地点とが934.06m、東市東北方地点とが1339.39mである。それぞれを計画尺である3150尺と4500尺で除すと1尺=0.2965m、1尺=0.2976mとなる。結果は1尺=0.296~0.297mとなり、平城京の造営尺として指摘されている1尺=0.294~0.297mの範囲内に納まる。

なお、上記の計測値はtab.11の座標値をもとにした。このうち左京五条一坊一・八坪、同七・八坪における座標値（tab.11）は奈良市から提供を受けた成果である。

註1 奈良国立文化財研究所『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

註2 奈良市教育委員会『平城京左京五条一坊一・八坪の調査』『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和69年度』1985

註3 奈良国立文化財研究所『昭和59年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1985

註4 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

番号	地点名	X (m)	Y (m)	調査番号	地点名	X (m)	Y (m)	調査次数
1	八条々間路心	-148,946.123	-18,380.000	160次	7 平城宮西面南門（玉手門）心	-145,753.540	-19,093.266	15次
2	左京八条一坊一・八坪	-149,031.000	-18,438.610	8	左京五条一坊七・八坪	-147,210.215	-18,438.250	奈良市 1984年
3	左京七条二坊々間路心	-145,225.200	-18,457.825	103 - 15次	9 左京八条三坊十五・十六坪々間路心	-148,867.300	-17,100.380	93次
4	左京七条二坊々間路心	-147,140.000	-18,442.610	1981年	10 二坊々間路心	-148,412.960	-19,375.500	124次
5	左京九条一坊三・八坪	-149,519.000	-18,429.650	156 - 2次	11 左京八条二坊九・十六坪々間路心	-148,773.760	-17,100.380	93次
6	八条々間路心	-148,945.000	-18,307.000	奈良研 1972年				94次

tab.11 条坊座標値一覧表



fig.54 三坪遺構変遷図

2 三・六坪の建物配置と時期区分

遺構の変遷は、三坪と六坪とでは必ずしも一致しないが、ここではそれをA～Cの3期に区分して説明する。年代はおおむね、A期が奈良時代前半代、B期が後半代、C期が末頃から平安時代初頭頃になる。なお、北西調査区と北東調査区の建物配置は、発掘面積が狭いため明らかでなく、時期区分についてのみ簡単に触れておく。

A 三・坪 (fig.54)

坪境小路と三坪の東辺部を、およそ幅22mの中世河川S D 3340が占めているため、その部分の様相は明らかでない。しかし、残存部分に限っても、奈良時代の建物は14棟検出されており、調査区にあたる三坪の東南部分は、あまり空閑地をとらずにまんべんなく利用されているといえよう。

A期 3棟の建物 S B3350・3410・3445と池状遺構 S G 3500がこの時期に属する。建物はいずれも南北棟で、方位は正しく条坊の方位に従っており、条坊設定後の建築と推定される。S B3410・3445は、桁行・梁間共に寸法の等しい3×2間の小規模な建物であり、いずれも雜舎に類するものであろう。S B3350は、東に広廂が付き、他より面積は比較的大きいが、これも身舎の梁間などはむしろ小さく、邸宅の主屋となり得るものではない。建物がすべて南北棟であるのは、S G 3500と坪境小路にはさまれた狭い敷地であるという制約によるが、S B3350が東廂であることを考慮すると、部分的な発掘で問題ではあるが、これらの建物が坪境小路に面した東を正面として建てられた結果とも考えられる。

7世紀末までこの地には、古墳時代から続く河川S D 3400が存在し、条坊施行に伴なって池状遺構 S G 3500に改修される。S G 3500はその南端に南北溝 S D3399が取り付き、南ないしは南西に想定される園池へ給水する施設であった可能性がある。ただしその場合、S D3399以南に残る敷地が1坪分の宅地では園池及びそれに伴う主殿を置くには狭く、宅地は南の坪にも及んでいた可能性が考えられる。

A期の年代は、上記のように条坊施行後の時期であるのは明らかであるが、柱穴から出土した遺物ではその上限と下限を明らかにできなかった。しかし、その存続年代については、池状遺構 S G 3500の年代が一つの扱い所となる。S G 3500の堆積土は大略3層あり、そのうち中層は奈良時代中頃から後半（平城宮土器編年Ⅲ・Ⅳ）に比定でき、次のB期の存続年

代とは対応する。他方、下層は奈良時代前半（平城宮土器編年Ⅱ）に限定できることから、この時期をA期の存続年代と考えることができよう。北西調査区ではS B3506、S A3508がこの時期に属するが、両者は重複し、2小期が考えられる。

B期 4棟の建物 S B3360・3401・3420・3465があり、S G3500はこの時期にも存続する。S B3420とS B3465とは、西側柱筋と妻柱筋とを揃えて鍵の手に近接して建ち、S B3401はS B3420の南に、S B3360はS B3401の南西にやや離れて置かれる。B期の建物はほぼ条坊の方位にならって建てられているが、いずれも小規模で、主屋となりうるものはない。S G3500の東部は、引き続き雑舎の空間としてあったと考えられる。

B期の年代は、S B3420の柱掘形から奈良時代後半の土器が出土しており、この時期が上限となる。北西調査区ではS B3501・3511、S A3510がこの時期に属そう。重複と位置関係からS B3511が占く、S B3501とS A3510はその後の改作と考えられる。

C期 条坊が廃絶されたか、ないしは少なくともその規制が薄れたと推定される時期で、建物はいずれもその方位が、北でやや東に振れる傾向にある。S B3405・3415・3445・3455・3475・3477・3480の計7棟があり、S G3500は幅も深さも減少するが、この時期まで存続する。重複や位置関係から、これらはさらに2小期に区分できる。

C₁期に属するのはS B3405・3415・3455・3477の4棟。東西棟2棟を南北に並べ、その北と南に各1棟の南北棟を置く。S B3477はS G3500の東岸に近接して建つ。

C₂期に属るのはS B3445・3475・3480の3棟。いずれも南北棟で、方位はC₁期より北でさらに東へ振れる傾向がある。S B3445・3480は、B・C₁期にも見られた桁行3間、梁間2間の建物であるが、柱間など規模はやや大きい。S B3480は、S G3500の東岸に近接して建つ。

C期の年代は、B期に後続し、奈良時代末期から平安時代初頭頃に位置づけられよう。おそらくは、条坊が廃絶していたであろうこの時期に、建物がS G3500に沿うように方位を定めながら、なおかなり盛んに建てられたことは注目される。あるいは坪の一部は耕地へと変り、関係する小住居がこの地を占めるようになったのであろうか。北西調査区のS B3505・3315がこの時期にあたり、そうした住居の広がりを知ることができる。

B 六 坪 (fig.55・56)

六坪においては、三坪との坪境小路の東側溝から東へ約40m、坪のはば南北中軸線から南へ約38mの、およそ坪の10分の1にあたる範囲の全貌を明らかにし得た。

A₁期 調査区の北方の多量に生活遺物を含む長大な土壙S K3300がある。同時期の建物としては、調査区東辺にS B3195・3230・3250、南辺にS B3180・3212の計5棟があり、井戸S E3260もこの時期につくられた可能性が強い。建物はいずれも柱掘形が小さく、柱間のせまい小規模な建物であり、方位は条坊の方位より北でやや東に振れる。以降の時期に、条坊の方位に沿って建てられた比較的大規模な建物が出現することを考えあわせると、これらの建物は宅地内に本格的な造営がされる前段階のものと考えられる。また、S K3300は今回検出された建物群とは離れていることから、S K3300の北にこれと関係する建物群の存在が想定される。

A₂期の存続年代は、上縁S K3300から平城宮Ⅱ～Ⅲの土器が、S B3180の柱穴から同Ⅲの土器が出土していることから、奈良時代前半から中頃までにおける。

A₃期 北辺を東西溝S D3310Aで塗し、東辺に東西棟S B3200と、その付属屋S B3220A・

3225、及び南北棟 S B3170・3245と
井戸 S E3260を整然と配置し、坪境
小路近くに規模の大きい南北棟 S B
3330を1棟置く。いずれの遺構も正
しく条坊の方位に従っている。

S D3310 Aは幅約1mの素掘り溝
で三・六坪の坪境小路 S D3333に注
ぐ。位置的には六坪の南北中軸線か
ら南約3mにあり、六坪を二分する
坪内道路の南側溝と考えられる。S
B3200は、発掘区東端に妻柱を検出
しており、桁行4間となるが、これ
が間仕切であって、さらに東へ伸び

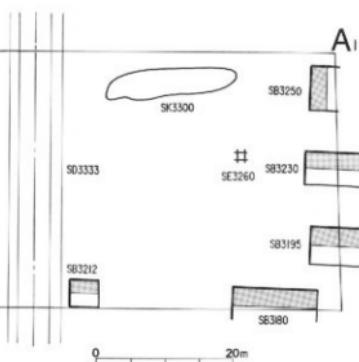


fig.55 六坪遺構変遷図 I

る可能性もあり得る。柱掘形が大きく形も斬っており、付属屋を伴っていることから、住宅の主屋ないしそれに準ずるものと推定される。ただし、柱間は桁行西2間がやや広く、不規則であるが、西2・4の柱筋を中心線として北方に S B3220 A・3225を配したとすると、左右対称に近い配置になる。南北棟と推定した S B3170は柱間が狭く大きな建物にならない。S B3245と S B3330は、その間約25mの距離を置くが、身舎桁行の中心線が一致しており、同時期と推定した。この中心線は、坪の南北2等分線から南に約12m(40尺)の位置にある。S B3330は南妻に廊を持ち、六坪西半の空闊地にあって、西端を区切る機能をも有していたと考えられる。なお、S B3330の南方に、方位の一致する遺構 S X3205があり、これもA₂期と推定した。またA₁期にはじまる井戸 S E3260の底近くに網代を敷いたのは、この時期と考えられる。A₂期の年代は、決め手になる伴出遺物がないが、A₁期と次のB期との間であり、奈良時代後半のはじめ頃に位置付けられる。北東調査区の S B3525はこの時期に比定できよう。

B期 A₂期の S B3200・3220 Aとは同位置に、南に広廻を持つ桁行6間以上の大規模な東西棟 S B3190とその付属屋 S B3220 B及び新設の S B3232が建てられ、北西には各々桁行5間の南北棟建物 S B3270と東西棟建物 S B3280が、鍵の手状に配される。また、坪西端には、A₂期の S B3330の位置に規模を縮めて S B3325が、その南に小規模な東西棟総柱建物 S B3210が建てられる。井戸 S E3260はこの時期にも存続するが、北辺の坪内道路は廃され、南側溝の西端部のみ S B3280の雨落溝として機能する。この時期の建物群は井戸を伴う大きな空闊地を囲むような配置となり、その西に門 S B3320が坪境小路に向って開くことになる。

個々の建物のうち、S B3190は桁行がおそらく7間、ないしは9間に及ぶかと思われ、付属屋 S B3220 Bを伴なっていることから見ても住宅の主屋に比定し得る。一方、S B3270・3280はともに桁行5間の建物であるが、S B3270は内部に棚状施設 S X3272を伴い、S B3280も精度の高い建築とはいせず、ともに雜舎に類するものと推定される。B期の建物の方位は、A₂期に比して、北でやや東に振れる傾向にある。B期の年代は、S B3190の柱掘形から平城宮Ⅲ～Ⅳの土器、S B3270の柱穴から同Ⅳ～Vの土器がそれぞれ出土し、上眼を奈良時代後半、下限を奈良時代末頃におきうる。

C期 条坊の計画をはなれた時期で、遺構は調査区内に散在する。東南にはS B3175・3185・3203の3棟の南北棟と、塀S A3204があり、方位はいずれも北で東へ振れる。S B3175は桁行5間以上であるが、梁間が北でひろがり、桁行の柱間も不揃いであるなど、建物平面の精度は低い。S B3185・3203はともに小規模な建物で、S A3204はS B3203の西をすす。調査区の東ではS B3240と、その南をすす塀S A3288がある。S B3240の角の出は北と南で異なり、身合にもゆがみはあるが、規模としてはこの時期では最大級で、桁行も4間以上、5間ないし7間となる可能性があり、主屋とみなしうる。北西のS B3290には折れ曲った塀S A3295が伴う。桁行と梁間の柱間寸法が大きく異なり、平面にもゆがみがある。方位は他の建物と逆に北で西へ振れる。南西には小建物S B3214が離れて建ち、東に塀S A3211が伴う。西門S B3320の南に想定される築地と重複する位置にあり、それより新しいと推定した。北東調査区のS B3528もこの時期に比定できよう。

C期の建物配置は全体的な計画は認められず、しかも建物は短かい塀を伴うものが多く、小規模な住居が散在している状況と推定される。年代は三坪と同様に、奈良時代末頃から平安時代初頃頃と考えられる。なお、S E3260は上層に奈良時代末の土器を含み、C期にも存続していた可能性がある。

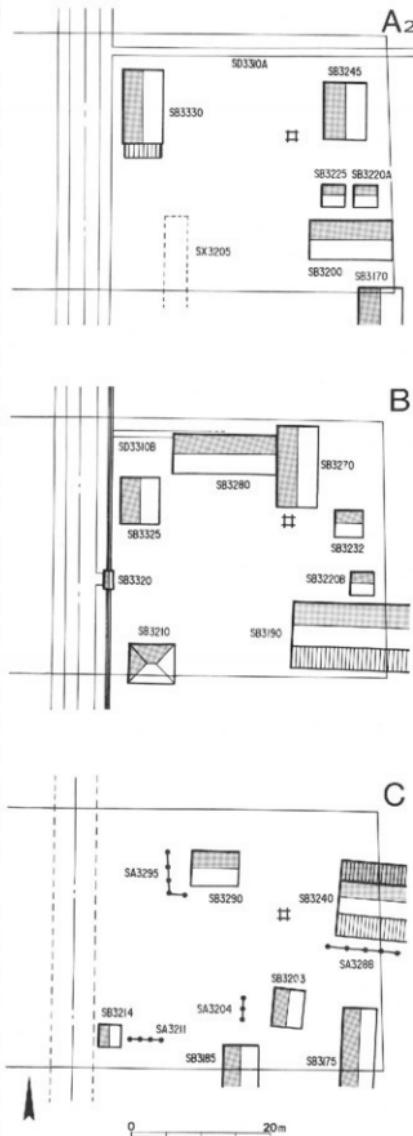


Fig.56 六坪遺構変遷図II

C 小 結 (fig.57)

三・六坪の造構の知見をまとめ、両坪の性格について考察を加えてみたい。

三坪は、西側が朱雀大路に直接面する坪であり、その性格に、何らかの特殊性を有する可能性は大きい。単に形態の面からいっても、朱雀大路の幅員が広い分だけ、一般の坪よりかなり狭い、縦長のものとなる。加えて、かなりの幅員を持つ池状造構 S G3500が存在し、少なくともそれはこの坪を細分化して用いるには困難な条件と考えられる。調査区の北端は坪の南北2等分線とほぼ一致するが、その付近には坪内を区分するような溝や堀に類する造構は見られず、また調査区内の三坪全体を通じてそうした造構がまったく存在しないことも、この坪が広く使われたことを示唆する。そのなかで、今回調査した部分は、奈良時代を通じて雜舎、または經營地区的な性格のもとであり続けたと考えられよう。それでは、邸宅の主屋の位置はどこになるのかという問題が生まれるが、それを推定するのは今回の調査結果のみからは困難である。しかし仮に、池状造構 S G3500から南にのびる S D3399を、本来の園池への導水路と仮定すると、三坪の南西部が主屋の候補地として浮かび上がり、宅地は四坪を合わせた南北2町の大規模なものとなる可能性がでてくる。その場合は尋常な班給の状況とは思われず、何らかの公的機関を想定することもできる。近接地の調査が望まれる所以である。

一方、六坪において、特に奈良時代の住居と考えられる A₂・B期の配置に着目すると、やや規模の大きい建物があり、特に S B3190・3200については、主屋ないしそれに準ずる建物となる可能性が大きい。したがって、今回の調査はその後方の、空閑地を囲む經營地域に当たったものと推定される。宅地の規模については、調査区北端の東西溝 S D3310の存在が問題となる。坪の想定南北中軸線からの距離は約3m(10尺)であり、幅2丈の坪内小路の南側溝の可能性がある。すなわち、少なくとも A₂期において、坪の南北が2等分されていたとしても造構の配置上矛盾がない。ただし B期になると、S B3270・3280がこの小路と重複する位置になり、区画はとりはらわれたと考えられる。S D3310をのぞくと、調査区内には区画の溝や堀などの造構はなく、坪内が宅地としてさほど細分化されていないことを示している。

以上、三坪と六坪は多少様相は異なるものの、いずれも比較的大規模な宅地として利用されたことが推定される。



fig.57 三・六坪造構配置図 (B期)

3 平城京の土器埋納遺構

今回の調査においては、土器を埋納した遺構が三坪東辺の比較的狭い範囲から3個所も検出され注目された。

古代の遺跡から、土器を埋納した遺構を発見することがしばしばある。それらの遺構の性格を証明するには難しい面が多いが、土器に納められた内容物によって埴墓、地鎮め供養、胎衣埋納など葬祭呪術にかかわるものととらえられている。埴墓の場合は容器内に人骨が見られたり、骨蔵器を埋納する何らかの施設を伴うので、他との区別が比較的容易である。地鎮め供養の場合は錢貨・金箔・水晶・小石などが容器に納められているところから、そのように考えられるのである。胎衣埋納を証明することはさらに難しいが、民俗例を参考にしてそう判断されるものが見受けられる。^{註1}

さて、平城京内でも土器を埋納した遺構がこれまでに3例（左京三条二坊三坪、同四条二坊十六坪、右京五条四坊三坪）ほど見られ、それらに対して地鎮め供養、あるいは胎衣埋納の遺構との見解がとられている。しかし、この両者を明確に分離することは難しい。左京二条二坊三坪例は、小形の須恵器壺に「和同開珎」銭2枚が納められていた。その埋納位置は特定の建物遺構にかかわるものではないが、三坪のほぼ中央に位置するところから、この坪全域を対象とした地鎮め遺構と考えられた。また、ここで埋納に用いられた須恵器は「壺口」であり、從来類例の少なかった形態である。平城京内では、壺口は左京九条一坊（前川遺跡）の井戸から土馬などと共に出土している例、左京二条六坊十一坪から三彩小壺・土馬と共に出土している例^{註2}がある。いずれも壺内から何も検出されなかったが、共伴した他の遺物から祭祀に関係深いものと考えられた。こうした事例を参考にして、左京三条二坊三坪の場合、地鎮め供養の遺構と考えられたのである。

右京五条四坊三坪から出土した薬莢形の須恵器には、「和同開珎」銭4枚と筆管・墨各1点が納められていた（fig.58）。当初、この遺構については骨蔵器の可能性が考えられていたが、埋納位置が掘立柱建物の妻側のすぐ外側、すなわち出入口と推定される位置に存在するところから、そして民俗例との関連から胎衣壺の可能性が強いと考えられるようになった。新生児の一生は胎衣の取り扱いによって決まるのだという俗信があり、民俗例では男児の場合、胎衣を納めた容器には筆・墨・小刀を副えるという。そして、埋納の位置は吉方を選ぶのであるが、家の入口に埋める場合が多いようである。それは、その児が胎衣壺を踏む者の精を受け、より強く育つと信じられたからであり、人の通行量の多い家の入口に埋められることが多かったであろう。右京五条四坊三坪例は、おそらく官人としての出世を願ってのことと考えられるのである。

では、今回出土した3例の性格についてはどのように考えたらよいのであろうか。地鎮め供養の遺構に該当するのであろうか。それとも胎衣壺埋納遺構と見るべきものであろうか。S X3436出土の杯には「神功開闢」銭1枚が納められていたが、他のS X3388とS X3434は何ら内容物を伴ってい



fig.58 左京五条四坊三坪土器埋納遺構

なかった。しかし、いずれの容器も蓋をした状態で小穴に埋納されていたので、意図的な埋納であることは明らかである。S X3388・3434の場合、容器内に何も納めずに埋納したとは考えにくいので、何らかの有機物が納められていたと考えることができよう。地鎮め供養に際しては、平城京内に限らず多くの場合、五宝あるいは七宝とよぶ金・銀・瑠璃等、後世に遺存する物が納められている。その点を考慮すると、S X3388・3434は地鎮め供養の可能性がきわめて少ないと言わざるを得ない。

これらの埋納位置を検討してみると（fig.59）、S X3388はB期（奈良時代中頃～後半）の建物S B3360北妻柱筋外側に、S X3434は同じくB期の建物S B3420南妻柱筋外側に位置し、しかも妻柱位置、すなわち妻側の中心を外れている。このことはそれぞれの埋納位置が建物の出入口外側にあたっていた可能性を強く示し、右京五条四坊三坪例によく似た状況を呈する。ただ、納められる胞衣の量を考慮した場合、S X3434はそれにふさわしいとは言い難い。しかし、この埋納行為が呪術的な儀式であるところからすれば、そして母体からの胎盤・胞衣すべてが納められたものではないとしたならば、S X3434もその可能性が大きいと言えるだろう。S X3388は土器器の蓋に須恵器の蓋が用いられ、一見不釣合いな感じを抱かせるが、日常什器を転用したための結果であろう。同一事例が、平城京左京四条二坊の発掘調査によって検出されており、注目される。

S X3466は、内容物として「神功開寶」銘が納められていたこと、特定の出土物遺構とは直接かかわらないことから、他の2例とは性格を異にするようである。S X3466が検出されたS G 3500からは、先述した特殊な性格をもつ須恵器壺Hが9個体出土している。壺Hそのものがごく稀にしか出土しないものであるにもかかわらず、今回の調査によって9個体出土したこと自体、異例と言わなければならぬ。しかも、それらすべてがS G 3500からの出土であることを考えると、何らかの呪術的行為がこの地で行われたと考えざるを得ない。これらの壺Hがそのことを直接に示す状況で出土したわけではなく、今後さらに検討を進めていかねばならぬことではあるが、壺Hのもつ性格や、S X3466のありかたから、この地域において水を媒体とした呪術的行為があったと見ることも、あながち無理なことではないと思われる。

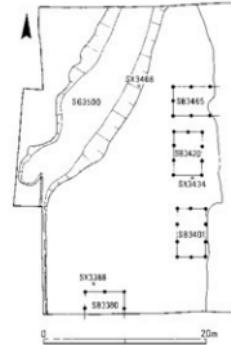


fig.59 土器埋納位置図
(左京八条一坊三坪)

註1 奈良国立文化財研究所『平城京左京一条二坊三坪発掘調査報告』1984

註2 奈良市教育委員会『平城京左京四条二坊十六坪の調査』『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和58年度』1984

註3 奈良国立文化財研究所『平城京右京五条四坊二坪発掘調査概報』1971

註4 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

註5 奈良女子大学『大学院・一般教養棟予定地の調査』『奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報』II 1984

註6 水野正好『想蒼巖記』(奈良大学『奈良大学紀要』13)

4 中世における佐保川の変遷 (fig.60)

今回の調査で検出した河川 S D3340については、調査区内を正南北に流れる事と、東西両岸が川中へ急激に下降すること、当初の護岸施設の一部かと思われる丸太材を西岸で検出したこと等から人為が加えられていることは確実であり、人工的な開鑿の可能性がある。また、出土遺物からおおむね中世に生きていた河川とみられる。

調査区の西1町余りの朱雀人路上を佐保川が南流しており、S D3340との関係が問題となる。現在の佐保川は、五条大路付近 A で菩提川と合流後西南流し、六条大路1町北11で嵐川を併せて更に西南流する。七条大路と朱雀大路との交点 J で岩井川と合流してからは朱雀人路上を S 字状に蛇行し、八条大路沿いに東流してきた秋篠川とも K で合流して京外へ流れ出る。

奈良時代、平城京造営に当って河川が人為的に付け換えられたことに異論はないが、京内を流れる河川の復原には諸説があって、殊に佐保川については問題点が多い。佐保川が六条以南^{註1}で今日のような河道であったことは考え難く、朱雀大路以東を南流していたと思われる。

中世の佐保川に関しては若干の手掛りがある。まず、中世の佐保川に聞くとみられる中世河川が左京二条四坊三・七坪の調査で検出され、同二坊十・十五坪では室町時代の多量の宗教的遺物を伴う佐保川の氾濫によるとみられる砂屑の堆積を確認した。この他の調査や歴史地理学的方法による遺存地割の検討から六条以北の河道については復原が試みられている。六条以南については発掘調査による成果はないが、地籍団の小字名・地割等から佐保川の河道痕跡を求めるに fig.59 の如くなる。この痕跡を何時頃のものと考えるかには問題もあるが、中世まで遡ることは確定である。東大寺文書所収の券券^{註2}・西大寺田園目録の記載^{註3}・地割等から、鎌倉時代には、現在西南流する起点 A より更に南流して B を経、嵐川とは現合流点日より南の C で合流、そのち D → E → F → G と蛇行しつつ現河道よりも東方を西南流していた。のち佐保川は嵐川との合流後、D → I へと今日に近い流路に変り、I からしばらく西南流したのち南流したのであろう。正南北に、しかも奈良時代の坪境小路上を流れていたために地割にこそ痕跡は残さなかっただけでなく、今回検出の S D3340 こそ、この時期の佐保川の南流する流路であったのではなかろうか。以下その推定の論拠を示し、年代を推定してみる。

秋篠川が八条大路沿いに東流し、朱雀大路上 K で佐保川に合流させられたのは、慶長元年(1596)年に始まる増田長盛の郡山城外廻り惣堀普請に伴う「奈良口大橋川の川改」によるところから、この頃にはほぼ現状通り朱雀人路上を佐保川が流れているとみられる。次に岩井川については、奈良時代平城京東隣の堀河として付け換えが行われ、能登川と合流後東京極沿いに南流させられていたが、そのち七条大路沿いの現流路に換えられたと推定され、その時期を文明年間(1469~1486年)以降とする説がある。岩井川の付け換えが既存の七条大路南・北両側溝のいずれかを利用したものであれ大規模であったことは、佐保川が秋篠川との合流点 K で弯曲させられてその水を受けているように、岩井川との合流点 J でも大きく弯曲させられていることからわかる。現状ではこの弯曲が A → H → I の流れとは急に角度を変えて I から始められていて一見唐突にみえる。しかし、佐保川が岩井川の付け換え當時 D → I を流れ、それを I → J と躊躇したとする奇異ではない。以上の様に考えるならば、佐保川が A → C → D → I と流れ、更に J' 付近から南流して S D3340 へと続いている時期があり、そのち岩井川の付け換えが行われた時、七条大路上を流れる岩井川の水を受けるために合流点を J にして大きく弯曲

せ、S D3340を1町ほど西へ移して朱雀大路上を南流させたと推測するのも無稽とは言えない。この時以後佐保川は朱雀大路上を南流することになったとすると、岩井川の付け換えは秋篠川の付け換えの行われた慶長元年以前で、おそらくは文明年間から慶長元年の間に求めることができ、今回検出の S D3340もほぼ室町時代の佐保川に限定して考えることができよう。

註1・4 伊達宗泰「平城左京の堀川について」『地表空間の組織』1981

註2 奈良国立文化財研究所『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1982

註3 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』1975

註5 寿永2年藤井仲子田地処分状・建久2年田辺牛丸田畠作手売券・建久6年大江友景水田売券・建長6年尼妙性田地売券・嘉慶3年尼連阿田地処分状

註6 「添上郡左京九条一坊十六坪内一反 字辰市町」とみえる。

註7 大和郡山市『大和郡山市史』1966

註8 犀井甚一郎・伊達宗泰「平城京域内河川の歴史的変遷に関する研究」(奈良市『平城京の復原保存計画に関する調査研究』)1972

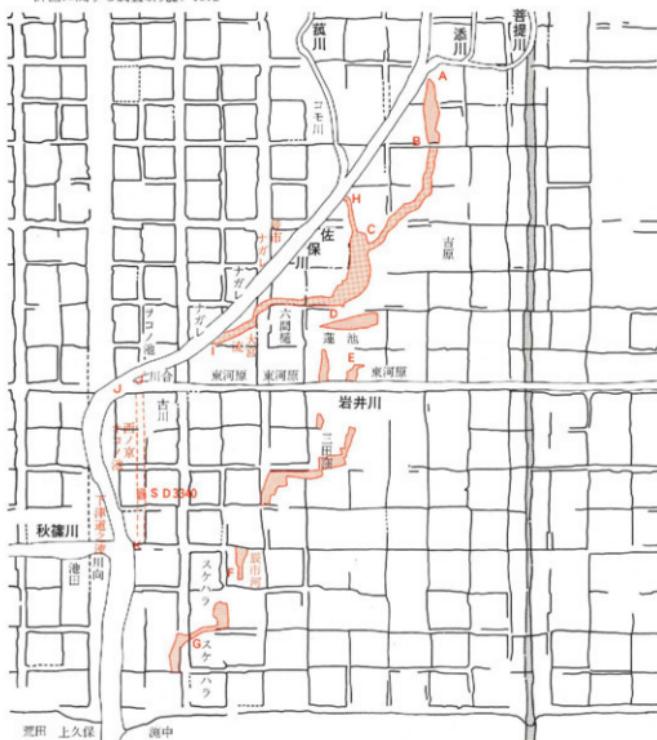


fig.60 遺存地割地名による旧河道復原図

5 結語

平城宮南辺部の発掘調査はこれまで幾度となく行われているが、今回の調査は面積が大きく、遺存状態も良好だったので、多くの遺構・遺物を発見することができた。調査成果についてはすでに各章で詳しく述べたが、ここではそれらをまとめ結語としている。

条坊復原 左京八条一坊六坪の北辺で検出した八条々間路は、溝心々距離が3丈であること、道路心が平城宮西面南門心（二条々間路心）から3195.80mあり、これを計画尺である10800尺で除すと1尺=0.2989mとなり、平城宮の造営尺として指摘されている1尺=0.294~0.297mの範囲に納まること、また過去の調査成果とあわせると、その方位が国土方眼北に対して西へ0°15'41"の振れに近いことが判明した。一方、二・六坪の坪境小路は、東側溝のみを検出したにとどまるが、幅員を2丈と推定すると、その心が右京七条二坊々間路及び左京八条三坊九・十六坪の小路心から各々934.06m、1339.39mあり、これらを計画尺である3150尺と4500尺で除すと各々1尺=0.2965m、1尺=0.2976mとなり、平城宮の造営尺の範囲に納まる。ただし、北方や南方で検出している坪境小路は必ずしも同一線上になく、小路の計画は大路ほど精緻でなかったのか、あるいは多少問い合わせていたのかといった問題が残る。

なお、二・六坪々間路の東側溝脇から東約0.7mで掘立柱の門を検出したが、この北と南の延長線上には何らの区画施設がないことから、六坪の西辺は小規模な整地で画していたものと推定した。一方、八条々間路の南側溝脇から南約1.3mで東西に並ぶ2個の柱穴を検出し、六坪の北辺は板塀と考えたが、これが門であって北辺も築地で画していた可能性がある。

左京八条一坊三・六坪の変遷 三坪では坪の中央やや東寄りで幅約10mの池状遺構S G3500と、その東岸で計14棟の掘立柱建物、塀などを検出した。建物群はA期（奈良時代前半）、B期（奈良時代後半）、C期（奈良時代末頃～平安時代初頭）の、大きさは計3回の改作がある。建物規模はほとんどが3×2間と小さく、主屋となりうるものがない。奈良時代を通して存続するS G3500は、洲浜や景石がないことから園池とみるには問題があり、南端に取り付く南北溝S D3399を通じて南ないしは南西に想定される園池へ給水する施設であった可能性が強い。その場合、S D3399以南に残る敷地が二坪のみでは狭く、占地は南の四坪にも及んでいたと考えられる。S G3500の西もしくは南西部に園池に伴う主殿を想定すると、S G3500東岸の小規模な建物群は経営地区の雜舎とみることができる。S G3500内の東側から多量の土器が出土したこととこのことを裏付ける。朱雀大路に直接面し、しかも池を伴って2坪分を占有する可能性が強いことからすれば、この地には何らかの公的施設が存在していたことが充分に考えられる。なお、C期にはS G3500は痕跡として存在し、建物も疎で方位も振れる。条坊の規制がゆるみ、小住居が散在していた状況と推定される。

六坪では坪の西辺中央部やや南寄りで掘立柱建物24棟、掘立柱塀5条、井戸1基のほか、北東の小調査区内で若干の掘立柱建物を検出した。建物群は大きくA～C期の改作があり、年代も三坪の年代とほぼ対応する。A期は2小期がある。

A1期（奈良時代前半～中頃）の建物は比較的小規模で、方位も振れることから、この地に本格的な建物が造営される前段階のものと考えられる。井戸S E3260はA1期に作られ、C期まで存続する。この時期、調査区の北辺には多量の生活遺物を含む長大な土壙S K3300が存在し、この北に別の建物群が想定される。坪の南北中軸線をこえた比較的広い占地とみることが

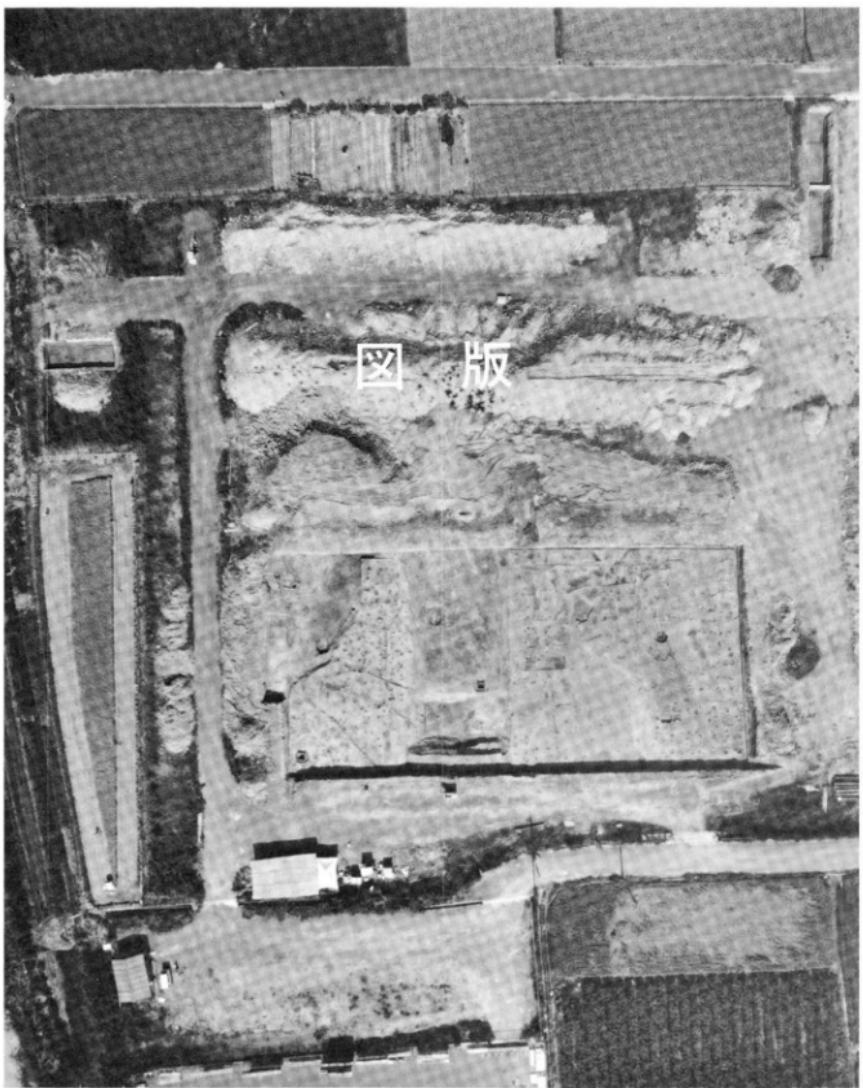
できよう。S K3300から出土した土器は、平城宮ⅡとⅢをつなぐ資料であり、天平時代における土器の細かな編年に恰好の資料を提供することになった。次のA₂期（奈良時代後半初頭）には、坪の南北中軸線上に幅2丈の坪内道路が設けられ、宅地は南北に2分されていた可能性がある。この時期、やや規模の大きな建物が条坊の方位にあわせて整然と配置される。調査区の東南部にあるS B3200は付属屋を伴う主屋級の建物であり、この北西部は井戸S E3260のある空閑地で、周辺に雜舎風の建物を配した經營地区とみられる。B期（奈良時代後半）はA₂期の建物配置をほぼ踏襲するが、建物規模が大きく、坪内道路も廃され、宅地は坪の西半分もしくは1坪分を占めていた可能性が強い。坪を3分する位置で、西面築地に門を開くのもこの時期である。主屋級の建物S B3190の柱抜取穴から出土した漆紙文書は、戸籍またはそれに近い禁名文書であり、公的性が強い。ただし、遺構や他の遺物からはこの地に公的施設があったとする確証ではなく、宅地の規模から少なくとも居住者が一般官人や庶民でなく、高位高官であったとみるに止まる。C期の建物は方位が振れ、しかも短い扉を伴うものが多く、三坪と同様に小住居が散在している状況といえる。平城京廃都前後の様相はまだ充分に揃めておらず、今後、調査の進展をまってその究明を図りたい。

中世佐保川の発見 三・六坪の坪境小路上で検出した幅約22mの河川S D3340は、出土遺物から室町時代に終始したことがわかる。佐保川は現在、調査地の西約100mほどの朱雀大路上を南流するが、遺存地割や文書の記載から鎌倉時代には東方約400～500mの位置をやや蛇行しつつ西南流していたとみられ、室町時代に至って七条大路上を西流する岩井川との合流点から今回検出したS D3340に付け換えられた可能性が強い。その後、おそらく慶長元（1596）年に始まる郡山城外廻り惣堀普請に伴う河川改修にあわせて現在の佐保川に付け換えられたのであろう。

古墳時代集落の変遷 中央調査区の西半部を中心として、古墳時代の堅穴住居跡3棟、掘立柱建物35棟以上、塚6条、河川1条のはか若干の溝と土壤を検出した。河川S D3400は奈良時代の池状遺構S G3500の下層にあり、主に5世紀末～6世紀前半の土器が多量に出土した。幅約10mで南西に流れ、7世紀末まで存続する。建物は河川の両岸に密集し、I期（5世紀末）、II・III期（6世紀前半）、IV期（6世紀後半）の、大きさは4回の改作がある。

I期の建物は3群があり、そのうちS D3400東岸南寄の1群（A：群）にはL字形の塚がともない、この内に主要な建物の存在が想定できる。集落の東は河川から約30m離れた南北溝S D3311が画す。II期の建物も3群がある。I期のA：群の位置にはL字形塚の内に2棟の掘立柱建物を置き、のち建物を建て替えて北に区画溝S D3355を設ける（A₂：群）。他の2群は堅穴住居で構成され、A₂：群を集落の一つの中核とみることができる。III期の建物も3群があるが、A₂：群の位置に建つA₃：群は建物にまとまりがなく、むしろこの地区的拠点は北方のD₂：群に移る。D₂：群はS D3400の東岸沿いに倉庫風の掘立柱建物3棟と、この北東に掘立柱建物1棟を配置し、北・東辺は溝と掘立柱塚で画す。領域は1,000m²と推定される。IV期の建物はS D3400の東岸に散在し、まとまりに欠ける。

大和平野の古墳時代集落については調査例が少なく、その点で今回の調査は遺構・遺物ともに貴重な成果を得ることができたといえる。だが、集落はさらに広い範囲に及んでおり、集落の構造を究明する上でこれから周辺地域の調査を行う必要がある。



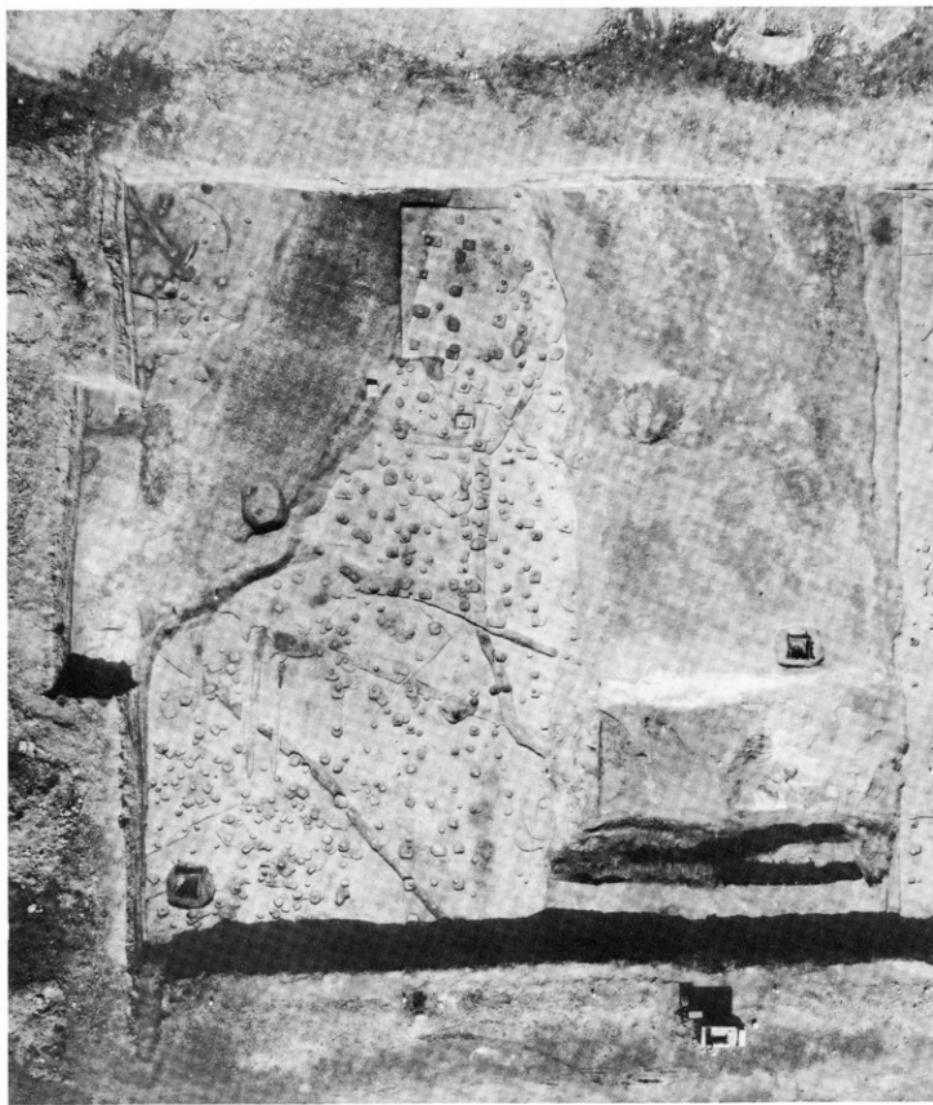
図版

P.L. 1 調査地航空写真 1:850

PL. 2 調査地周辺航空写真



PL. 4 中央調査区西半(三坪) 航空写真



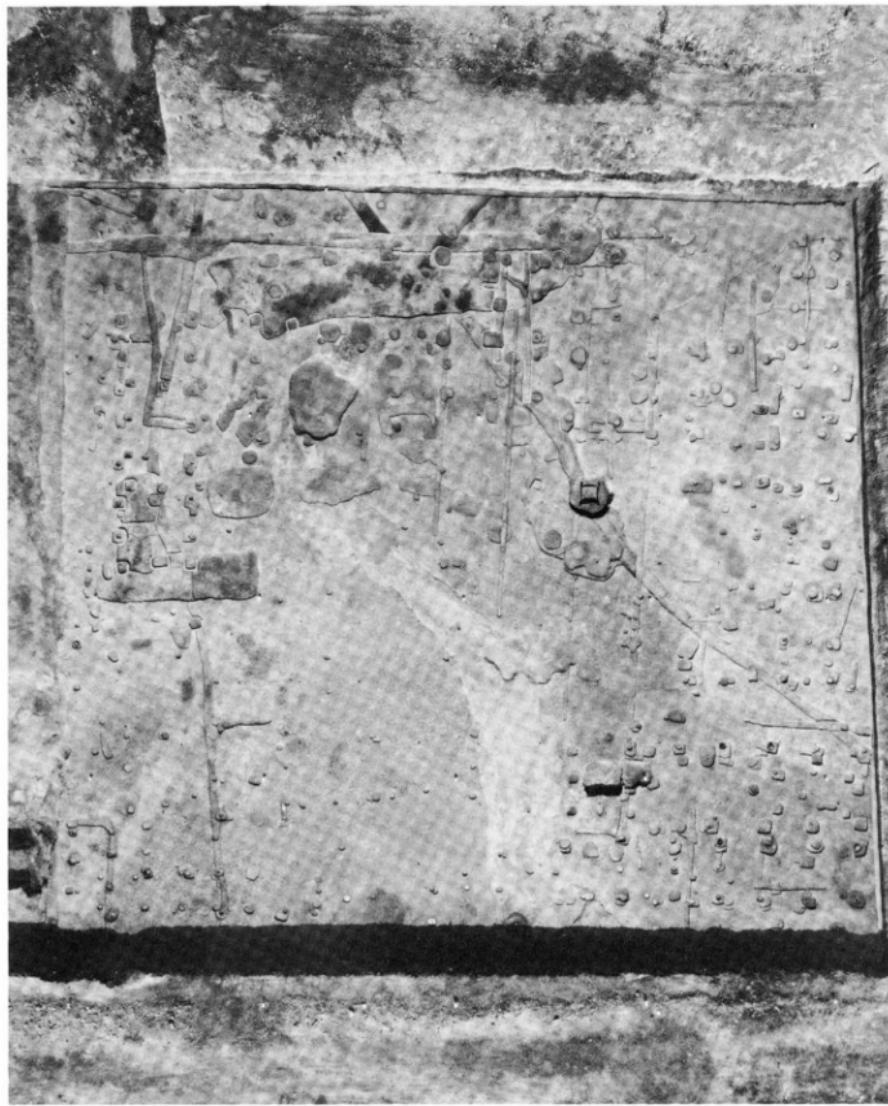
1 : 250

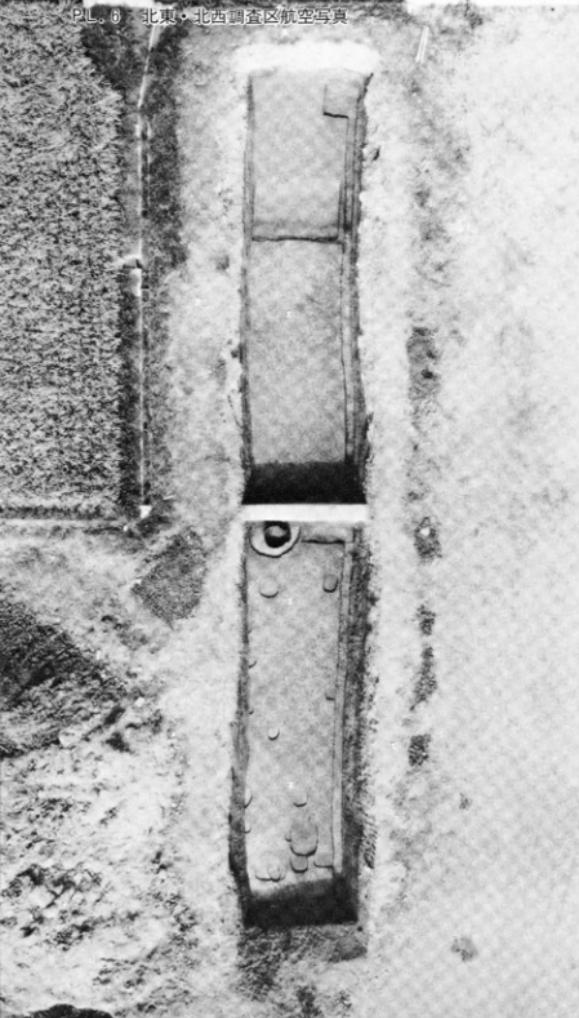
PL. 3 調査地周辺航空写真Ⅱ



昭和59年奈良市撮影 1:5000

PL. 5 中央調査区東半(六坪)航空写真

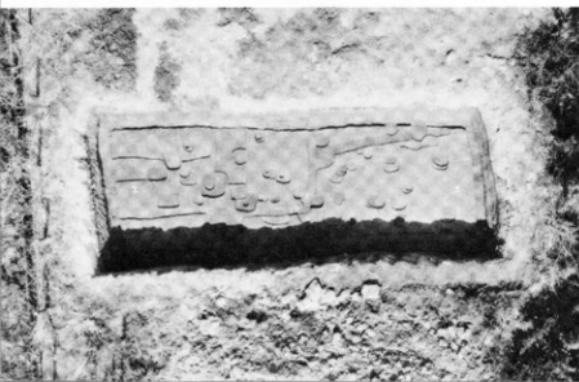




北東調査区

北西調査区

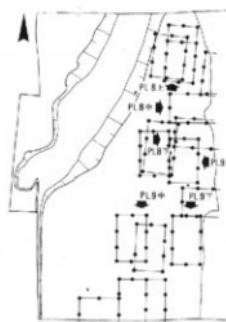
1 : 150



PL. 7 中央調査区西半(三坪)遺構全景



西から

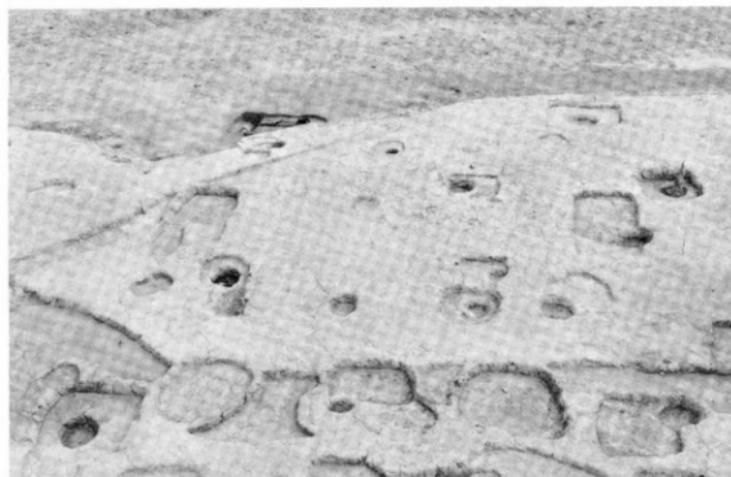




SB3477
3480
南西から



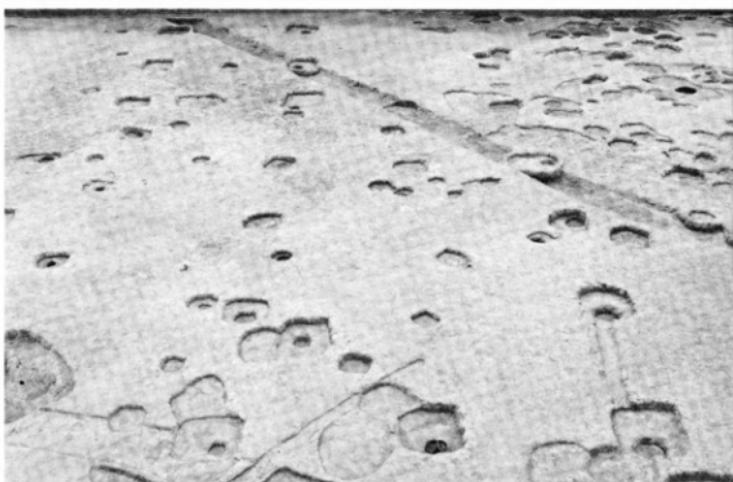
SB3465
西から



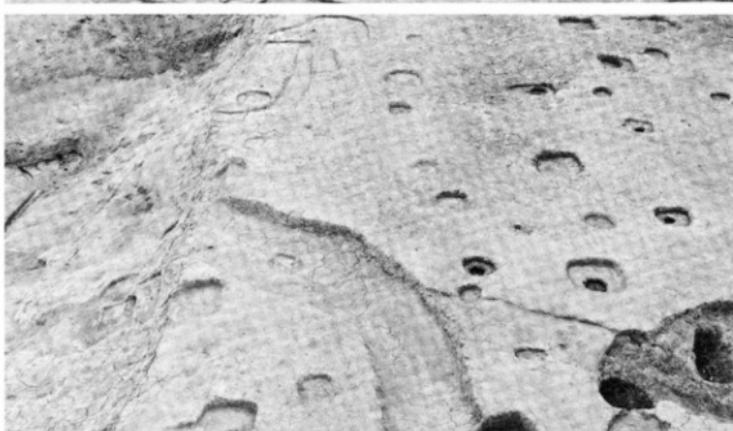
SB3455
西から



SB3420
3444
3445
東から



SB3350
3405
3410
北から

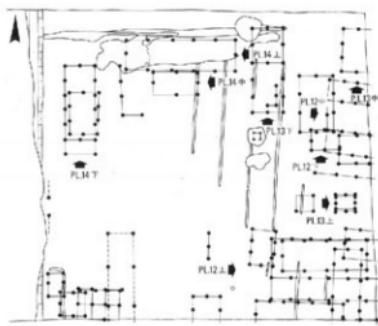


SB3401
北から

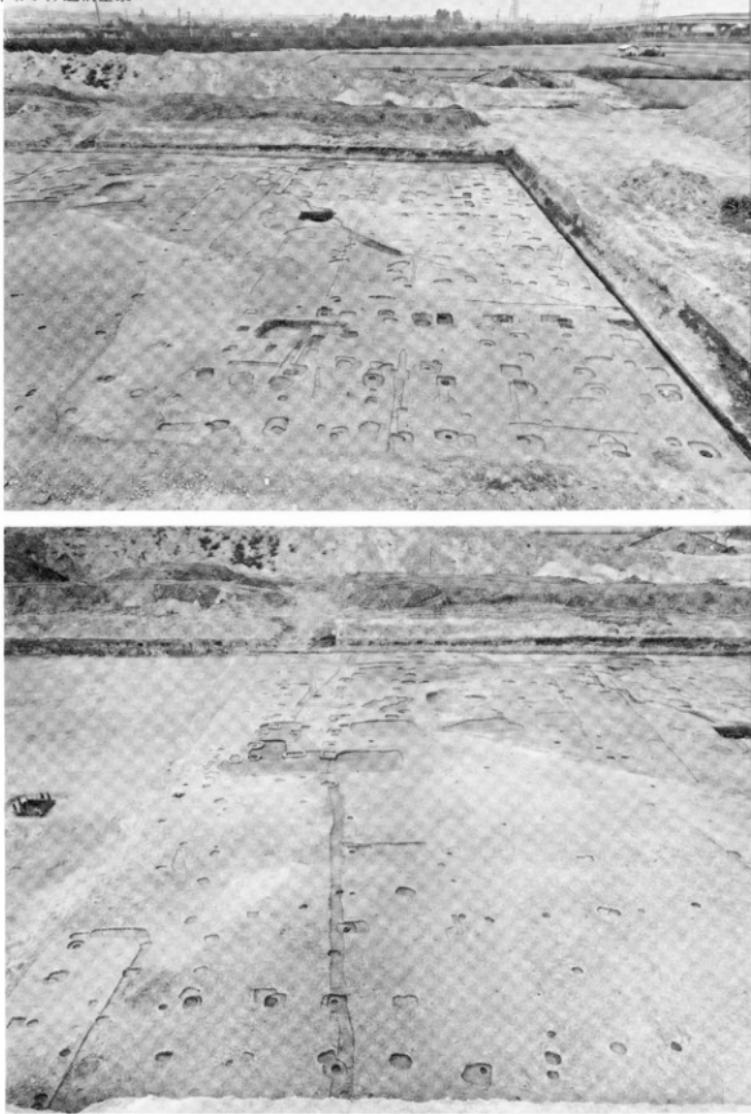
PL.10 北西調査区遺構全景



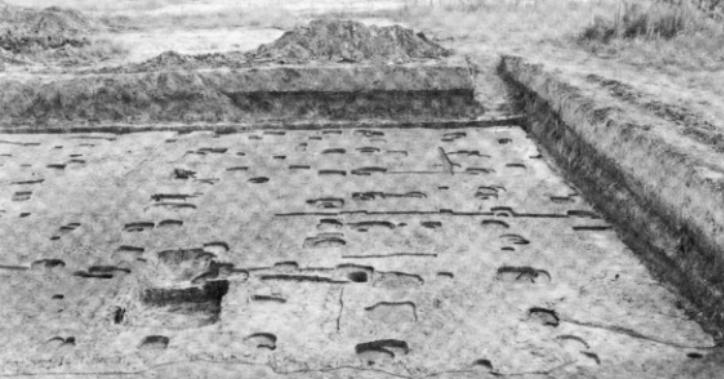
東から



PL.11 中央調査区東半(六坪)遺構全景



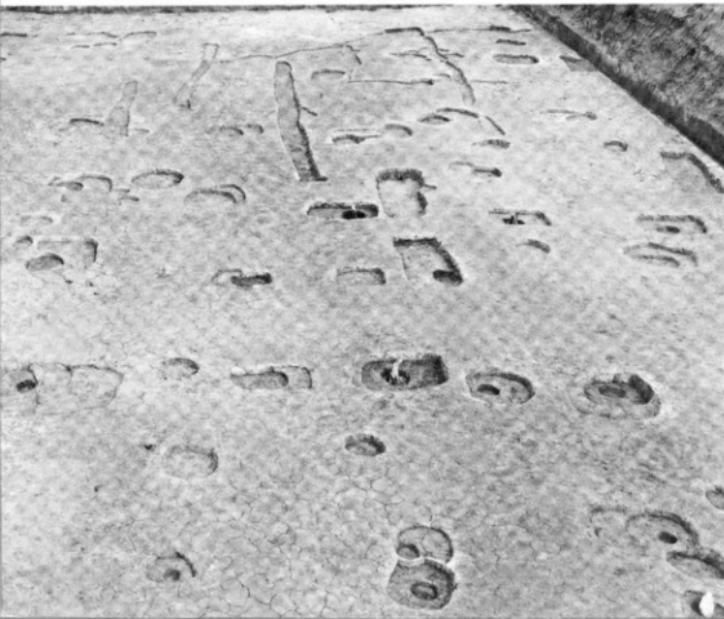
上 東辺部
下 西辺部
南から



SB3180
3190
3200
3203
西から

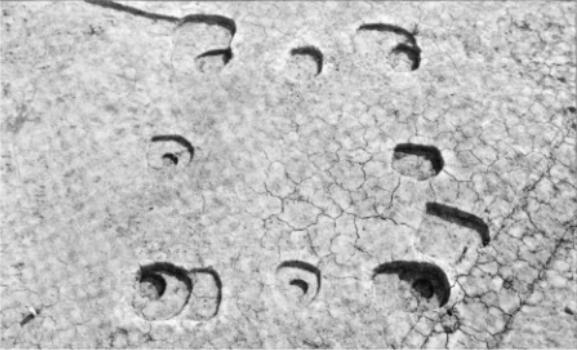


SB3240
西から

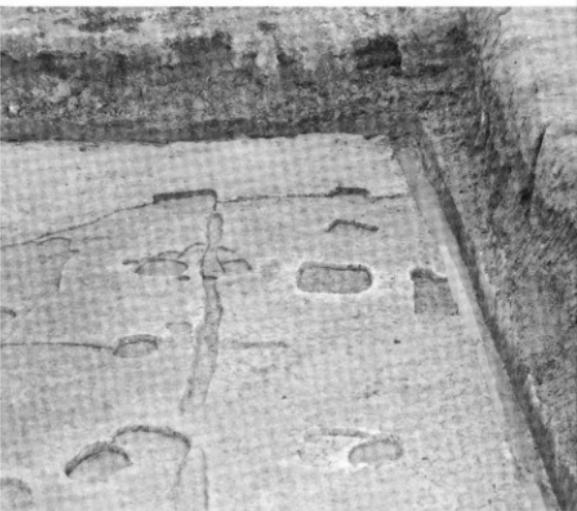


SB3232
3245
南から

SB3220A・B
西から



SB3245
南から



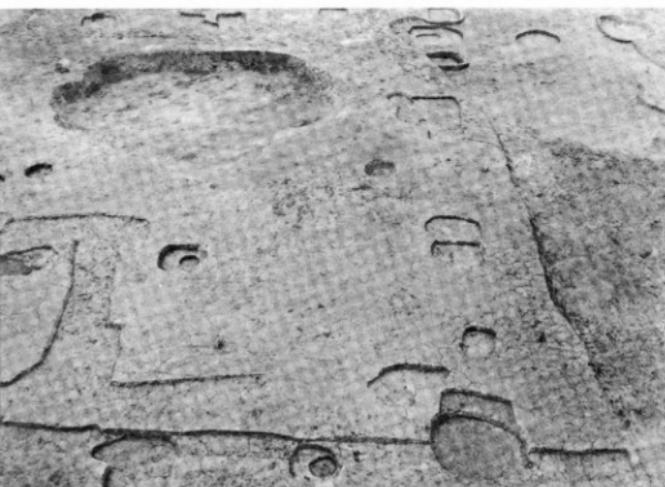
SB3270
南から





SB3280

東から



SB3290

SA3295

東から



SB3325

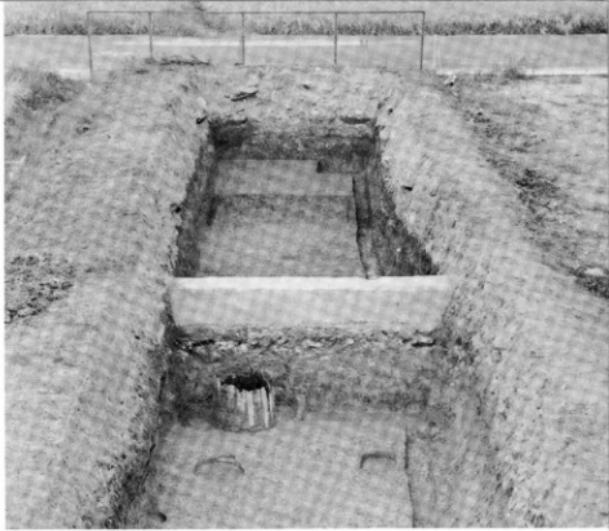
3330

南から

八条々間路

SA3535

南から



坪境小路

SB3320

南から

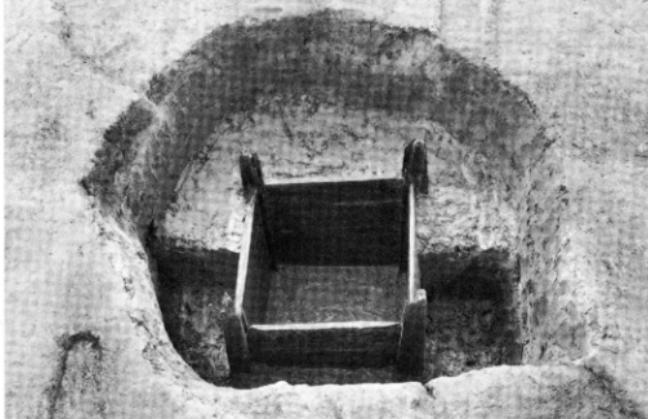




上 SG3500
南から

下 SD3399
北から

SE3260
北から

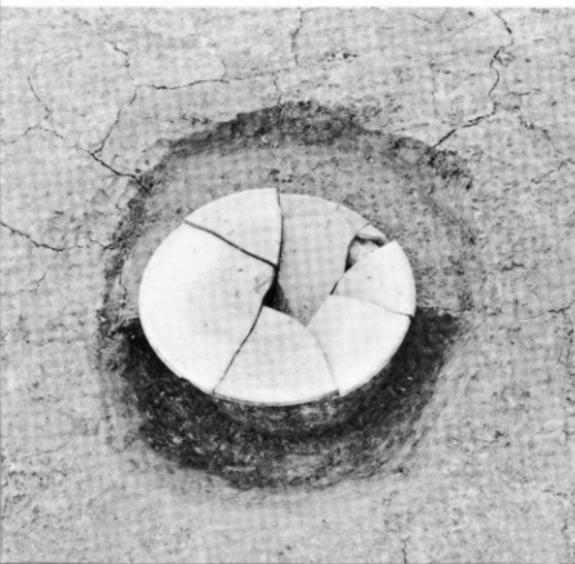
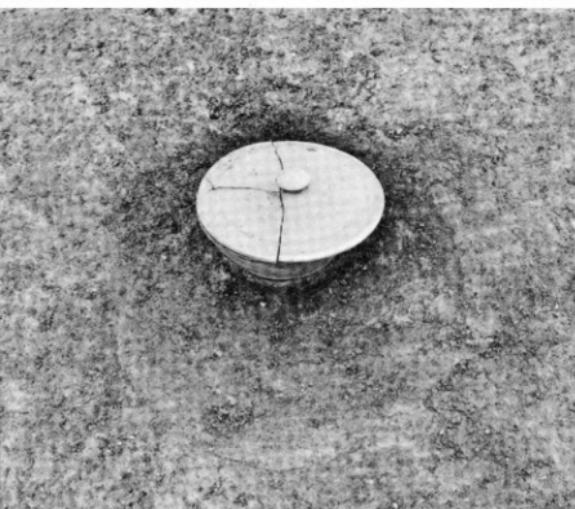


SK3275
南から



SK3300
東から





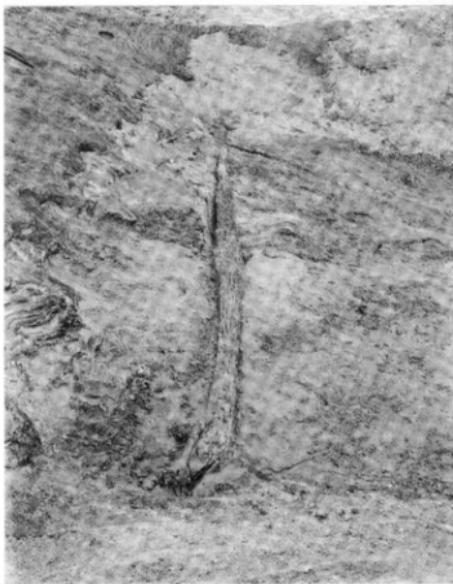


上 SD3340

南から

下 濡岸施設

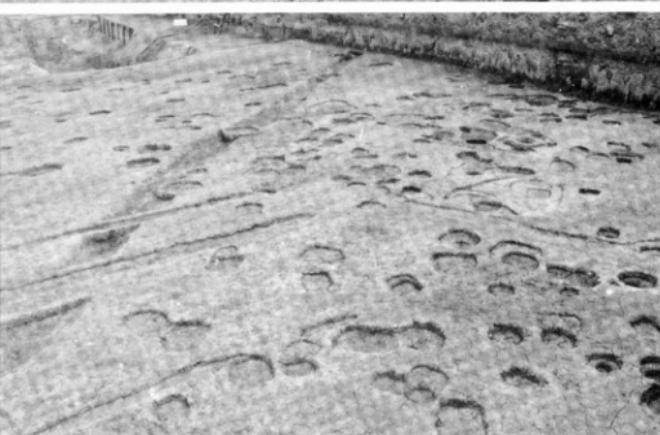
南から





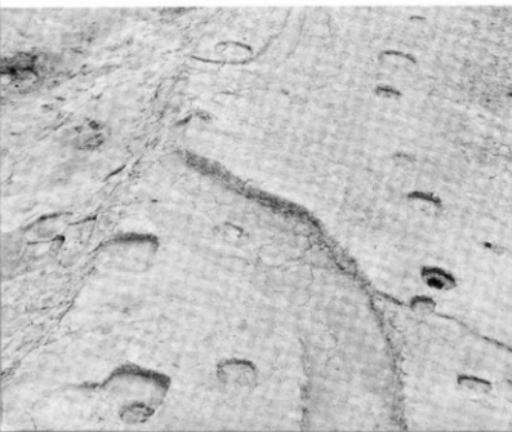
SB3440
3450
3460

南西から



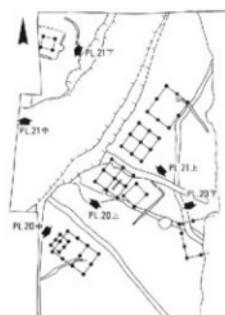
SB3385
3396

北西から



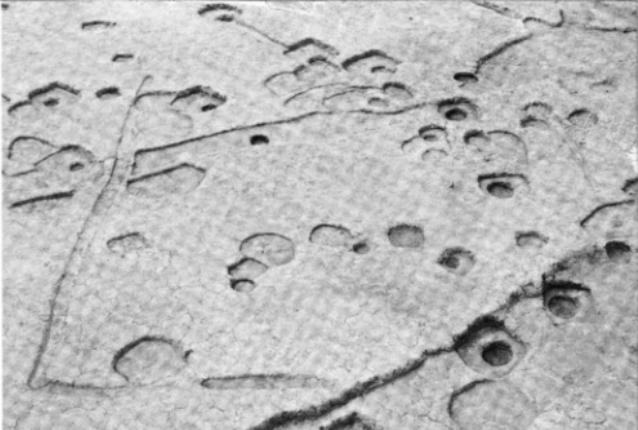
SB3404

北西から

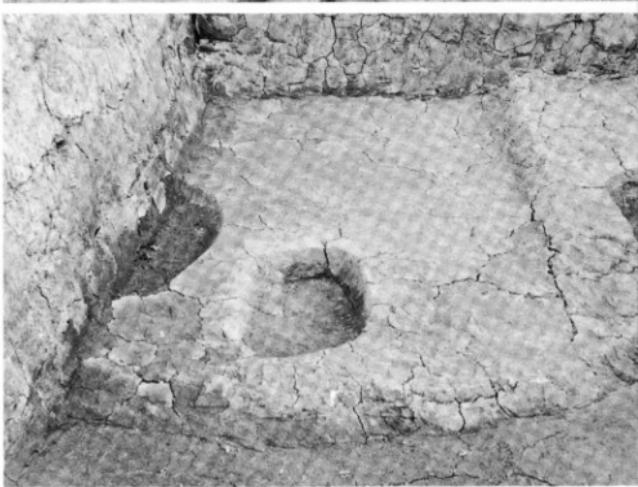


P.L.21 空洞住居跡

SB3430
北東から



SB3485
南から



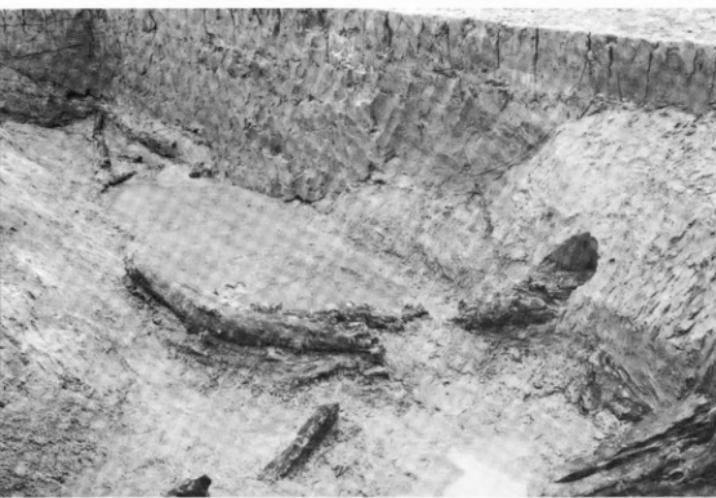
SB3490
東南から





SD3400

東から



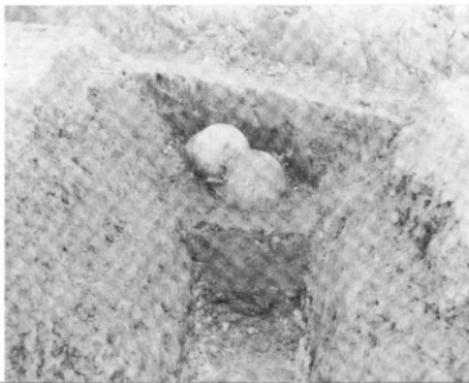
SX3491

南西から



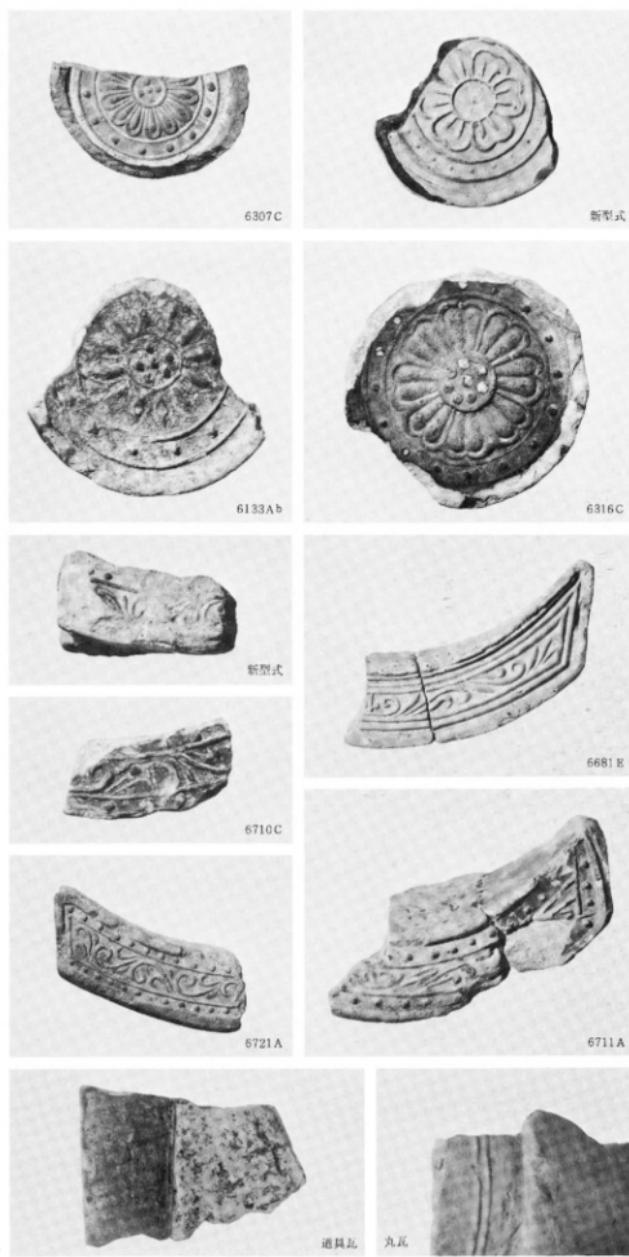
左 SD3311

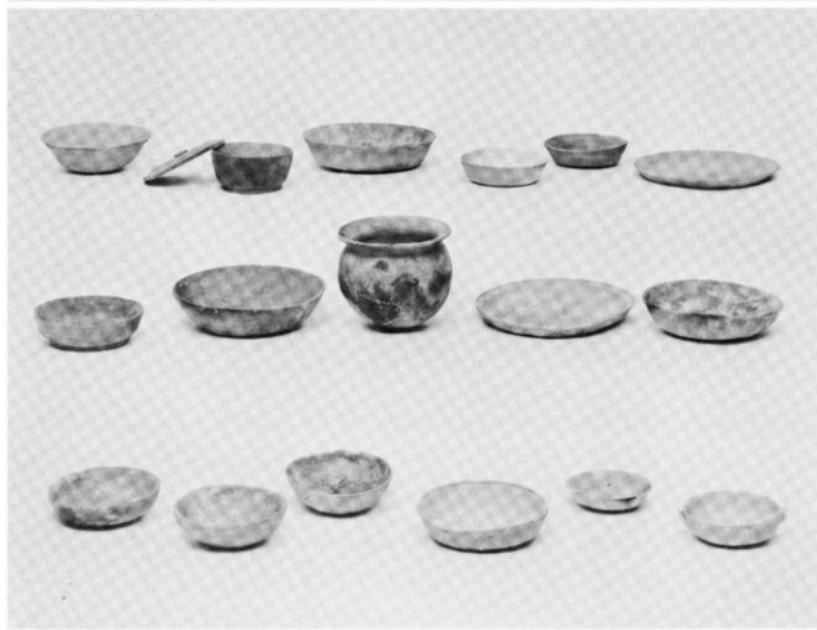
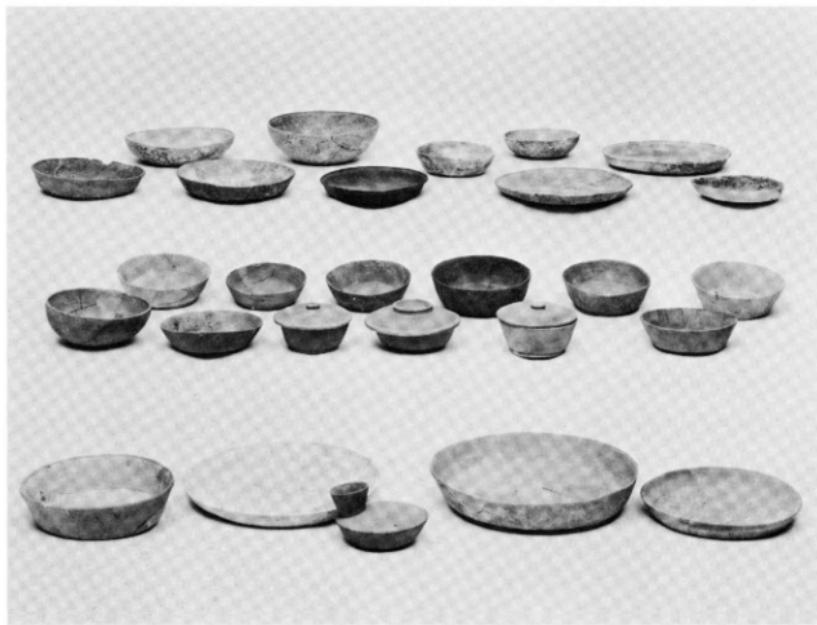
南から



右 SD3222

東南から





上 SK3300出土土器
下 SG3500下層出土土器

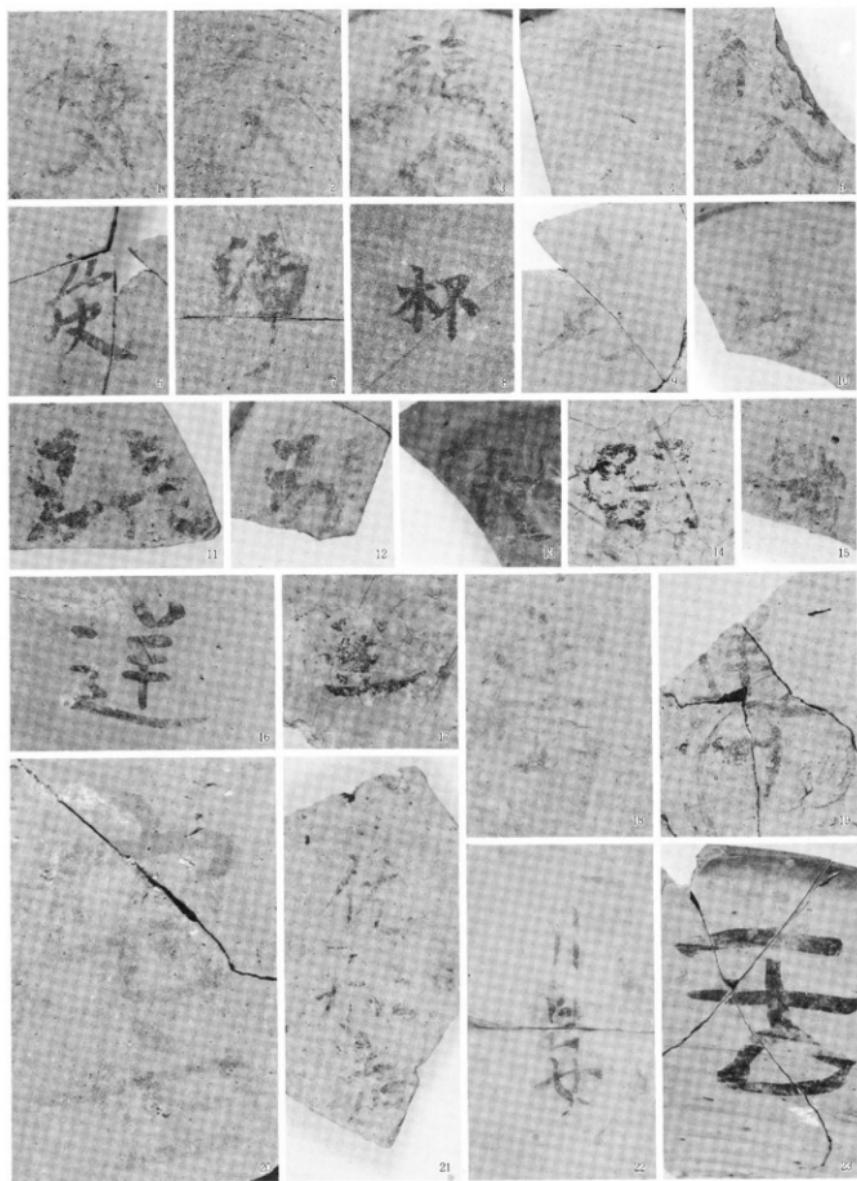


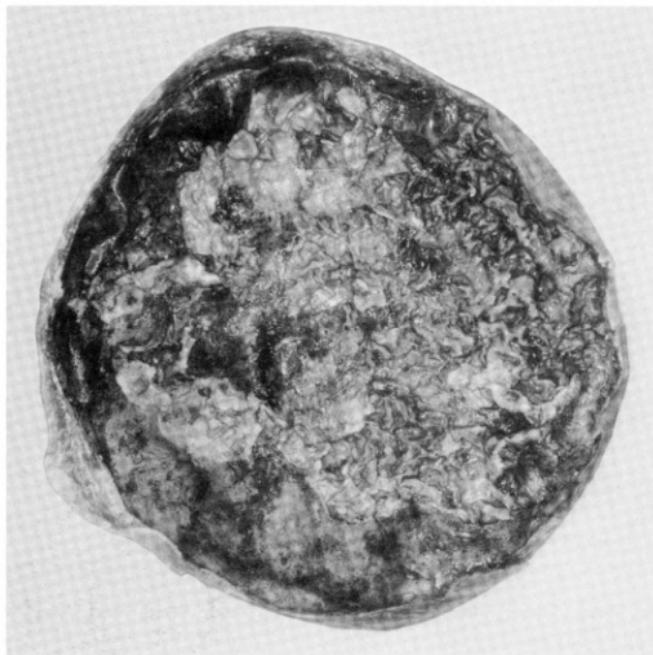
上 SG 3500中層出土土師器
下 SG 3500中層出土須恵器



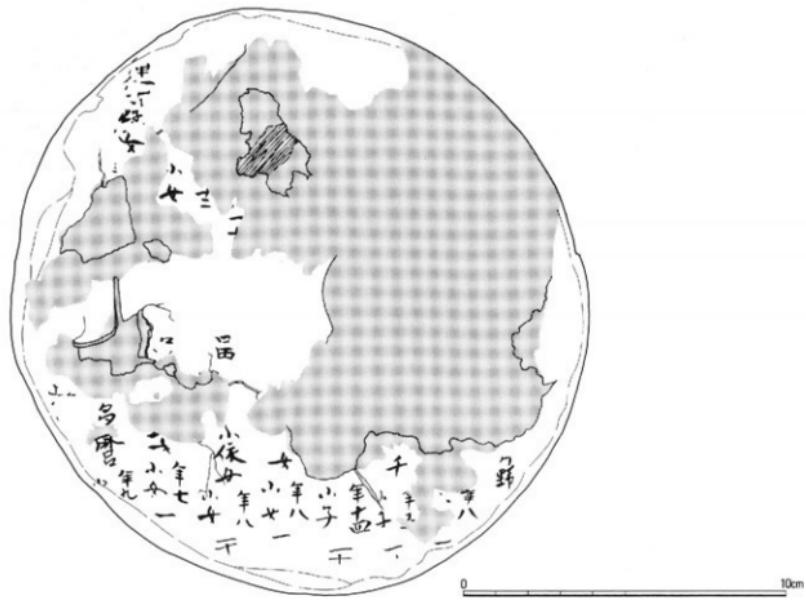
上 SG3500上層出土須恵器

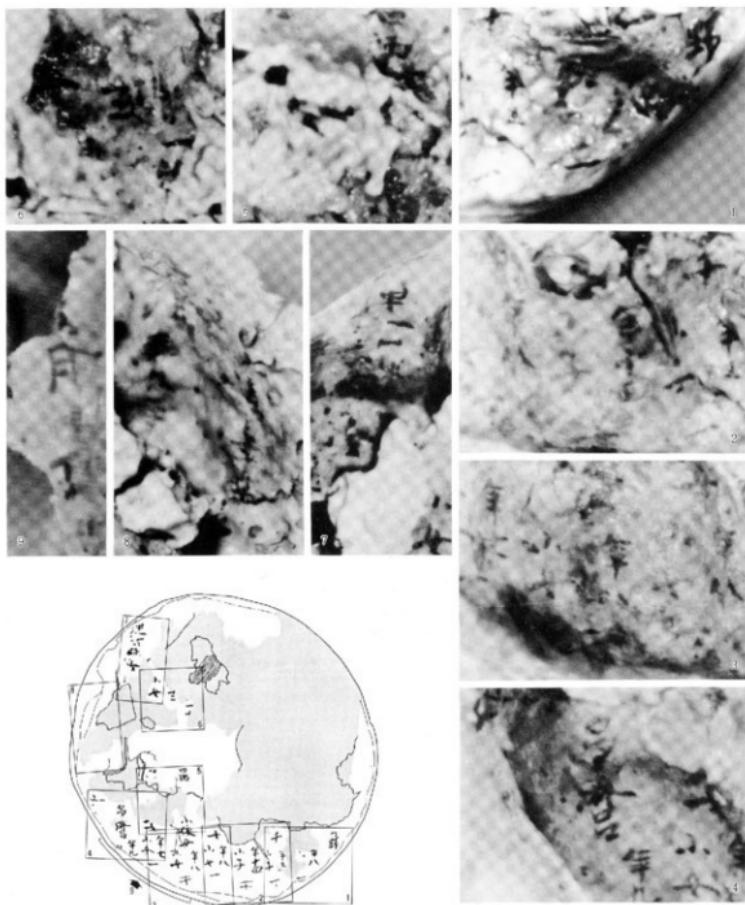
下 埋納土器・漆付着土器



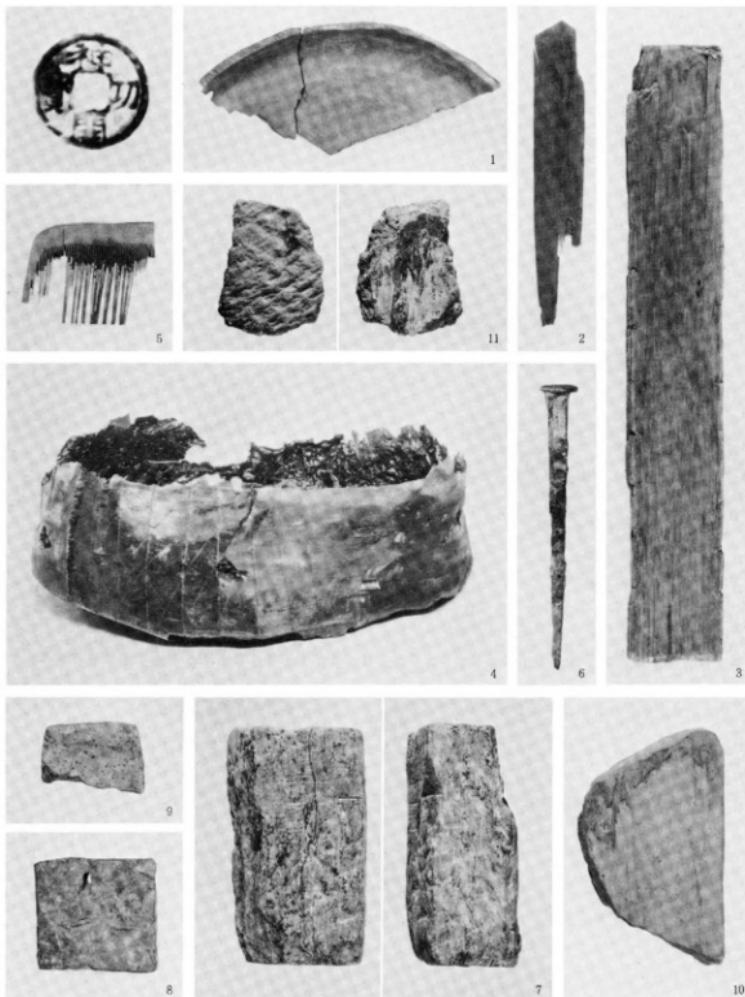


2 : 3 (赤外線テレビによる)

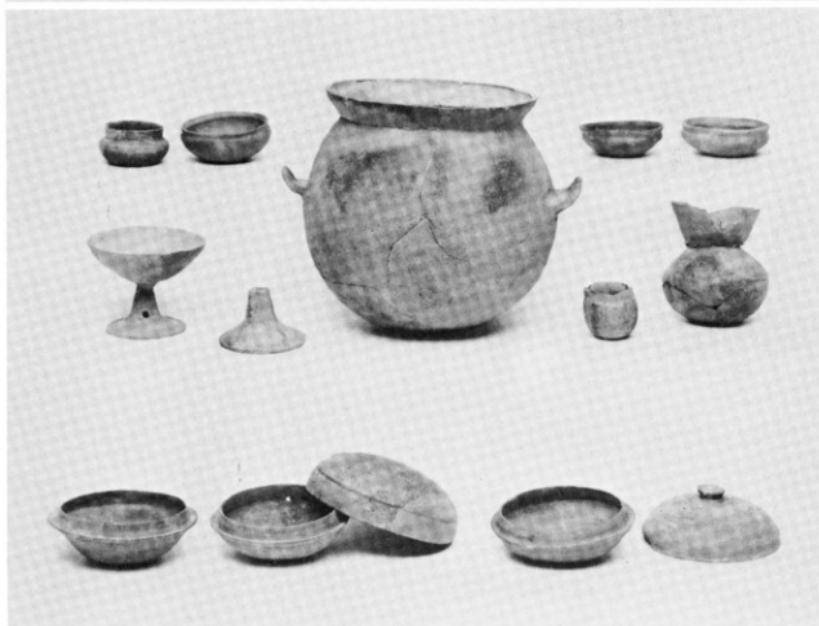




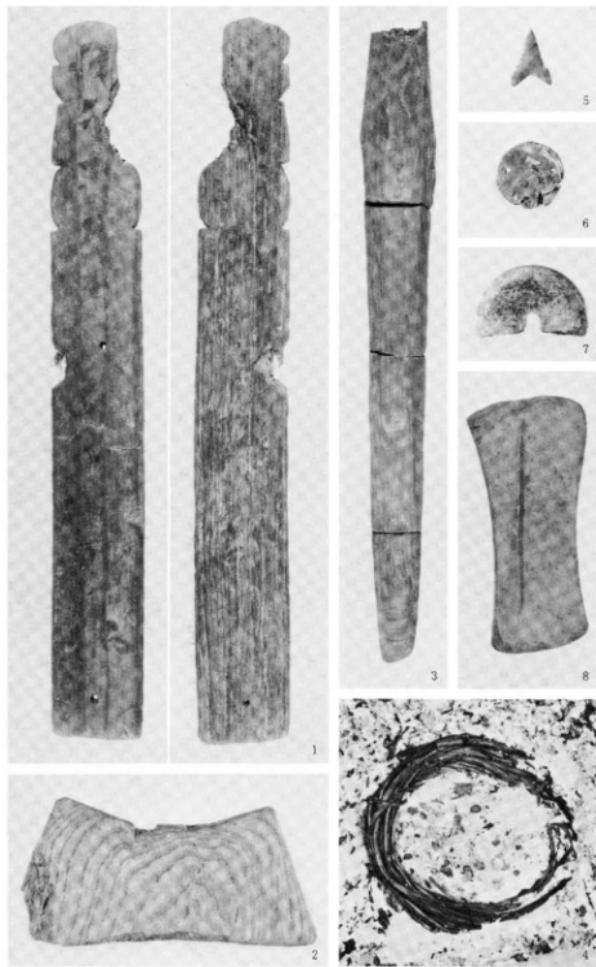
3 : 2 (赤外線テレビによる)



銭貨 (1 : 1) 1~5・11 (1 : 2) 7~10 (1 : 3)

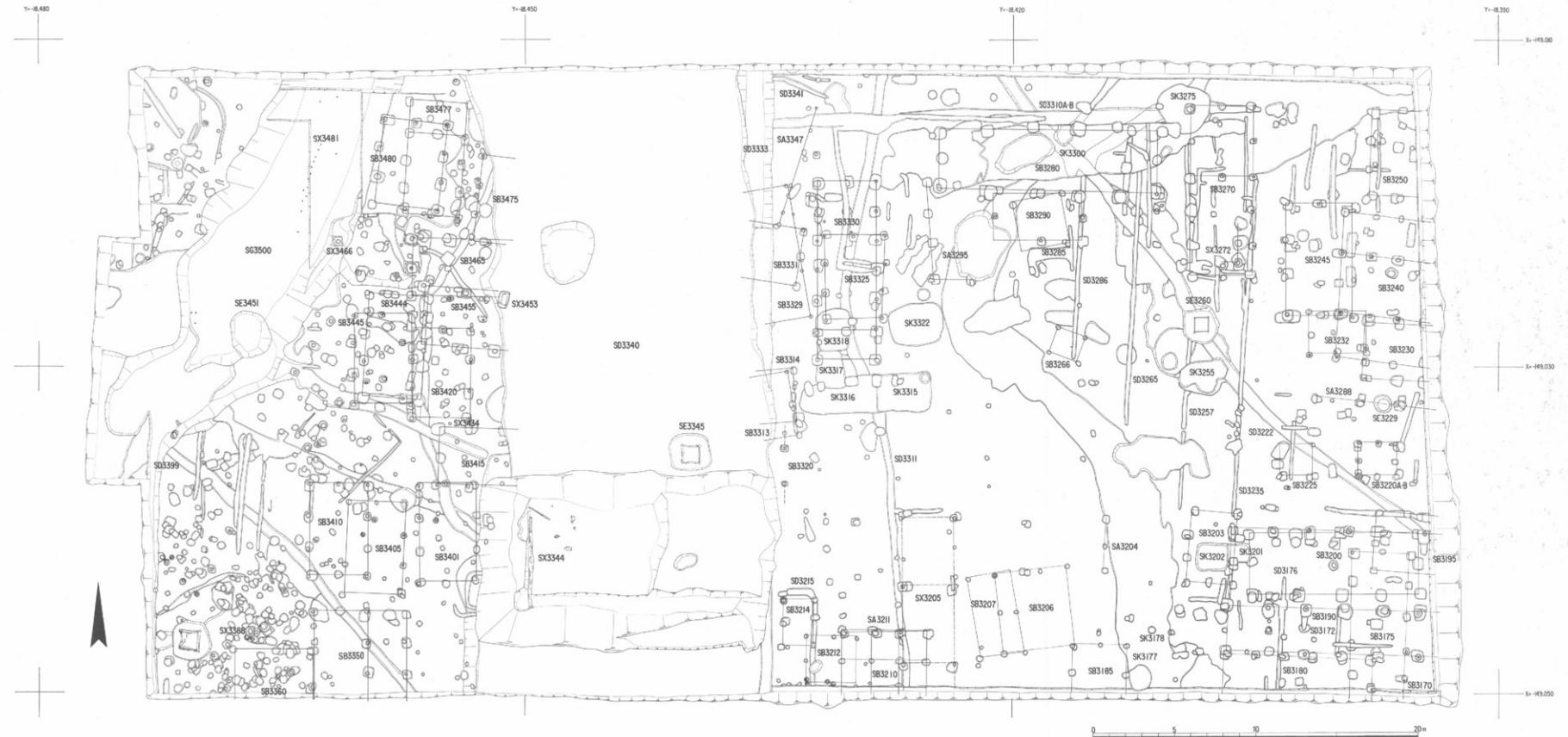


上 SD3222・3311等出土土器
下 SD3400出土土器



1・2・4～7 (1:2) 8 (1:3), 3 (1:4)

平城京左京八条一坊三・六坪遺構図 1 : 200



平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書

昭和60年3月30日発行

編集 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号

発行 奈良県教育委員会
奈良市学大路町

印刷 佐良明新社
奈良市橋本町36番地

